やなぎ台

大陽台貝塚

昭和54年3月

岩手県陸前高田市教育委員会

岩手県陸前高田市

大陽台貝塚発掘調査概要

及　川　　洵
遠　藤　輝　夫
遠　藤　勝　博
金　子　浩　昌
牛　沢　百合子

発刊にあたって

本市は、沿岸なる故をもって貝塚も諸所にありますが、この大陽台貝塚もその一つであり、標柱を建てるなどしてその保存に意を用いてきたところであります。

昭和50年たまたま所有者から開田計画の申しいでがあったので、県教育委員会と協議をいたし記録保存のため、緊急発掘調査をすることになりました。

発掘調査に当っては、県立一関第二高等学校（現：県教育委員会事務局文化課）及川洵先生、県立高田高等学校(現：財団法人岩手県埋蔵文化財センター)遠藤勝博先生、市立第一中学校遠藤輝夫先生にご依頼いたしましたが、特に調査時期が冬期のため、たいへんご苦労な作業を強制した次第であります。

調査が終り、出土物のうち骨角類、動物遺物などについては、早稲田大学の金子浩昌先生ほかのご協力を得ました。

今回この報告書を刊行するに当り、改めて上記の諸先生方、作業にご協力された県立高田高等学校、一関第二高等学校考古学クラブの生徒諸君、資料整理にご協力いただいた早稲田大学研究室の皆さん、そして終始作業を円滑にと何かとご配慮下さった所有者の津田さんに、紙上をもって厚く御礼申しあげ発刊の言葉といたします。

昭和54年3月

陸前高田市教育委員会

教育長　熊　谷　　忠

もくじ

発刊にあたって
第1章　遺跡の立地状況 …… 1
第2章　調査の経過 …… 1
第3章　調査の結果 …… 2
第1節　堆積状況 …… 2
第2節　人工遺物 …… 2
A　土器および土製品 …… 2
a　土　器 …… 2
b　土製品 …… 6
c　土器についての考察 …… 6
B　石　器 …… 9
C　骨角貝製品 …… 9
a　利　器 …… 9
b　装身具 …… 12
第3節　動物遺存体 …… 15
A　貝　類 …… 20
B　魚　骨 …… 21
C　獣　骨 …… 25
あとがき …… 30

図表もくじ

第１図　大陽台貝塚付近の地図 …… 31
第２図　遺跡近辺の地形 …… 32
第３図　発掘区域図 …… 32
第４図　壁面実測図 …… 33
第５図　第１群土器拓影図　第１類・第２類 …… 34
第６図　第１群土器拓影図　第２類・第３類 …… 35
第７図　第１群土器拓影図　第２類・第３類・第４類 …… 36
第８図　第２群土器拓影図　第１類・第２類・第３類・第４類 …… 37
第９図　第２群土器拓影図　第４類・第５類 …… 38
第10図　第２群土器拓影図　第６類 …… 39
第11図　第２群土器拓影図　第６類・第７類 …… 40
第12図　第２群土器拓影図　第８類・第９類 …… 41
第13図　第２群土器拓影図　第７類・第８類・第９類 …… 42
第14図　第２群土器拓影図　第８類・第10類 …… 43
第15図　土器実測図　第１群第２類 …… 43
第16図　土器実測図　第１群・第２群 …… 44
第17図　土器実測図　第２群第６類・第８類・第９類 …… 45
第18図　土器展開図（第２群第８類）・土製品実測図 …… 46
第19図　石器実測図・円形土器片拓影図 …… 47
第20図　石器実測図 …… 48
第21図　尺骨製刺突具 …… 49
第22図　骨角製品 …… 50
第23図　骨角貝製品 …… 51
第24図　有孔の鹿角棒 …… 52
第25図　有孔の鹿角棒推定復原図 …… 53
第26図　参考資料 …… 54
表１　大陽台貝塚出土の動物種とその出土量の概要 …… 15
表２　軟体動物Ｂ２区サンプル出現率表 …… 21
表３　魚類遺存体出土量表 …… 23
表４　マグロ類頭部主要骨の出土量表 …… 24
表５　マグロ椎骨 …… 25
表６　イノシシ歯牙骨角出土量表 …… 26
表７　ニホンジカ歯牙骨角出土量表 …… 27
表８　ニホンジカ角坐骨・角の出土量および形状 …… 28

図版もくじ

ＰＬ１　遺跡遠近景 …… 55

ＰＬ２　堆積状況 …… 56

ＰＬ３　第１群第１類土器 …… 57

ＰＬ４　第１群第２類土器 …… 58

ＰＬ５　第１群第２類・第３類土器 …… 59

ＰＬ６　第１群第２類・第３類土器 …… 60

ＰＬ７　第１群第２類・第４類土器、第２群第１類土器 …… 61

ＰＬ８　第２群第１類・第２類・第３類土器 …… 62

ＰＬ９　第２群第７類土器 …… 63

ＰＬ10　第２群第７類土器、特殊土製品 …… 64

ＰＬ11　石器類、軽石 …… 65

ＰＬ12　鹿角ヘラ状加工品、中足骨製骨ベラ、釣針ほか …… 66

ＰＬ13　鹿角棒先端部、鹿角棒基部～中間部 …… 67

ＰＬ14　自然の鹿角と鹿角棒との対比図 …… 68

ＰＬ15　貝輪、サメ類穿孔品、ツメタガイ穿孔品 …… 69

ＰＬ16　巻貝類、二枚貝類 …… 70

ＰＬ17　二枚貝類、主魚類各種 …… 71

ＰＬ18　マダイ、マグロ類 …… 72

ＰＬ19　マグロ類、マグロ類擬鎖骨 …… 73

ＰＬ20　マグロ類 …… 74

ＰＬ21　マグロ類椎体（Ｂ26Ⅱ層の一ブロック・Ｄ24Ⅱ層の一ブロック） …… 75

ＰＬ22　マグロ類椎体（Ｂ・Ⅱ層の一ブロック・Ｅ24Ⅱ層の一ブロック） …… 76

ＰＬ23　クジラ類ほか …… 77

ＰＬ24　オットセイ、シカ、加工痕をもつ鹿角 …… 78

ＰＬ25　ニホンジカ …… 79

ＰＬ26　イノシシ …… 80

第1章　遺跡の立地状況（第1～3図）

三陸沿岸には、多数の貝塚が発見されているが、中でも大船渡湾周辺には、国指定の蛸の浦貝塚をはじめ、下船渡貝塚、細浦貝塚、大洞貝塚、中沢浜貝塚など著名な遺跡が集中している。

大陽台貝塚は、岩手県沿岸地方最南端の広田半島の西側、広田湾を見下ろす標高50m の高台にある。遺跡の現状は、西側半分が水田化し、残りは畑地である。水田の土堤に貝層が露出している。北側は、すぐ杉林の山となっている。

遺跡は、仁田山（254m）の南斜面に開析された谷中にあるために、割合急な傾斜がある。ここの土は、「さるす」と呼ばれる花崗岩風化土壌で、母岩は今なお畑の中に点在しており、地下にも多量の転石状石塊となって見いだされる。本遺跡の西には小さな谷があるが、これは近代の採石作業による人工地形であり、少し東にも同じような小谷が残されている。

貝などの地表散布は、山裾寄りが濃い。遺跡ののる斜面の下方には大陽部落があり、さらに下方には海がある。海と遺跡の直線距離は、約 900m である。浜は岩石海岸のため、礫が重なっている。

第2章　調 査 の 経 過

調査対象地　陸前高田市広田町字大陽103の1（所有者　津田武治郎氏）

調 査 期 間　昭和51年12月27日から昭和52年1月7日までの8日間

調 査 主 催　岩手県陸前高田市教育委員会　　教育長　熊谷　忠

発掘担当者（調査員）　及川洵（県立一関第二高等学校教諭）、　遠藤輝夫（陸前高田市立第一中学校教諭）、遠藤勝博（県立高田高等学校教諭）

骨角器および自然遺物整理担当

金子浩昌（早稲田大学講師）、牛沢百合子（早稲田大学考古学研究室）

調査補助員　県立高田高等学校考古学同好会（石川晃一、熊谷孝一、千田正弘、村上一彦、大森裕治、中村康、村上浩、小林美代、村上恵美、村上まゆみ、野田義則、千葉義隆）、県立一関第二高等学校史学部（千葉均、若松透、小岩素彦、小野寺洋、菅原栄亀、本城敏也、菅原和昭）

今回の調査は、土地所有者の開田希望を契機として企画されたもので、開田予定地内の遺跡の広がりを把握することを目的としている。

開田予定地の畑地には、広範囲にわたって、貝・獣骨・土器が観察できる。最初、山際の遺跡標柱から約13m 南の地点を原点として、2m 四方の方眼をつくり、南北は算用数字、東西はアルファベットを用いて各調査区の名称をつけた。

ところが、開田は山際からという話があったため、B 4区・B 6区は中止して、B22・24・

26区を新たに設け、D24・F24区も増やした。発掘面積は55㎡と小さかったが、貝層が予想外に厚いことに加えて、当地方では異例な厳しい寒さに見舞われ、期間内に満足できる調査を終えさせることができなかった。土層は、一夜のうちに3～5㎝位が凍結してしまった。

やはり当地方では、冬期間の発掘調査は好ましくないようである。

第3章　調査の結果

第1節　堆積状況（第4図）

現地表面は南南西に向かって傾斜しており、地山である明褐色土層上面もほぼ同じ傾斜となっている。しかし、中間の貝層、土層の傾斜はこれと必ずしも一致していない。B22区からB24区にかけては、大きなくぼみの中に地表とは逆の傾斜で堆積している層が見られる。B列では一般に地表面より急な傾斜が断面に現われており、D列ではほぼ地表面に平行する堆積の仕方をしているが、東西方向では、西端近くで突如急傾斜となる。堆積層は南に行くほど、また西に行くほど厚味を増している。B2区では深さ1.5mの中に数枚の純貝層があり、単一層で30～40㎝に達するものもある。貝層には灰層が伴っている例が多い。

遺構としては、焼土遺構が確認されたにすぎない。F24区、G24区に若干の焼土があり、D24区の堆積層下面にも焼土遺構が存在する。これは地下約1mにあり、上に4㎝位の灰がのり、焼土は左右に分かれて、一方の外側と中央底面に小礫が配されたもので、全体がくぼみとなっている。左右で90㎝位の大きさがある。

第2節　人工遺物

A　土器および土製品

a　土　器

次のように、2群14類に分けた。

(a)　第1群土器

縄文前期に属するものを一括し、4類に細分した。

第1類土器（第5図1～15、PL3）

小破片のみで、器形の全体を知ることはできないが、口縁部が外反するバケツ状のものであろう。口縁部が内湾するものもある（第5図1）。大きい、波状口縁もみられる（第5図5・13）。この類の特徴は、幅2～3㎜の細い粘土紐を貼りつけて文様を表現することで、中心的文様は振幅1㎝位の鋸歯状文である。その他、少数ながら、縦横に粘土紐を交差させた梯子状文もある（第5図1～6）。横方向の鋸歯状文が最も多く、縦に走るもの（第5図

14)、縦横に連なるもの（第５図12）は少ない。きわめて太い貼付文（第５図15)、きわめて細い貼付文（第５図13）は、各一片のみである。第１類はＢ26区４層、Ｂ２区北壁16層以下を中心として出土した。

第２類土器（第５図16～20、第６図21～28、第７図31・32、第15図①・②、ＰＬ４、ＰＬ５、ＰＬ６上）

上半が外反するバケツ形のもの（第15図①)、肩が丸くふくらみ頸部が少し、しぼんで口縁がわずかに外反するもの(第15図②)、口縁部が強く内反するもの（第６図21）等、数種類の器形があるが、鋸歯状沈線文こそこの類の最大の特徴である。縦なら縦、横なら横方向に平行して施される場合が一般的であるが、縦横に組み合う例(第６図23・26、第15図①・②)、渦巻文が主文様となる例（第17図31・32）もある。鋸歯状文は、単純な沈線による表現がすべての例に共通している点であるが、第６図22はそういう意味では異端である。この例では沈線の周囲を斜めに削り取ることによって、沈線とも隆起線ともつかない複雑な効果をもつ表現に成功している。第２類は、Ｂ26区４層以下を中心にＢ列各区の下部から出土した。

第３類土器（第６図29・30、第７図33～39、ＰＬ６下）

鋸歯状文は確認できないが、器形、突起等から上記の第１・２類近似のものを一括した。口縁部の鋸歯状彫刻文（第15図①）の仲間として第６図29・30、第７図39があげられるだろう。また、第７図33にはかすかに縦方向の鋸歯状文が認められるので、同様の突起をもつ第７図34～36も同一の類としてよい。この円環状突起の中心孔は、貫通する場合としない場合がある。円環には小さな刺突文が施されている。方形ではあるが同様の文様がある第７図37も、この類に入るべきものである。これらは、第１・２類と同じ層位から出土している。

第４類土器（第７図40～42、ＰＬ７下）

半截竹管を用いて施したような細い沈線文が、特徴的なものである。複数の横走する沈線文と、斜行する沈線文によって文様が構成される。幅広い沈線文が土器上端に施されることも少なくないようで（第７図40・41)、第７図の40の場合は、太い沈線によって表現された文様帯が口縁部を飾り、体部に細い沈線文による文様帯をもっている。この類は３個の破片しかないので、文様構成全体は不明である。器形は、上半がゆるいＳ字形断面の深鉢となるもの（第７図41・42）と、内反気味に開く口縁部をもつ深鉢形（第７図40）の２種類ある。この類はＢ列の22区８層、24区４層、26区６層から別々に出土した。なお、第７図38は、口唇を内外から刻みこんでいる点は第１群第３類的であり、細い沈線文は同第４類的であるが、一応第３類に含めておく。

(b) 第２群土器

縄文中期に属するもので、10類に分けた。

第１類土器（第８図43～46、ＰＬ７下）

平行沈線間を密な平行沈線でつなぐ、細かい文様を特徴とする。これに三角形の刻みが伴う。刻みのある太い粘土紐が縦に、また頸部に加えられる例もある（第８図43)。器形は、

口縁部が内湾しつつ大きく開く。第８図46は、かなり雑な文様であるが、平行沈線による文様構成は前三者と基本的に同一である。だが器形は逆の反りを示している。縦の粘土紐貼りつけが剝落した痕もある。第１類は、Ｂ４区の耕土の下層から出土したのみである。

第２類土器（第８図47～51、ＰＬ８）

第１類の文様と異なる単位の大きな沈線文をもつ土器を、一括した。47は角の２つある大きな波状口縁の頂点部の破片で、平行する２本の沈線による文様がある。48は逆くの字の沈線文、51は長楕円形の囲いの中に連続山形沈線文が施されている。49・50は同一個体と思われるが、大形の渦巻文突起の意匠が若干異なり、口縁部文様は撚糸圧痕による渦巻文のようである。器形は51の上半がわかるのみであるが、胴上端がゆるくしまって口縁部が開く、いわゆるキャリパー形に近い器形であろう。この類が集中的に出土する層位はなく、以下の類に混じって少量出土しているにすぎない。

第３類土器（第８図52～55、ＰＬ８）

隆起線による波状懸垂文を、もつものである。52は口縁部に隆起線で長楕円形をつくり、その接する部分に波状懸垂文が加えられている。長楕円形の内部には、撚糸圧痕文が施されている。53は、52と同じ文様とはいえないが、懸垂文の部分が変形しているものとみなした。54は、前二者とはまた異なってはいるものの、52近似のものとして入れた。55は、撚糸圧痕という施文法と文様構成が異なるが、懸垂文という点で入れておく。器形はまちまちであるが、53の下には51のような筒形の胴がつくと思われる。52はＢ22区６層、53・54はＦ24区耕土中出土品である。55はＤ23区２層出土。

第４類土器（第８図56、第９図57～59）

渦巻文を伴う、隆起線と沈線文を組み合わせた口縁部文様をもつ。隆起線長楕円形で区画するもの（56・58）と、斜めの隆起線ないし沈線文で区画するもの（57・59）の二種出土している。後者の器形は、いわゆるキャリパー形で、前者は口縁部が直線状であることから、51のような器形が想定される。これらは、後記の第５～９類に混じって出土した。

第５類土器（第９図60～62）

隆起線２本を対にして、キャリパー形器形の口縁部に大形渦巻文を展開している。体部の方は、60からうかがうと縄文のみと思われる。すべてＢ24区３層下部から出土している。

第６類土器（第10図63～67、第11図68・69、第17図⑩～⑫）

いずれも屈曲の強弱の差はあれ、キャリパー形器形土器で、口縁部に小さな渦巻文がついている点が共通している。ただし、63は器形近似ということでここに入れたが、厳密には、器形（浅鉢形）と文様（隆起線１本構成）ともに異類というべきものである。第６類の文様は２本１組の隆起線によって構成され、それをはさむように沈線が施されて立体感を強めている。体部文様はあっさりしており、縄文のみ（64）、無文帯をはさんで縄文（68・69）、縄文地に直線的区画文（65・68・⑩・⑪）、無文（67）等規制されていない。文様がある場合でも、口縁部と対照的にほとんどの体部文様は沈線によって表わされる。この類は、Ｄ23区２

層、D24区２層、E24区２層から集中的に出土している。

第７類土器（第11図70～75）

底が、口より直径の小さいビール樽のような器形に、渦巻文が全面的に施されたものである。口縁部は内湾し、ゆるやかな波状となる。文様は２本１組の、隆起線によって表わされる。B24区３層、D23区とD24区の２層からの出土量が多い。

第８類土器（第12図76～80、第13図86、第14図91）

器形は、金魚鉢のように球形の胴部に外反する波状口縁がつくもので、体部に渦巻文が施される。口縁上端に隆起線と沈線によって表わされた渦巻文がめぐるもの（76)もあるが、その下は無文で、頸部以下に主文様帯がある。主文様は、縄文地の上に、３本１組の沈線によって渦巻文が描かれる。この表現方法は、第２群５～７類に見られる隆起線手法を簡略化したものであろうか。この類はB24区３層、D24区２層から出土している。第14図92、第17図⑯、第18図⑰（ＰＬ９・10）もこの類に近いが、隆起線表現という手法が異なる。

第９類土器（第12図81、第13図82～85、第17図⑭・⑮）

少し胴の締まったバケツ形をして、主に沈線によって、水平・垂直の区画文や渦巻文を表現する。口縁は、きわめてゆるやかな波状のものが多い。D23区とD24区２層、E24区３層から出土している。特異な文様表現の84のみは、B24区３層から出土している。

第10類土器（第14図93～97）

比較的小形の土器で、渦巻文が縦方向に強く規制されているものをまとめた。器形の不明なものが多い。96によると、胴部がふくらむ、丁度第２群第８類のような形のものが考えられる。この類は93を除き、B24区３層から集中的に出土している。他と比べて立体的表現が目立つ93は、D24区２層出土である。

そ　の　他

第13図87～89、第14図90は、器形、文様表現から第２群第７類に、第16図③は器形から第１群第１～３類に入り、第16図④は伴出関係から第２群第８類に、第16図⑤は同類なく、第16図⑥・⑧・⑨は器形等から第２群第６類に、第16図⑦は層位から言えば第１群第１～３類に、第17図⑬は器形から第２群第６類にそれぞれ入れるのが適当と思われる。ただ、第16図の⑥・⑧のような小刺突のある粘土紐貼付文は、類例がない。

以上、14区分して出土土器の概略を記したが、これらを従来の編年に当てはめれば、次のようになるだろう。

第１群第１～３類 → 大木５式

ただし、第５図（５・15）は大木４式に入れるべきものかもしれない。

第１群第４類　→ 大木６式

第２群第１類　→ 大木７ａ式

第２群第２・３類 → 大木７ｂ式

第16図⑤もここに入る。

第２群第４類　　→ 大木８ａ式

第２群第５～９類 → 大木８ｂ式

第２群第10類　　→ 大木９式

第17図の⑯は、器形では第８類に近似するが、大木９式に入るものである。この文様によく似た第14図の90も、大木９式に入るべきものと思われる。

結局、今回調査した区域の貝塚が形成された時期は、大木４式から大木９式までにわたっており、その中でも、大木５式と大木８ｂ式の二時期に主に形成されたものである。大木５式はＢ２区を中心として下部堆積層中にあり、大木８ｂ式は、Ｄ23・Ｄ24区の貝層を中心として、ほぼ全域の上部堆積層中に含まれている。その他の型式は、量的にはきわめて少ない。

堆積状況から推測すると、大陽台の縄文人は、調査区域の北東方向に生産居住の場をもうけ、南西方向のくぼ地を廃棄物の投棄場として土器片、貝殻、獣骨等を投棄していたようである。そして、前記のとおり、大陽台のこの部分については、二つの盛んな時期があったことがわかる。

ｂ　土　製　品（第18図⑱、ＰＬ10）

特殊な形の土製品が、Ｅ23区第２層（大木８ｂ式期）から出土した。長さ 9.5㎝、最大幅6.9㎝、厚さ5.0㎝の変形五面体で、最も広い二面に沈線でＥ字形の渦巻文が施されている。この文様は、両面対称的に配置されている。次に面積の大きい二面には、深さ約１㎝の、長二等辺三角形状凹みが彫ってあり、三角形の底辺同士は、直径３㎜、長さ６㎜の小孔で結ばれている。三角形の凹みの周囲にも、沈線が１～２本めぐっている。最も面積の小さい面には、何も装飾が加えられていない。一辺は鋭い綾をなしていて、その両側の面はかなり広い範囲にわたって摩滅している。用途不明品である。小孔が紐通し孔とすれば、一種の垂飾とも考えられる。出土状況も、特に変ったことはなかった。

土器片を利用して円形に整形したものが４点、いずれもＢ列の大木８ｂ式期層から出土した。(第19図㉝～㊱)。　　（遠藤勝博）

ｃ　土器についての考察

ここで土器について、若干考察をおこなってみたい。すでにのべたように、第１群土器は縄文前期に属するものである。この第１群土器は４類に細分できるが、第１類に分類される土器の主文様は山形状貼付文である。第２類は鋸歯状沈線文に大きな特徴をもつ土器群であり、第３類は器形・突起等から第１類・第２類に近似するものを一括した。これらの土器のなかには、すでにのべたように、大木４式に含められるものもあるが、主として大木５式に分類できるものである。

ところで、大木５式にみられる一般的特徴とはどういうものか。これまでに理解されている大木５式の内容は、「器形は口縁部が外反する円筒形または植木鉢状を呈し、文様は器上部に細い粘土紐を貼付した連続山形文が特徴である。また口唇には、大きな鋸歯状の切り込みをつけた分厚い装飾体をもつものである」とされている。

興野義一氏によれば、大木５式は５ａ式と５ｂ式に細分されるという。５ａ式の装飾体は鋸歯状装飾体と環状装飾体があり、鋸歯状の場合は切り込みは深いが鋸歯数は少ない。環状装飾体には、刺突による多点文をつけることがある。また粘土紐貼付による連続山形文も縦位や横位や斜位、電光形と大木４式の流動性がまだ残っているが、しだいに横位に平行して数段に貼付されるようになる。

５ｂ式は、鋸歯状装飾体は小形化し、鋭利になり口周の半ばまたは全周に拡がるようになる。窓が出現するが、まもなく退化する。粘土紐貼付文は２～３段ぐらいになり、宮城県長者原遺跡の例では、１段だけのものがむしろ多いという。この貼付文がやがて半截竹管による沈線文に変わることになる。

これらとは別に大木５式には少数の鋸歯状沈線文の系列があり、これは５ｂ式の沈線文とは異なり大木４式土器の沈線系列をひくものであって５ａ式にあり、５ｂ式までに達しないか、あるいは繊細な山形沈線文になるらしいという。

ところで大陽台貝塚の第２類土器は、植木鉢状あるいは、かめ型の器形を有し、鋸歯状沈線文が主要な文様の土器群である。これまで岩手県内においては、大木５式土器の出土する遺跡は多くなく、内容も明らかでなかった。本遺跡付近では、牧田貝塚（陸前高田市）、清水貝塚（大船渡市）、宮野貝塚（三陸町）、庄子合遺跡（一関市）、中島遺跡（水沢市）、などがある。また宮城県では、磯草貝塚（気仙沼市）、青島貝塚（登米郡南方町）、などがあり、また前記の長者原貝塚（登米郡南方町）がある。これらの遺跡のうち長者原貝塚を除き、遺物の量が少なく、また長者原貝塚でも、本遺跡の第２群土器のような沈線文系の土器は見られない。この沈線文様は、大木３式に見られた半截竹管によらない一本沈線文の系列をひくと思われ、大木４式を経て、大陽台第２類へ引き継がれたものと推定される。

いずれにしても、この文様構成は大木５ａ式の貼付文の中に見られ、大陽台貝塚では貼付文に代わり、沈線文が使用されたと見ることができる。その意味でこれは貴重な資料となるだろう。（第７図38は口縁の鋸歯状装飾体および半截竹管文の装飾文様をもつところから、大木５ｂ式の中に含められるものであろう。）

他の第１群第１類・第２類は共に大木５ａ式に属する文様構成であろう。第１群第４類土器は、前記の沈線文土器群の系列に含まれるもので、さらにこれが第２群第１類へと発展していくとみられる。しかし、今回の調査では出土土器も少なく、発展の系統は不明である。

本遺跡の上層文化層として把握される大木８ｂ式は、第２群第５類から第９類に分類されている。主要な特徴は、器形はキャリパー形であり、渦巻文やフ字状のトゲが見られることである。この時期になると、出土遺跡も多く、大船渡市の清水貝塚、蛸の浦貝塚、長谷堂貝

塚、崎山弁天遺跡（大槌町）、貝鳥貝塚（花泉町）、中島遺跡（水沢市）、樺山遺跡（北上市）、繋遺跡（盛岡市）、大館町遺跡（盛岡市）、日戸遺跡（玉山村）、森ノ越遺跡（岩泉町）などの岩手県内の遺跡をはじめ、宮城県の大木囲貝塚を含む松島湾周辺の遺跡など多数出土している。大木８ｂ式は関東地方の一部から東北南部、中部に広がり、東北北部の円筒式土器の分布圏にも浸透しており、その範囲は広大である。大木８ｂ式は、関東地方の加曽利ＥⅡ式と関連がみられるなど、文化圏内の器形・文様には強い斉一性がみられる。

（及川　洵）

参　考　文　献

及川洵・遠藤勝博・及川千代松・金子浩昌「牧田貝塚発掘調査概要」陸前高田市教育委員会（昭46）

西村正衛・菊池義次・金子浩昌「岩手県大船渡市清水貝塚」古代29・30号（昭33）

林謙作「大船渡市清水貝塚発掘調査概報」岩手県教育委員会（昭51）

吉田義昭ほか「宮野貝塚遺跡調査概報」三陸町教育委員会（昭45）

遠藤輝夫「庄子合遺跡発掘調査概要」（第二次調査）一関市教育委員会（昭52）

草間俊一・伊藤鉄夫・及川二男・菊池郁雄「水沢の原始・古代遺跡」水沢市教育委員会（昭40）

高倉淳「宮城県気仙沼市大島磯草貝塚出土の土器について」
仙台湾周辺の考古学的研究　宮城教育大学歴史研究会編（昭43）

加藤孝・後藤勝彦「登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告」宮城県南方町（昭50）

西村正衛「蛸之浦貝塚」大船渡市教育委員会（昭33）

草間俊一・及川洵ほか「長谷堂貝塚」岩手県教育委員会（昭47）

草間俊一編「崎山弁天遺跡」大槌町教育委員会（昭49）

草間俊一・金子浩昌編「貝鳥貝塚」花泉町教育委員会（昭46）

江坂輝弥ほか「江刺郡稲瀬村樺山遺跡」岩手県教育委員会（昭29）

草間俊一ほか「北上市稲瀬町樺山遺跡緊急調査中間報告」北上市教育委員会（昭42）

吉田義昭「甕棺と思われる縄文文化中期の土器群」石器時代３（昭31）

吉田義昭ほか「大館町遺跡」盛岡市教育委員会（昭53）

草間俊一「岩手県日戸遺跡調査報告」岩手大学学芸学部年報第10巻、第14巻

佐々木義則ほか「森ノ越遺跡」岩泉町教育委員会（昭53）

興野義一「大木式土器理解のために（Ⅳ）、（Ⅴ）」考古学ジャーナル№24、№32

興野義一「大木５ｂ式土器の提唱」古代文化　第22巻４号

丹羽茂「東北地方南部における中期縄文時代中・後葉土器群研究の現段階」福島考古学会（昭46）

B 石　　器　（第19図、第20図、ＰＬ11）

石鏃５点、石匕３点、玦状耳飾１点、円柱状石製品１点、石剣１点、石棒３点、打製石斧３点、凹石１点、長方形石器１点、円礫４点、軽石９点が出土した。

石鏃はすべて無茎で、単純なもの（⑲・㉒）のほか、トゲの不釣合のもの（⑳）、下端がW字形のもの（㉑）などがある。⑲・⑳は大木５式期、他は大木８式期の層から出土した。

石匕は縦形と横形とがあり、縦形は大木５式期、横形は大木８式期の層出土品である。

石鏃、石匕はほとんど頁岩を用いているが、縦形石匕は砂岩のように粒子の粗い石材を使用している。

玦状耳飾は大木８ｂ式期層出土品、円柱状石製品は大木５式期層出土品である。後者は軟質の石を用いており、一端に小さな凹みがあり、側面全体に縦方向の擦痕が見られる。

石剣（㉙）は大木５式期、石刀状の石棒（㉜）は大木８式期のものであり、自然石利用石棒（㉚）は大木８式期、２本の刻みのある石棒（㉛）は、表面採集品である。

打製石斧というよりも握斧的に使用されたと思われる３点（㊲～㊴）は、いずれも原面を残している。すべて大期８式期のものである。凹石は図示しなかったが、12.6㎝×9.7㎝の楕円形の花崗岩礫を利用し、片面の中央に３㎝×２㎝の大きな打痕が、反対側にはかすかな打痕がある。全体がきわめて平滑なので、磨石にも使用された可能性がある。中期のものである。長方形石器はＦ23区耕土中出土品で、側面の一部に手擦れのように滑らかな面が見える。

軽石９点はすべて大木８式期の層から出土しており、すべて丸味が加えられている。１点（ＰＬ11下の左上隅）には溝があり、他の１点（前記のものの下）の１面は平たんになっているので、工具等の用除が考えられる。

C 骨角貝製品

大陽台貝塚からは、縄文中期中葉大木８ｂ式を中心とする時期の骨角貝製品計34点が出土している。ヘラ状加工品、骨針類が大半を占め単純なつくりのものが多い。

a 利　　器

(a) ヘラ状骨器（シカの中足骨製）

１．Ｂ24Ⅱ（大木８ｂ）　　第22図13　ＰＬ12－22

現存長　91.4㎜　　最大幅　33.5㎜

基部から中間部にかけてを残存し、先端は欠損する。シカの中足骨右側近位端～中間部側面を利用。縦溝に沿ってすり切ったもの。近位端を残して把手としている。

２．Ｂ24Ⅱ（大木８ｂ）　　第22図16　ＰＬ12－19

現存長　81.7mm　　現存幅　20mm

先端部を残存。

シカの中足骨後面を利用している。中足骨を縦に裂いたときの凹凸面が、両側にそのまま残っている。先端部のみ薄くなっており、内側面には細かな使用痕と思われる擦痕が走っている。

3．出土地点不明　　第22図14　ＰＬ12−20

現存長 101.4mm　　現存幅　18.1mm

基部を欠損。

シカ中足骨後面½裂を利用。完存していれば、1．と同じく近位端を把手とし、1．よりはやや大きくなるものと思われる。

4．B24Ⅱ貝層（大木８ｂ）　　第23図15

最大長 108.2mm　　最大幅　22.5mm

完存品。

シカの中足骨右後面近位端〜中間部を利用。½に縦に裂くときの加工は荒く、整形は、ほとんどみられない。先端部は薄くなり、ヘラ状に使用したことが分かる。

5．出土地点不明　　第23図17

現存長　54.5mm　　現存幅　10.0mm

先端部のみを残すもの。

シカの中手骨あるいは、中足骨の側面を使用。かなり小型の骨を、使ったもののようである。先端の表裏が薄くなる形状からみて、やはりヘラ状の用途をもつものであったと思われる。

(b)　骨製刺突器

1．B26Ⅱ（大木８ｂ）　　第22図10　ＰＬ12−８

最大長 133.5mm　　最大幅　17.1mm

完存品。

シカの中手骨右内側後面の近位端〜中間部を利用。全体の¼を縦に裂いたもので、後面の骨質の厚いところを利用している。近位端を基部の把手に充て、その下方がややくびれる。先端は断面が円形となり、刺突具としての用途が考えられる。

2．B26Ⅱ（大木８ｂ）　　第22図９　ＰＬ12−７

現存長　36.9mm

全体によく整形されている。

(c)　ヘラ状鹿角製品

1．D24Ⅱ（大木８ｂ）　　ＰＬ12−18

最大長 170mm

右側第三枝分枝部前〜内側を利用。第三枝を基部のみ残し折りとり、角幹を分岐部から上

方へ長く擦り切って半截し、先端をヘラ状に薄くすりへらしたもの。

2．B26Ⅱ（大木８ｂ）　第23図21　ＰＬ12－15

最大長 107mm　　最大幅 25.5mm

左側第一枝分岐部の角幹前方と内側の一部を含めて使用。やはり角幹はすり切りによっている。先端は表裏ともよく磨滅している。

3．B26Ⅳ（大木８ｂ）　ＰＬ12－16

最大長 111.5mm　　最大幅 29.5mm

右側第二枝角幹部内側。すり切り法により角幹を半截する。中央に角表面のやや目立つ溝が走るが、先端部分ではすりへって見えなくなっている。幅も先端に行き、急に狭くなる。

4．B26Ⅱ（大木８ｂ）　第23図22　ＰＬ12－17

最大長 125.3mm　　最大幅 23.0mm

右側第二枝角幹部外側。一方をすり切り、一方をたたいて裂きとったもの、先端部は長軸方向に沿って走る細い条線がみられる。

(d) 棒状角器

1．出土地点不明　第22図11　ＰＬ12－12

最大長 81.0mm　　最大幅 17.0mm

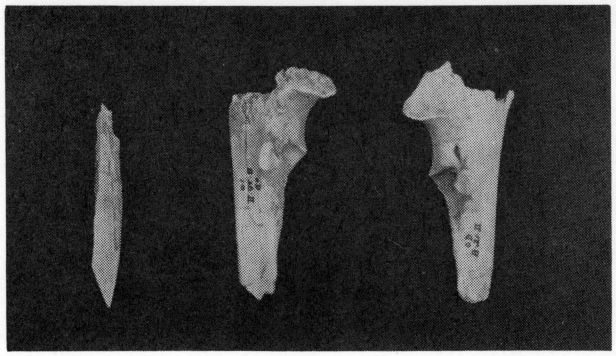
表面がやや反る。角幹部を利用し、一部を縦にすり切ったもの。加工は先端部に特徴があり、多面体のように削られる。またその面に短い横位に走る擦痕が認められる。

2．B26Ⅱ　第22図12　ＰＬ12－13

最大長 71.5mm　　最大幅 9.0mm

表面が反り返る部分の角幹を利用、細くすり切っている。先端部には1．と同様の加工がみられ、擦痕も観察された。

(e) シカの尺骨製ヘラ状刺突器（第26図）



1．B22Ⅱ（大木８ｂ）シカ尺骨左　第21図２　第26図右

2．B26Ⅱ（大木８ｂ）シカ尺骨右　第21図３　第26図中

3．B22Ⅴ（大木８ｂ？）　第21図１　第26図左

3.に最も加工が顕著である。断面にⅤ字状の溝が現われることから、尺骨の下部を利用し

たものと分かった。先端は細くとがるように整形され、磨滅による光沢が見られる。

2．は尺骨の半月状切痕部分を指かけ、あるいは把手として利用したらしい。先端は折りとってそのまま、あまり整形を加えず使用したもののようである。1．は先端部のヘラ状の加工が明らかに見られる。

(f) 釣　　針

1．B26Ⅱ（大木８ｂ）　　第22図1　ＰＬ12－2

現存長　65.0mm　　軸部中央幅　5.6mm

釣針軸部～湾曲部の一部。チモト部分は、有孔玦入のある特徴的な形態である。鹿角角幹部を素材とする。角幹部を輪切りにしたあと縦に半截し、カマボコ状の鹿角板をつくり真ん中を削っていき、整形するものである。軸部には軸の断面を円形に整形した際の加工痕が著しく、長軸方向に垂直に、長さ５mm程度の浅い条線が特に内側に多くつく。湾曲部は長方形の鹿角枝の形をそのまま残し、幅広くつくられている。チモト部分も、鹿角板の素材にやや丸味をつけた形を原形とし、表裏より研磨して全体に薄くし、頂部にＶ字状の切り込みと、直径４mm程度の穴を穿ち、さらにチモトと軸体を区切る浅い溝をつけている。

カマボコ状の鹿角板は本来、角幹部の幅以上に広いものをつくることができない。これを素材とした場合は、全体の形がＵ字形となる。ところが本例のような釣針の場合、チモト部の切り込みと穿孔とを結ぶ方向を鉛直方向に合わせた場合、曲軸系の釣針と同じ効果をもつようになる。

2．E26Ⅱ（大木８ｂ）　　第22図2　ＰＬ12－1

現存長　40.8mm　　湾曲部最大幅　16.0mm

釣針鈎先～湾曲部の一部。内鐓をもつ鈎先部分である。湾曲部中央付近で、折れてしまったもの。湾曲部はかなり閉じた曲線を描き、頂点はとがっている。鈎先先端にかけて、わずか内側にカーブする。軸部は失なわれて全体の形が定かでないのだが、1．のような軸部ではなく、細長いＵ字形を呈しチモトは軸部と一段区切りをつけて糸かけとした、単純な頭部をもつものでなかったかと思われる。大船渡湾の蛸の浦貝塚では1．のような曲軸系の釣針のほかに、単純なＵ字型のものがあり、2．のような内鐓をもつものも一点出土している。

b　装　身　具

(a) 骨　針　類

①頭部加工をもつもの

1．D24Ⅱ貝層（大木８ｂ）　　第22図3　ＰＬ12－11

最大長 134.0mm　　最大幅　11.8mm

ほぼ完存。断面は扁平。

シカの中手あるいは中足骨側面を利用。骨針頭部に海綿質が残存するので、骨の近位端をヘアピンの頭部に充てたことが分かる。先端はわずかに折れる。頭部はやや幅広くつくられ、

そこに小孔を穿ったのみの単純なつくりである。

2．B2Ⅲ（大木8b）　第22図4　PL12−10

最大長 106.2mm　最大幅 10.5mm

完存品。中手あるいは中足骨利用、扁平。

非常に光沢があるのは、これが長く使用されたためであろうか。頭部に穿孔するが、全体の形は特に頭部をつくりだすことはなく、頭部から先端にかけてなだらかに細くなる形である。

3．出土地点不明　第22図5　PL12−9

最大長 71.2mm　軸部中央幅 4.3mm

断面円形に整形した完存品。小型。

頭部をつくりだすために、その下方を細く削り込んでいる。その際の整形痕がみられる。

②骨針先端部

4．　第22図6　PL12−5

現存長 63.0mm

5．　第22図7　PL12−4

現存長 63.5mm

6．B24Ⅱ貝層下部（大木8b）　第22図8　PL12−3

現存長 28.8mm

5．6．は断面がやや扁平な骨針の先端部分。いずれも中手か中足骨の恐らく側面を、縦に裂いてつくったもの。4．は裏面全体にわたって海綿質の孔の穴が見られることから、鹿角を材料としたものらしい。表面がやや、反り返っている。

(b) サメ類椎骨穿孔品

1．B26Ⅱ（大木8b）　第23図19　PL12−5

最大径 35.4mm　前後径 10.8mm　穿孔径 8.0mm

2．出土地点不明　第23図18　PL12−4

最大径 23.2mm　前後径 10.2mm　穿孔径 2.9mm

1．2．とも大型サメ類の椎骨に穿孔したもの。1．はモウカザメの椎体と思われる。

(c) ツメタガイ穿孔品　PL15−6〜8

殻口の反対側に穿孔し、垂飾としたもの。

(d) イタボガキ製貝輪

1．D24Ⅱ（大木8b）　第23図20　PL12−1

2．B2−156cm（大木5）　第23図23　PL12−2

3．B24Ⅱ（大木8b）　第23図24　PL12−3

1．はほぼ円形の完存品。靭帯の両側が大きくくびれているのは、加工ではなく、自然の形である。貝輪の内・外側は、あまり整形されない。上面は研磨している。2．は全体の、

約1/3周を残す大型円形のもの。表面はほぼ平面になるまで研磨され、整形の進んだものである。3．は幅が狭く、外形に凹凸の多いもの。小型。表面は研磨されているが、なお放射肋の突出の多い曲線がみられる。左側の殻を、利用したためであろうか。

(e) 有孔の鹿角棒

1．B26Ⅱ（大木８ｂ）　第24図1･2　ＰＬ13・14

鹿角の左側を利用して、角坐のすぐ上あたりから第４尖に至るまで鹿角後面を、その腕曲に沿って擦り切った長大な鹿角棒である。ＰＬ13―1.2.は中間部を欠損するが、同一の角棒である。基部には、折れてしまっているが、残る半周を結ぶブリッジがつくられていたものである。擦り切り加工をした後に、角の表面および擦り切り面を丁寧に研磨して、入念に凹凸をなくす整形をしている。内部の海綿質もえぐり取っている。現存する上端から約1/4のところに穿孔している。基部のブリッジとこの穿孔とで棒の先端に結びつけ、一種の儀杖的なものに使ったのではないかと思う。あるいは先端部には、彫刻をもつものであったかもしれないが、現存する部分は何の彫刻も施されていない。しかし、このような長大な鹿角棒は、それだけで一つの威厳を示すシンボルとなり得たのではなかろうか。

大陽台出土の骨角器は、骨角匕や骨針を中心とする比較的単純なつくりのものが、多かった。

シカの中手・中足骨の後面を利用し、近位端を把手として残す骨ベラは５点出土し、特徴的なものである。三陸沿岸地域～仙台湾にかけて見られるものであるが、いずれも中期以後のようで、大船渡湾の清水貝塚では見られない。大陽台の大木８ｂ式ごろからやや下る大木９式の蛸の浦貝塚などで骨角器の主要を成しており、その後、大槌町吉里吉里の崎山弁天遺跡（大木９～10式）、後期初頭、門前貝塚にも出土している。これらの地域ではいずれもマグロ漁が盛んであり、こうした骨ベラは恐らくマグロの解体などに使われたと思われる。獣類と異なりマグロは骨と肉、肉と皮などをそぎ取るのにはこうした骨ベラで事足りたのであろう。一般に皮なめし用と意味づけされ、アラスカやブリティッシュ・コロンビアの遺跡でも同様のつくりのものがある。鹿角製のヘラは蛸の浦を除いて、この周辺ではあまり出土しない。長大な鹿角棒の擦り切りとヘラ状の加工品とは互いに関連しあって、鹿角棒の残片をこのヘラ状のものに利用したのではないかとも考えている。鹿角棒は極めて特殊な類例のないものではあったが、擦り切り技法のみをみると花泉町貝鳥貝塚などに、その系譜をたどることができる。

釣針はチモトに穿孔する特徴的な形態で、広田湾～大船渡湾岸地域に限って出土するものである。大陽台は大木８ｂ式であるから、最も早い時期のものと言える。大木９・10式を経て門前貝塚においても見いだすことができる。蛸の浦貝塚では釣針が計29点出土しており、チモト部に穿孔玦入のある本例のような形のほかに、玦入を斜めに両側からいれて曲軸系としたものもある。後者は後期初頭の門前貝塚において出現している。また蛸の浦貝塚では、細長いU字型で球状のチモトをもつ形態のものが９点ほど見られる。これらは、この地域で

は前期大木５～６式の時期の清水貝塚において、既に出現している形である。大陽台の内鐵をもつ鈎先も、あるいはこれに属するものかと考えている。門前貝塚においてもＵ字状のものが１点出土している。

装身具類は乏しい。骨針類を中心とするがすべて頭部を形づくるか、頭部に穿孔するものに限られる。これらは東北～関東にかけての貝塚において、縄文中期の骨針に共通に見られる特徴のようである。　（牛沢　百合子）

第３節　動物遺存体

岩手県陸前高田市広田町の大陽台貝塚51年度調査において、検出された動物遺存体は以下のようなものである。これは、南北の緩斜面に沿ってあけた約53㎡の広さから得られたものである。

まず、種名表および、発掘時に採集された遺存骨の所見を併記し、貝類の出現頻度についてはＢ－２の№.１～６までのサンプルによって算出した。また、採集品およびサンプル中に含まれていた獣魚骨については、別に出土量表を作成した。

これを書くにあたり、及川洵先生、ならびに金子浩昌先生のお手を煩わせてしまった。記して感謝する次第である。

（表１）　大陽台貝塚出土の動物種とその出土量の概要

（本表は大陽台貝塚より出土した全動物種の種名表と、その計測、出土量、部位について記したものである。魚・鳥・獣類で別表に示したもの以外は、その出土したもののすべてである。）

計測単位　mm

Ⅰ　軟体動物　Mollusca

a　腹足綱　Gastropoda　（ＰＬ16－上段）

1．クロアワビ　*Haliotis discus discus*　稀。Ｂ－Ⅱに幼貝を採集したのみ。

2．ベッコウガサガイ　*Cellana grata grata*　少ない。Ｌ33.0　Ｈ18.0。

3．マツバガイ　*Cellana nigrotineata*　少ない。Ｌ50.0　Ｈ20.0が大形。

4．ユキノカサガイ　*Acmaea pallida*　少ない。Ｌ46.0　Ｈ25.0が大形。小貝輪にして加工されているものがある。

5．イシダタミガイ　*Monodonta labio confusa*　稀。

6．クボガイ　*Chlorostoma argyrostoma*　Ｂ－Ⅱなどでの出土が多い。　径29.0位が大形で、多くは20.0～25.0位。

7．コシダカガンガラ　クボガイに比べると、ずっと少ない。径28.0位。
Omphalius rusticus

8．バテイラ　少ない。径34.0が大形。径30.0位が多い。
Omphalius pfeifferi pfeifferi

9．サザエ　少ない。ふたや殻が数個採集されている。
Batillus cornutus

10．タマキビガイ　少ない。
Littorina brevicula

11．ツメタガイ　多分あまり多くないと思われる。径69.0に達する殻がある。
Neverita didyma

12．ウラシマガイ　稀。破損した標本が1個あったのみ。
Semicassis persimilis

13．ヤツシロガイ　稀。破損標本1個。
Tonna luteostoma

14．アカニシ　稀。大型の標本1．H136.0、体層～殻底部を割っている。
Rapana venosa

15．ヒレガイ　少ない。
Ceratostoma burnetti

16．イボニシ　少ない。レイシに比べてずっと少ない。
Reishia clavigera

17．レイシガイ　極めて多い、主体的な貝種である。H50.0以上になる貝殻も少なくない。しかし、全体には大小の殻を含む。H30.0～40.0が多い。
Reishia bronni

18．チヂミボラ　やや多い。大小の殻を含む。H27.0～45.0
Nucella heyseana

19．エゾチヂミボラ　チヂミボラに比べて少ない。H38.0
Nucella freycineti

20．ミガキボラ　稀。H105.0
Kelletia lischkei

b　二枚貝綱　Bivaldia　(PL16－下段、PL17－上段)

1．コベルトフネガイ　稀。
Arca boucardi

2．サトウガイ　稀。L61.5、H56.0
Scapharca satowi

3．ムラサキインコ　　多量に出土。L35.0前後。
Septifer virgatus

4．エゾイガイ　　多い。
Crenomytilus grayanus

5．イガイ　　多い。
Mytilus corsucus

6．ホタテガイ　　少ない。
Patinopecten yessoensis

7．マガキ
Crassostrea gigas

8．イワガキ　　巨大な殻が見られる。H170.0～200.0に達する。
Crassostrea nipponica

9．ウチムラサキガイ　　少ない。L87.0。H69.0。
Saxidomus purpuratus

10．ハマグリ　　少ない。約90.0に達するものがある。
Meretrix lusoria

11．オキシジミガイ　　少ない。
Cyclina sinensis

12．コタマガイ　　少ない。L77.0。H56.0。数個採集されている。
Gomphina veneriformis melanaegis

13．オニアサリ　　少ない。L47.0。H41.0前後。
Notochione jedoensis

14．アサリ　　多い。L35.0～40.0前後のものが多い。
Ruditapes philippinarum

15．アリソガイ　　稀。破損標本1（E－24－Ⅱ）、房総以南現棲の貝であり、この存在に興味がもたれる。
Coelomactra antiquata

16．ウバガイ　　少ない。L102.0。H85.0。数個の標本があるのみである。
Spisula sachalinensis

17．ミルクイ　　採集されている標本は多い。L105.0、H75～。L150.0、H105.0 位までの標本がある。
Tresus keenae

18．オオノガイ　　少ない。L114.0。H68.0（D－24－Ⅲ）。
Mya arenaria oonogai

c　陸産貝種

1．ヒメギセルガイ　　陸産貝種3種は、B－2でのブロックサンプル中より採集されているがその量は少なく、No.2ブロックで、ホソオカチョ
Vitriphaedusa micropeas

2．オカチョウジガイ　*Allopeas kyotoensis*
3．ホソオカチョウジガイ　*Opeas pyrgula*
4．パツラマイマイ　*Discus pauper*

ウジガイ1、パツラマイマイ4、No.3ブロックで、ヒメギセルガイ1、オカチョウジガイ1、パツラマイマイ4、という数であった。

なお、ブロック中には、カサガイ、イガイなどの幼貝が、これも数は少なかったが見られた。

Ⅱ　節足動物　Arthropoda

甲殻綱　Crustacea

1．アカフジツボ　*Balanus eburneus*

大型の殻を時々見る。フジツボ類の小片は、少なくない。

Ⅲ　棘皮動物　Echinodermata

ウニ綱　Echinoidea

1．バフンウニ　*Hemicentrotus pulcherrinus*
2．ムラサキウニ　*Anthocidaris crassispina*

ウニ類は、殻と棘が貝層中に、かなり含まれる。ただし、層をなす程に採られるということはなく、例えば、12cm立方位のブロック土中に含まれる量は1個分にも満たない程度である。当時も多産したと思われるが、この程度に出土するのが普通である。

Ⅳ　脊椎動物　Vertebrata

a　軟骨魚綱　Chondrichthyes

1．サメ類（モウカザメ）？　Lamna ditrapis ？　Ⅱ層（D－23・24）、椎体3（横径30.0～37.0）加工品
2．サメ類（ドチザメ）　Ⅱ層（D－24）、椎体1（横径9.5）

b　硬骨魚綱　Osteichthyes

3．スズキ　*Lateolabrax japonicus*　B－26－V。左鰓蓋骨。稀。
4．マダイ　*Pagrus major*　マグロに次ぐ量の骨が出土している。別表参照。
5．クロダイ　*Acanthopagrus schlegeli*　Ⅲ層（D－24）、前上顎骨1（全長34.0）。稀。
6．ブリ　*Seriola quinqueradiata*　マダイに次ぐ骨の出土量がある。別表参照。
7．マグロ類　*Thunnus sp.*　多量の骨が出土し、最も多い。別表参照。
8．カツオ　*Katsuwonus pelamis*　Ⅱ層（D－24）、PL歯骨、R主鰓蓋骨、椎体3、尾柄隆起をもつ尾椎3（2～3個体）。Ⅲ層（B－2）、RL上顎骨、

R歯骨、R主鰓蓋骨、尾椎3。大木5期貝層（B－2、No.3サンプル）、椎体13、尾柄隆起をもつ椎体2（同一個体）、（同No.6サンプル）、L主鰓蓋骨、尾椎8（3つの大きさのものがある）、尾柄隆起をもつ椎体1。

9．カワハギ科の一種　Aluteridae gen. et sp. indet.　B－2、No.6サンプル、第1背鰭棘1。Ⅱ層（D－24）腰帯1。B－26、No.5、腰帯1。

c　鳥　綱　Aves

1．ヒメウ　*Phalacrocorax pelagicus*　Ⅱ層（D－24）、R中手骨（PL23－1）。

2．ガンカモ科の一種　Anatidae gen. et sp. indet.　Ⅱ層(D-23)、R上腕骨、細い中等大(PL23-2)。Ⅰ層(E－24)、上腕骨片、ヒシクイ相当の大型のもの(PL-23-3)。

3．ワシタカ科？　Accipitridae gen. et sp. indet.　Ⅱ層（D－24）、末節骨（直線長29.0±）、（PL23－9）。

4．キ　ジ　*Phasianus sp.*　Ⅱ層（D－24）、L大腿骨（PL23－8）。Ⅲ層（D－24）、L上腕骨片（PL23－5）、（B－2）、R尺骨（PL23－7）、頭蓋片（PL12－4）、Ⅰ層（E－24）、L尺骨（PL23－6）。

5．カラス　*Corvus sp.*　Ⅱ層（D－24）、L尺骨片（PL23－10）。

d　哺乳綱　Mammalia

1．ムササビ　*Petaurista leucogenys*　Ⅱ層（D－24）、L上腕骨遠位端（PL23－13）。

2．キツネ　*Vulpes vulpes*　Ⅳ層（B－26）、L下顎骨、下顎骨の基部に切り傷あり、（PL23－11）。

3．オオカミ　*Canis lupus*　V層（B－26）。左中足骨Ⅳ。遠位端を欠損する。これは、古い損傷であるらしい。近位端にもわずかに欠ける部分がある。こうした欠損が解体と関係があろうことは、考えられよう。オオカミの中手、中足骨は穿孔して垂飾品とされることがある。本資料もそうした目的のあったものであろう。近位端関節面最大長（骨体を正常位置におく）17.0、骨体のほぼ中央幅×厚さ、9.5×7.3、推定全長95.0。全長が不明であるが幅、厚さの点では、ヨーロッパのオオカミと大差がない大きさである。

4．イ　ヌ　*Canis familiaris*　Ⅳ層（B－26）、右尺骨（PL23－14）。

5．カワウソ　Ⅲ層（B－2）、R下顎骨（PL23－12）。
Lutra lutra

6．オットセイ　Ⅱ層（B－26）、R肩甲骨（PL24－1）。V層（B－22）、R尺骨（PL24－3）、V層（B－26）、L踵骨（PL24－5）、V層（D－24）、脛骨（PL24－4）、V層（B－22）、R上腕骨（PL24－2）。すべて雌獣。
Callorhinus ursinus curilensis

7．クジラ目　Ⅱ層（B－24）、西半分、四肢骨片？（PL23－下1）。
Cetacea fam. indet.
Ⅲ層（B－26）、四肢骨片？（PL23－下2）加工痕。
Ⅱ層（B－24）、椎体（PL23－下3）。
V層（B－26）、小型椎体（PL23－下4）。

8．イノシシ　比較的多くの骨が、出土している。別表参照。
Sus scrofa

9．シ　カ　イノシシとほぼ同じ位の骨が、出土している。別表参照。
Cervus nippon

e　糞　石　BⅡ　送付された遺物中では、一個を見ただけである。現存長は、60mmであるが、両端が少しく欠けているので、70か75mm位はあったものであろう。30×33mm位の太さが中央部であり、かなり大形のものである。中には魚骨片と思われる細片が相当量、含まれている。

A　貝　類

巻貝類20種、二枚貝類18種、陸産貝類4種を得ている。巻貝類のうち採捕の主体種となったのはレイシガイであり、クボガイ、コシダカガンガラなどが、これに次ぐ。レイシと同じReishia属のイボニシは少ない。また同様の潮間帯岩礫底のスガイも、稀である。二枚貝類は全般には量が少ないが、その中ではムラサキインコ、イガイ、エゾイガイなど潮間帯の岩礁に付着する種が、ほとんどをしめている。B－2No.1－6の貝サンプルでみた出現頻度からみても、ほぼ同様である（No.1～3：大木8b式、No.4～6：大木5式中心）。レイシとクボガイで90%をしめる（No.1・2・6）様相の中にムラサキインコを主体とするうすい貝層（大木5式No.4）がはさまる場合もあった。

これらはいずれも岩礁の間を歩けば素手で容易にとれる種であるが、肉量は少ない小型巻貝であり、特にレイシは肉に苦味があり、美味とは言えないものである。

（表２）　　軟体動物　Ｂ２区サンプル　出現率表

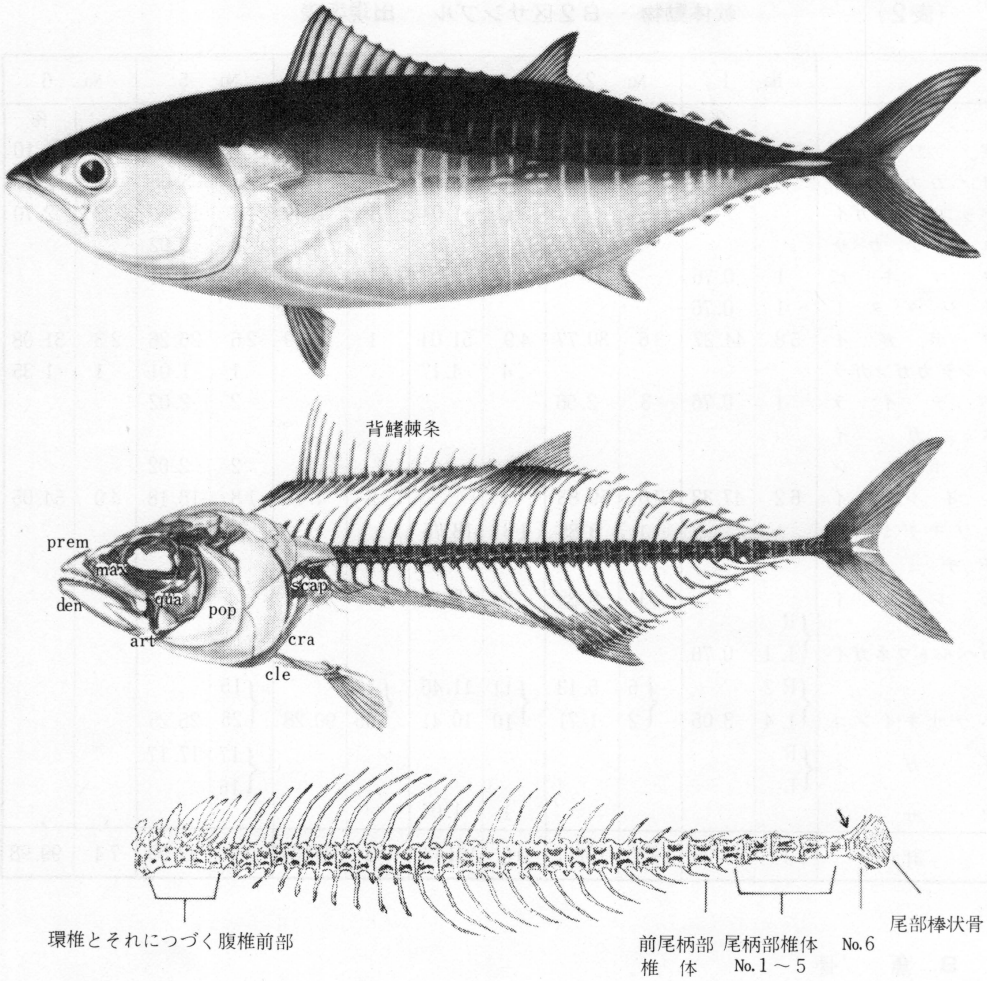
	No. 1		No. 2		No. 3		No. 4		No. 5		No. 6	
		%		%		%		%		%		%
アワビ											6	8.10
ヨメガカサガイ	3	2.29			3	3.13			5	5.05	2	2.70
ベッコウガサガイ					1	1.04	1	1.39			2	2.70
ユキノカサ									2	2.02		
タマキビ	1	0.76					1	1.39	1	1.01		
イシダタミ	1	0.76										
クボガイ	58	44.27	36	30.77	49	51.04	1	1.39	26	26.26	23	31.08
コシダカガンガラ					4	4.17			1	1.01	1	1.35
バテイラ	1	0.76	3	2.56					2	2.02		
スガイ												
イボニシ									2	2.02		
レイシガイ	62	47.33	70	59.83			3	4.17	18	18.18	40	54.05
エゾチヂミボラ			1	0.85	18	18.75						
チヂミボラ					7	7.29	1	1.39				
ヒレガイ			1	0.85	3	3.12						
コベルトフネガイ	R L 1	0.76										
ムラサキインコ	R 2 L 4	3.05	6 2	5.13 1.71	11 10	11.45 10.41	48 65	90.28	15 25	25.25		
イガイ	R L								17 16	17.17		
アサリ					1	1.04						
計	131	99.98	117	101.7	96	101.03	72	100.01	99	99.99	74	99.98

Ｂ　魚　　骨

計９種類で、種数は少ない。マグロを中心とし、ブリ、カツオを加える回遊魚とマダイ、カワハギの岩礁底棲魚とがほとんどを占めている。東北地方内湾魚の代表種のスズキはわずかに計３片、クロダイは前上顎骨を１個採集したにとどまる。

マグロは、最少個体数38個体分を数え（尾部）、一尾の肉量が平均60kgに達することを考えあわせると、本貝塚の食糧上非常に大きな役割を果していたことが分かる。全体の椎骨数と尾部の６個の椎骨の比は本来約６：１となるが、出土した椎骨におけるその割合いは、510：148≒10：3となり約２倍の出現率であって、尾部が結合したまま廃棄されることが多かったことを示している。また、マグロの大きさは最後部から６番目の椎骨の変異幅でみて22mm～55mmまでと幅が大きく、体長にして0.8～1.9m位までの大小の個体が含まれていたものとみられる。

これらが、クロマグロであるとすれば、回遊の時期は６月ごろとみられる。カツオとブリは、出土した椎体の数は15個程度で少ない。



prem：前上顎骨
max：上顎骨
den：歯骨
art：関節骨
qua：方骨
prem：前鰓蓋骨
scap：肩甲骨（cra：烏口骨）
cle：擬鎖骨

マグロの外観（上）、骨格（中）、と脊柱（下）

○遺存体として検出されたものの一部を、名称を付して示した（中の図参照）。
○また椎体で特に、数量を調査した尾部の部分を示した（下の図参照）。
上・中図：KISHINOUYE（1923）。下：堀田(1961)による。
○矢印(↓)は石器による切り傷のしばしばみられる場所。

マダイは、マグロについで多い。また保存部位が前頭骨、前上顎、歯骨などの頭部骨に集中している。最少個体数を前頭骨でみると、11個体である。また、その計測値により、前頭骨、前上顎骨、歯骨の三者の同一個体数の可能性を考慮して最少個体数を算出すると、18個体近くになる。大きさは体長25～60cmにわたるものが含まれる。

カワハギ類は、血管間棘2片と背鰭、腰帯を少量出土しているにすぎない。

（表3）　魚類遺存体出土量表

（　）内の計測値はmm

前頭骨は最大幅、前上顎骨、歯骨はその全長を計測。

		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
軟骨魚綱 サメ類 A:モウカザメ	B 26 D 23 24		椎体片1 椎体A（破片） 椎体A(径30・38)(PL17－下1・2) 椎体（径9.6）		
硬骨魚綱 スズキ	B 24 26 D 24		主鰓蓋骨R 主鰓蓋骨L（PL17－下5） 擬鎖骨R（PL17－下6）		
マダイ (PL8－1～26)	B 22		前頭骨（46） 前鰓蓋骨R	上後頭骨1 上顎骨L 歯骨L（53） 関節骨L	
	26		前頭骨（42・30・43） 上顎骨L 前上顎骨（R50・50） 歯骨（R35・45・L53） 関節骨R 口蓋骨R		前頭骨(35・43) 上顎骨（L）
	02			前頭骨（35） 上顎骨R 歯骨L52	
	D 24		前頭骨（25・30・32・46・52） 上後頭骨 前上顎骨　R(37・45) L(32・43・48・50) 舌顎骨　L1 口蓋骨L1・R1(左右別) 歯骨　R1・L(42・45) 関節骨　R1 上顎骨　R1・L1 前鰓蓋骨　L	前頭骨（31・38） 上後頭骨 前上顎骨（39・47） 上顎骨R 口蓋骨R1・L1	
	E 24	前頭骨 (23・23) 歯骨 (L・38) 関節骨 椎骨3			
クロダイ	D 24			前上顎骨(34)(PL17－下3) 臀鰭	
ブリ	B 22		前上顎骨L（PL17－下7）	椎体1	
	24 25 26 2		椎体2 椎体1（PL17－下9～13） 歯骨R（PL17－下8）	椎体1 椎体1	
	D 24		前上顎骨L	椎体6・1 歯骨L	
	E 24	椎体3			
カツオ	B 2			前上顎骨L 歯骨R（PL17－下19） 主鰓蓋骨L（PL17－下21） 椎骨3	
	D 24		前上顎骨R 上顎骨RL(PL17－下17・18) 歯骨L（PL17－下20） 椎体7(PL17－下22～28)	椎骨1	
	E 24	椎体3			
カワハギ	B 26 D 24		腰骨1（PL17－下14・15） 背鰭棘1（PL17－下16）		

（表4）　マグロ類頭部主要骨の出土量表（椎体は別表）

		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅴ
B	22		L歯　骨2 R擬鎖骨 その他主鰓蓋骨などの断片的なものが多数含まれる	基後頭骨1 鰓　把1 その他鰓蓋周辺骨の断片が多くみられた	L肩 甲 骨 R擬 鎖 骨 その他断片的なものがある
	24		L歯　骨2 R歯　骨2 L肩甲骨1 R肩甲骨1 他に断片的なもの1 L擬鎖骨2		
	26		L歯　骨4 L肩甲骨2 R擬鎖骨1 他に断片的なものがある		R方　骨2 R擬鎖骨2 L擬鎖骨1
	02		L上顎骨1 L歯　骨1 R関節骨1 L方　骨1 L角舌骨1 L前鰓蓋骨1 R擬鎖骨1		
D	23		R歯　骨1 R関 節 骨1 L角 舌 骨1 R擬 鎖 骨2 or 3 L肩 甲 骨2		
	24		L前上顎骨1 R上 顎 骨3 L上 顎 骨2 R歯　骨4 L歯　骨2 R・L？歯骨1 R関 節 骨3 L関 節 骨2 L方　骨1 R下 舌 骨1 R角 舌 骨1 L角 舌 骨5 L前鰓蓋骨1 R擬 鎖 骨1 L擬 鎖 骨1 R肩 甲 骨2 L肩 甲 骨1	R歯　骨1 L擬 鎖 骨1	
E	24	副 楔 骨1 R・L上顎骨各1 R？前上顎骨1 L歯　骨1 R擬 鎖 骨1 L肩 甲 骨1 その他断片となったものであるが多い	R擬鎖骨1 L擬鎖骨1		

マグロ類主要骨の層位別出土集計表

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅴ		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
基後頭骨			1		前鰓蓋骨		L2			
副 楔 骨	1				下 舌 骨		R1,			
前上顎骨	R1	L1			角 舌 骨		R1, L7			
上 顎 骨	R1, L1	R3, L3			擬 鎖 骨	R1, L	R6, L3	L1		R3, L1
歯　骨	L1	R7, L11	R1		肩 甲 骨	L1	R3, L6			L1
関節骨(角骨)		R5, L2			尾柄部を除く	29 (7)	384(36)	14(6)	11(3)	51 (12)
方　骨		L2		R2	椎骨					

（表5）　マ グ ロ 椎 骨　（尾柄部を除く）

（　）内は破片数

グリッド＼層		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	?
B	22		23（2）	3（3）		24（2）	
	23						
	24		38（5）				4（2）
	25						
	26		67（15）		11（3）	27（10）	
	?		49（1）				
D	23		8（3）				
	24		192（7）	11（3）			
E	24	29（7）	7（3）				17（4）
計		29（7）	384（36）	14（6）	11（3）	51（12）	21（6）

マグロ尾柄部椎骨

0	1	2	3	4	5
31	38	27	28	19	5

序数0～5の椎骨の位置については22頁の図参照。

C 獣　類

小獣類は、ムササビ、キツネ、カワウソの遺存骨をそれぞれ1点ずつ得ているが種類、量ともに少ないが、オオカミの中足骨が出土している。ムササビ、ノウサギ、タヌキをわずかに出土する門前、蛸の浦、崎山弁天などの周辺地域の遺跡の動物相と比べやや特殊である。

イノシシとシカが獣類の大半を占める。イノシシはD地区のⅡ層からM^3萌出し、エナメル質咬耗の進む左右連合した上顎骨とM_2が未萌出の幼獣骨1個が出土しており、それによって少なくとも3個体分を得る。また脛骨、大腿骨にやはり幼獣骨をみる。B地区Ⅱ層からは、大腿骨でみて大きさの異なる成獣骨3個体分、ほかに幼獣の大腿骨が2個体分あり、計5個体を算える。B・D両地区を合わせると、イノシシの成獣は6個体、幼獣が3個体分ある。幼獣の占める割合が多い。

シカはB地点Ⅱ層で肩甲骨より4個体、また尺骨、橈骨がそれぞれ異個体のものと思われ、それでみると6個体分を数える。Ⅴ層では、肩甲骨2個体が得られる。計8個体分である。他の主要四肢骨も3～4個体分を出土している。D地区ではⅡ層に大腿骨3個体分、Ⅲ層からはM_3が未萌出段階の若獣2個体とで5個体であった。Ⅱ層で9、Ⅲ層2、Ⅴ層2個体で合計11個体となる。こうしたイノシシ、ニホンジカの出土量は、広田湾、大船渡湾の前期～後期初頭の貝塚のどれよりも多いと言える。

（表６）　　イノシシ歯牙骨格出土量表（ＰＬ26上下）

（△は骨端がはずれているもの）

		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
B	22		眼窩部Ｒの破片。 まわりに噛み痕が多数付く。			下顎骨 R($M^{2\cdot3}$)♂（顎骨の髄腔がみえている） 距　骨Ｌ１ 基節骨　１
	24		肩甲骨Ｒ１ 上腕骨　　Ｌ$\overset{\triangle}{d}$ 大腿骨Ｒ$\overset{*}{d}$ 踵　骨Ｒ１ 中手骨　　ⅠⅤＬｐ 基節骨　１			
	26		上腕骨Ｌ$\overset{*}{d}$　$\overset{*}{}$（擦痕あり） 尺　骨Ｌｐ 寛　骨Ｌ１（寛骨臼枝部分） 大腿骨Ｒ$\overset{\triangle}{p}$～ 脛　骨Ｌｄ		大腿骨Ｒ$\overset{\triangle}{p}$（幼） 距　骨Ｒ（若小）	
D	23		上顎骨♀ {Ｒ（I^1CP^1～$P^4M^{1\cdot2}$） Ｌ（$P^4M^{1\cdot2\cdot3}$） M^2割れている M^3割れている 大きくなく♀か？ {Ｒ（$\overset{+++}{M^{1\cdot2\cdot3}}$）$M^1$～$P^4$の間で Ｌ（$M^{1\sim3}$）割ったものらしい 下顎骨 Ｌ（〈Ｃ〉$M_1$〈$M_2$〉）$dm_4$は抜けている 上腕骨Ｌｄ			
	24		Ｌ$\overset{+++}{I^2}$ 上腕骨Ｒｄ 尺　骨Ｌｐ（カミアト） 大腿骨　　Ｌｄ （幼）　（幼） 脛　骨Ｒｐ～ｄ　Ｌｐ～ｄ	側頭骨頬骨突起 $\overset{*}{L}$ 尺　骨　　Ｌｐ	（若小）	
E	24		大腿骨Ｒ$\overset{\triangle}{p}$（破損品） 大腿骨　　Ｌｐ$\overset{\triangle}{\sim}$ｄ（幼） 鼻根部片、左右に走る擦痕がみられる			

（表7）　　ニホンジカ歯牙骨角出土量表（PL25上下）

		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
	22		肩甲骨R 3 L 1 尺　骨　　L p 脛　骨R d*・L d 踵　骨R 1・L 1 距　骨R 1* （距骨に切傷がある）			上顎歯　P 下顎骨・R（P_2） R（P_2・M_2以下破損） 肩甲骨　　L 2 橈　骨Rp L d^ } Rpは 尺　骨Rp・Lp～ } 同一個体
B	24		角　　片1 肩甲骨R 1 上腕骨R d・L d^ 橈　骨 R{p, d epのみ} 大腿骨　　L s 踵　骨R 1 距　骨　　L 1 中手・足骨　　d 基節骨　　1 （上腕・橈骨片各1） その他 破片 1	一致するものはない		大腿骨R p^ 踵　骨R 1
	26		角　　片1 肩甲骨R 2・L 1 上腕骨R　　L d 橈　骨R p・L p 尺　骨R 1・L 1 脛　骨R 1・L 1 距　骨R 2・L 3 踵　骨　　L 1 中手足骨　　d （指趾骨） 基・中・末3・1・1		中手骨 L p	
D	23	別個体	上顎歯　$M^{1\cdot2}$ 上腕骨R p～d 橈　骨　R d^ 寛　骨　R 1* 大腿骨　　L p^ 寛骨臼部片* 角　　片2 頚　骨 上腕骨　　L d	下顎骨 L（$P_{2\sim4}$・$M_{1\cdot2}$）	M_3は脱落	
			大腿骨　　L p（カミアト） 膝蓋骨　　L 脛　骨　　L 仙骨片　　1 基節骨　　1 肋　骨　　6 その他破片 9 下顎骨片　　L	上腕骨R p^ 尺　骨　　L p 大腿骨　L p・d 踵　骨　R } 同一個体 距　骨　R }		

E	24	脛　骨Rd その他破片 6	肩甲骨　L 中手骨　LP 中足骨片　1 肋骨片　1 その他　1			

（表8）　　ニホンジカ角坐骨・角の出土量および形状

区層・出土量			形　　状
B	Ⅱ層	22	1. L角座部分――角座直上部径46.0×47.0、現存高80.0。　（PL24－下9） 第1枝は分岐部より少し先で折る。角幹は、その左右、後面を角座の方に向かって切り込み（おそらく角を立てて保持したのであろう）、緻密質部分を切る。あまり深い切り込みではなく、緻密質部分をそぎとるような方法であった。残った海綿質部を最後に折ったと思われる。 2. 角冠――若い個体のもの。　（PL24－下5）
		26	3. R角座骨と角座部――角座骨直下で切断、角座直上部径35.0。 第1枝は分岐部より切断、角幹外側に擦り切り痕が、縦方向にのびる。角幹を縦に割ったのであろう。　（PL24－下7） 4. L角座骨と角座部――角座骨直下で切断、角座直上部径38.0。 内側の破損のために、原形がよくうかがえないが、後面に一条の擦り切り痕があり、これは二条あったものの一つであるし、その一部は上の方にみられる。これも角幹を縦に半截したのこりである。なお、角座骨切断部が、つぶされたように磨滅している。 （PL24－下8）
	Ⅳ層	26	5. L角座骨と角座部――角座骨直下で切断、角座直上部径43.0×47.0。（PL24－下6） 大形の角である（第1標本がほぼ同大）。第1枝と角幹をたたき切っている。この角は、角座と角座骨とが完全に化骨化していなかったらしく、付着面をのこしてはずれている。角の落ちる直前の時期のものだったのであろう。 6. 角幹部片――擦り切りで幹部が2つに割られたもの。幅30.0　（PL24－下1）
	Ⅴ層	26	7. 擦り切りの痕跡をもつ角幹部破片――幅16.0　（PL24－下2） 曲っているのは、角なりの曲りであろう。角幹径が30.0位の角であると、これを縦に割って得られる棒状のものは、ほぼこの程度のものであったろう。 8. 角冠部の枝の一つ――角表面のざらつきがみえる。擦り切りで切っている。（PL24－下4） 9. 角座部の破片――その一部に擦り切り痕があったが、幾つにも割れて修復不能。 10. 角幹部片――上、下にたたき切り痕。半截されているが、これも割ったものである。 幅28.0、長さ65.0　（PL24－下1）
D	Ⅱ層	23	11. 分岐部分の破片。　（PL24－下3）。 枝は基部から切断、たたき切る際の打撃痕がよくみえる。角幹は、この枝の部分をはさむようにして擦り切りをして二分する。その後で、枝の分岐する部分を切り取ったのであろう。
		24	12. 擦り切り痕をもつ鹿角棒――幅8.0～10.0。　（PL12－14） 先端が磨滅しており、角器として使ったものであろう。当初からこの幅のものがつくられたのか、あるいはさらに幅広い角棒状のものを利用法に応じて割ったものか、問題である。

オットセイは下北半島北端、仙台湾沿岸などのいくつかの地域と並んで、三陸沿岸地域が捕獲のおこなわれた地域とされている。いずれもマグロ、マダイなどを漁獲対象の主体としてそれらにわずかオットセイなど海獣骨を含むという様相である。また、アシカ、トドと共に出土するというよりは、オットセイのみ単独で出土している点も特徴である。例えば、大

洞（晩期大洞B、BC～C1）、蛸の浦（大木9）、沼津(後・晩期)、崎山弁天などの諸遺跡で、雌のオットセイがみられる。オットセイの雌は11月末から冬季にかけて、本州東岸を銚子沖あたりまで南下するという。冬季が捕獲シーズンであったことになる。

大陽台貝塚とその動物相

大陽台貝塚の立地は、三陸沿岸の外海系貝塚にみる特徴をよく示し、岩礁性の巻貝を主体とする貝塚であった。ただ貝種は、大船渡湾の清水貝塚（縄文前期）などで知られるようなスガイ・イシダタミ・アサリを主とする一般的にみる外海系貝塚の例とは異なり、レイシ、イガイを主体とし、スガイをほとんどみることがなかったのである。レイシを特に多獲している例は同じ広田湾に面した縄文前期の牧田貝塚でもみられたが、ここではスガイを含み、レイシとアサリが主体種であった。大陽台貝塚でスガイをみないことについては、何か人為的な貝類の採集条件の改変を考えさせるのである。

魚骨においては、マグロの大量の出土というこれも三陸海岸地帯の特徴ある様相を示した。マグロに次いで多いマダイとの比率をみると、清水貝塚におけるよりもマダイに対するマグロ類の比率は高く、より積極的なマグロ漁撈が展開したことを物語っている。大陽台貝塚出土のマグロ類の尾部棒状骨には、尾鰭を切断する際に付いた傷をもつ骨があり、尾柄部椎体が5～6個連続したり、腹椎が連続して出土することがみとめられた。また、歯骨、擬鎖骨、角舌骨、方骨などの内臓骨が目立つ一方、これらの骨の間に鰓把をほとんど発見することができなかったことからみると、捕獲されたマグロは、浜の水辺で内臓などが取り出され、尾鰭を切り落とし、持ち運びに不便でない程度に頭部、胴部(一頭が6～7等分される)に分けて貝塚のある台上まで運ばれたのであろう。ところで、マグロやマダイその他の魚骨の豊富な出土に比べると、漁具とされる遺物、特に釣針の出土はわずかに2点であった。これは前述の清水貝塚に比べてむしろ少なく、その理由は明らかでないが、当時のマグロ漁撈を考えると、湾内に進入してきたマグロの群を、さらに小さい入江へと追いこんで撲殺するような方法があったことは、後世の漁法からもうかがうことができる。大陽台貝塚の面する入り江はその条件を満たすであろうし、つり餌となるイワシなど小魚骨がみられないのもその可能性を示すといえる。

鳥獣骨：水辺に面しながら水鳥類の骨の出土が少ないことは本貝塚のみのことではない。キジを主とすることは後晩期に至るまで変わらないようである。かなり広い内湾あるいは低湿地の発達か、急崖をもった岩礁海岸でないと水鳥の骨の少ないことをここでも知った。

獣類にみる特徴の一部についてはすでに述べたが、本貝塚におけるイノシシ、シカなど大型獣の出土はこの地域に知られる前～中～後期の例に比べて決して少なくない量である。特に清水貝塚や牧田貝塚と比べると獣骨の占める割合は高い。狩猟活動へのウエイトが高まることを示すのであろう。これは、素朴なつくりではあるが鹿角や骨を利用した釣針以外の道具がさかんに製作され使用されたことと関連をもつはずである。　（牛沢　百合子）

あとがき

本遺跡の調査は、土地所有者の開田希望が契機となって計画されたもので、開田予定地内の遺跡の広がりを把握するために実施されたものである。調査の概要については、本文の中で述べたとおりである。Ｂ２区のように貝層がよく堆積されている場所もあり、調査期間が短期間であったにもかかわらず、遺跡の状況を知ることができた。

土器については、大木５式期および８ｂ式期を中心に大木４式から大木９式にいたる時期のもの、石器は32点の発見があった。また骨角貝製品のうち利器は18点、装身具は13点出土し、動物遺存体は貝類42種、魚骨９種、獣骨９種、鳥類５種など多数の遺物が出土した。しかし調査範囲が狭かったため遺構の検出がなく、これらの遺物と生活面との結びつきができなかった。いずれにしても今回の調査は、遺跡の広がりを把握するために実施されたものであり、その意味から言えば、立地環境と生業活動の内容を知ることができ、調査の目的をほぼ達したと言えるであろう。

最後に、調査および報告書作成にあたって、種々ご配慮いただいた陸前高田市教育委員会教育長熊谷忠氏、社会教育課長荻原一也氏、同課長補佐佐藤吾一氏に深く感謝申し上げる。

報告書の執筆については、自然遺物や骨角・貝器の整理を早稲田大学の金子浩昌氏、牛沢百合子氏にお願いした。精細な図表や図面と共に考察をも加えた報告文をお送りいただき、本貝塚の自然遺物やその製品を解明することができた。両氏に、厚くお礼申し上げる。

土器・石器の整理分類は遠藤勝博氏が行ない、遠藤氏と及川が討議を重ね、報告文・実測図を遠藤氏が書き、土器に関する考察を及川が書いた。また、調査にご協力いただいた遠藤輝夫氏、一関二高史学部員、高田高校考古学同好会員の各位に対しても、記して感謝の意を表する次第である。

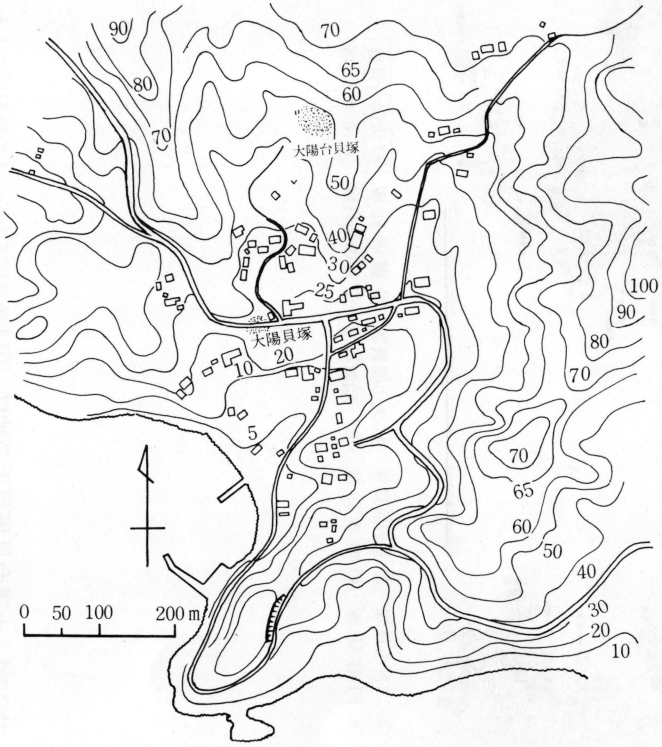
(及川　洵)

〈追　記〉

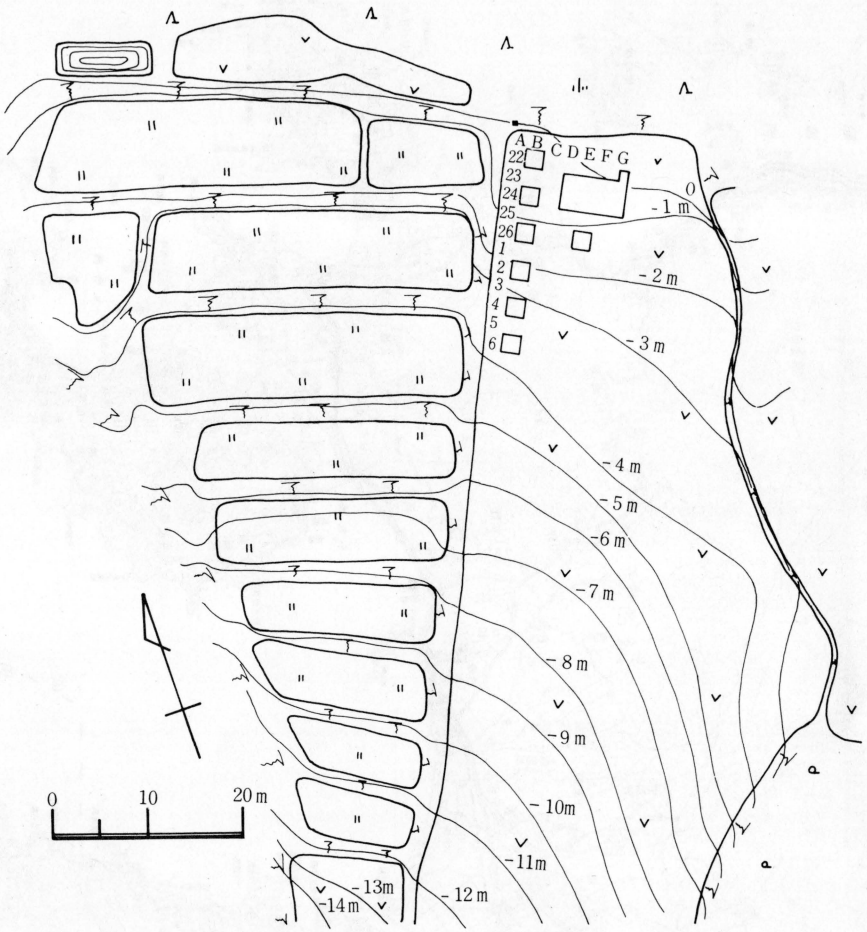
骨角貝製品の記述中の層位名（ローマ数字）は、発掘時点のものである。第４図壁面実測図中の層位名（算用数字）との対応関係は、下表の通りである。

グリッド／層位	B						D		E			F		G		
	22	24	26	2	4	6	23	24	23	24	26	23	24	22	23	24
Ⅰ	1	1・2	1	西壁１	(1)		1	1		1			1			1
Ⅱ	2	3	2	2～8	(2)		2	2		2			2			2
Ⅲ	3・4	4～7	3	9～15	(3)		3	3		3～						
Ⅳ	5	8	4・5	−160まで 16～19上			4	4								
Ⅴ	6～	9	6	−160以下 19下～			5	5								
Ⅵ			7				6									

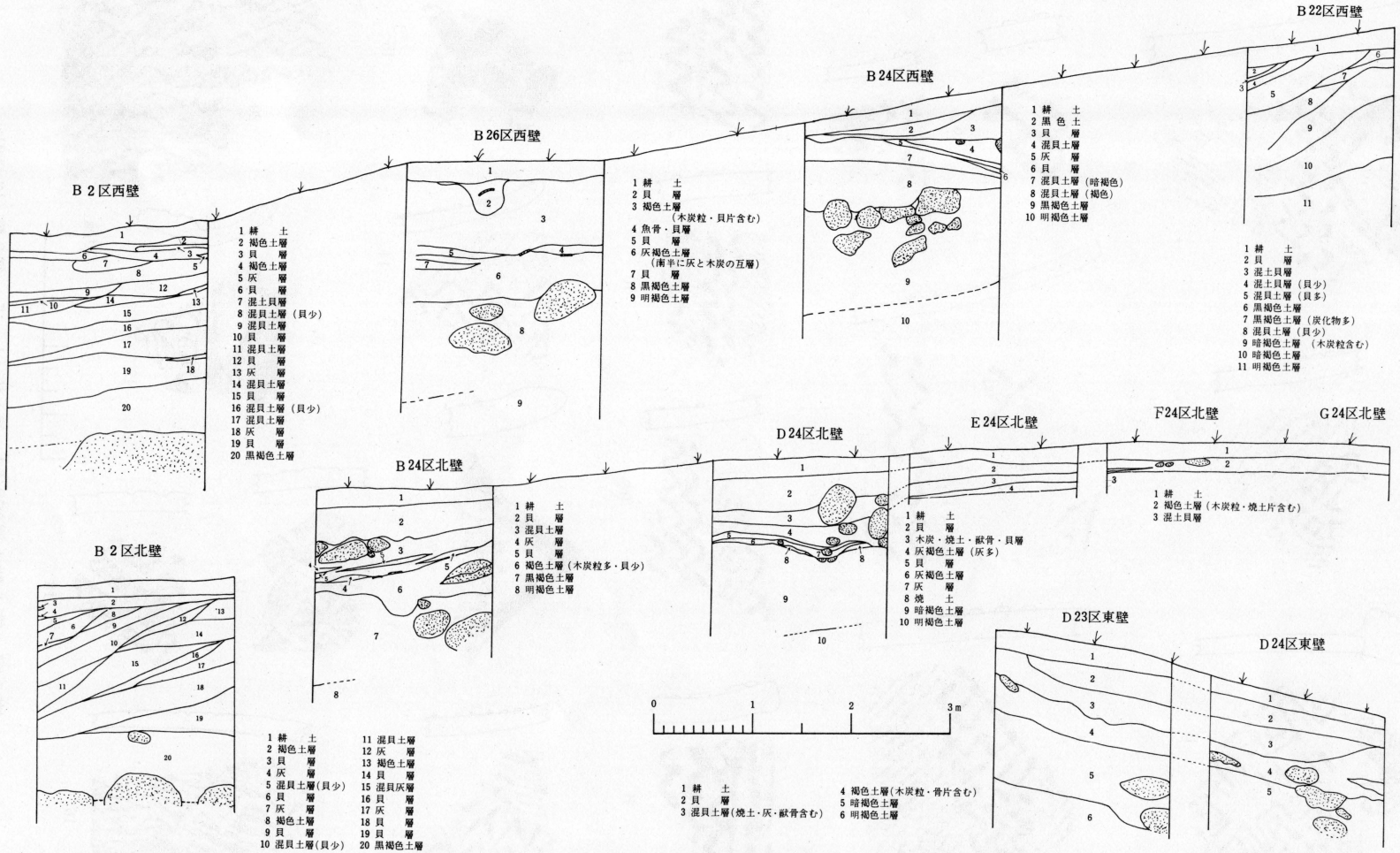
第1図　大陽台貝塚付近の地図（国土地理院5万分の1の地形図による）



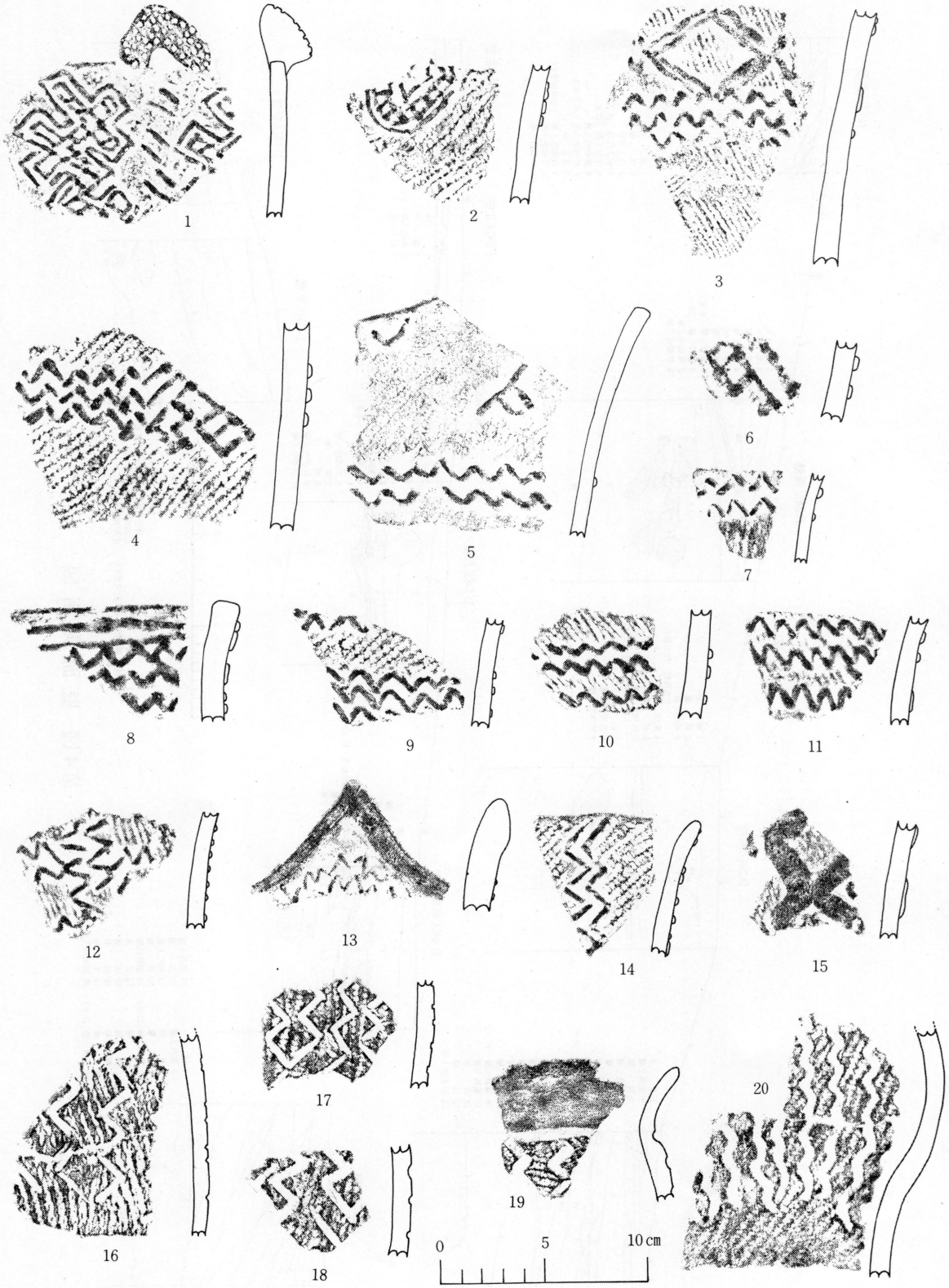
第2図　遺跡近辺の地形



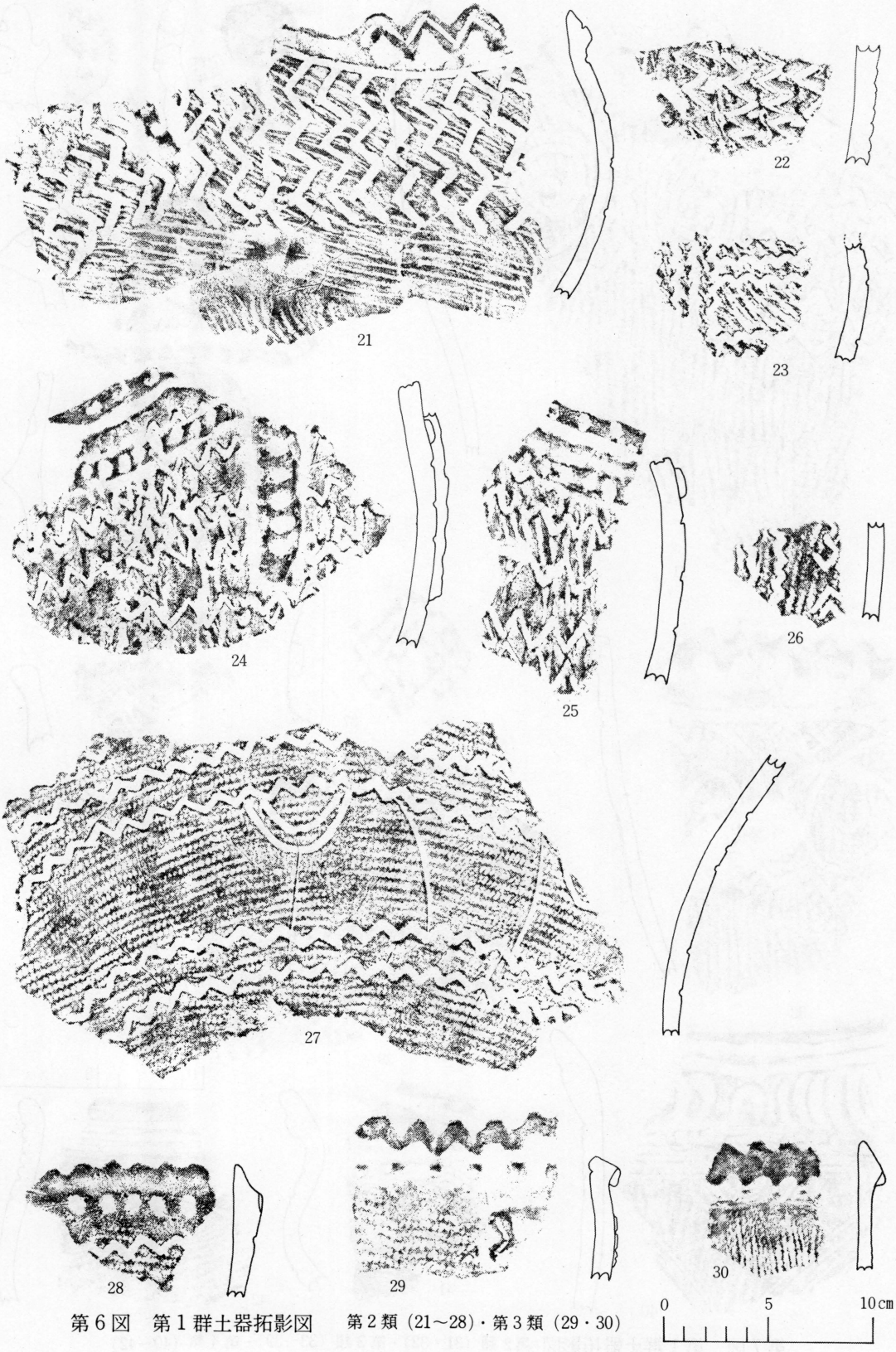
第3図　発掘区域図


B 2 区西壁
1 耕　土
2 褐色土層
3 貝　層
4 褐色土層
5 灰　層
6 貝　層
7 混土貝層
8 混貝土層（貝少）
9 混貝土層
10 貝　層
11 混貝土層
12 貝　層
13 灰　層
14 混貝土層
15 貝　層
16 混貝土層（貝少）
17 混貝土層
18 灰　層
19 貝　層
20 黒褐色土層
B 26区西壁
1 耕　土
2 貝　層
3 褐色土層
（木炭粒・貝片含む）
4 魚骨・貝層
5 貝　層
6 灰褐色土層
（南半に灰と木炭の互層）
7 貝　層
8 黒褐色土層
9 明褐色土層
B 24区西壁
1 耕　土
2 黒　色　土
3 貝　層
4 混貝土層
5 灰　層
6 貝　層
7 混貝土層（暗褐色）
8 混貝土層（褐色）
9 黒褐色土層
10 明褐色土層
B 22区西壁
1 耕　土
2 貝　層
3 混土貝層
4 混土貝層（貝少）
5 混貝土層（貝多）
6 黒褐色土層
7 黒褐色土層（炭化物多）
8 混貝土層（貝少）
9 暗褐色土層（木炭粒含む）
10 暗褐色土層
11 明褐色土層
B 2 区北壁
1 耕　土
2 褐色土層
3 貝　層
4 灰　層
5 混貝土層(貝少)
6 貝　層
7 灰　層
8 褐色土層
9 貝　層
10 混貝土層(貝少)
11 混貝土層
12 灰　層
13 褐色土層
14 貝　層
15 混貝灰層
16 貝　層
17 灰　層
18 貝　層
19 貝　層
20 黒褐色土層
B 24区北壁
1 耕　土
2 貝　層
3 混貝土層
4 灰　層
5 貝　層
6 褐色土層（木炭粒多・貝少）
7 黒褐色土層
8 明褐色土層
D 24区北壁
1 耕　土
2 貝　層
3 木炭・焼土・獣骨・貝層
4 灰褐色土層（灰多）
5 貝　層
6 灰褐色土層
7 灰　層
8 焼　土
9 暗褐色土層
10 明褐色土層
E 24区北壁
F 24区北壁
1 耕　土
2 褐色土層（木炭粒・焼土片含む）
3 混土貝層
G 24区北壁
0 1 2 3m
1 耕　土
2 貝　層
3 混貝土層(焼土・灰・獣骨含む)
4 褐色土層(木炭粒・骨片含む)
5 暗褐色土層
6 明褐色土層
D 23区東壁
D 24区東壁

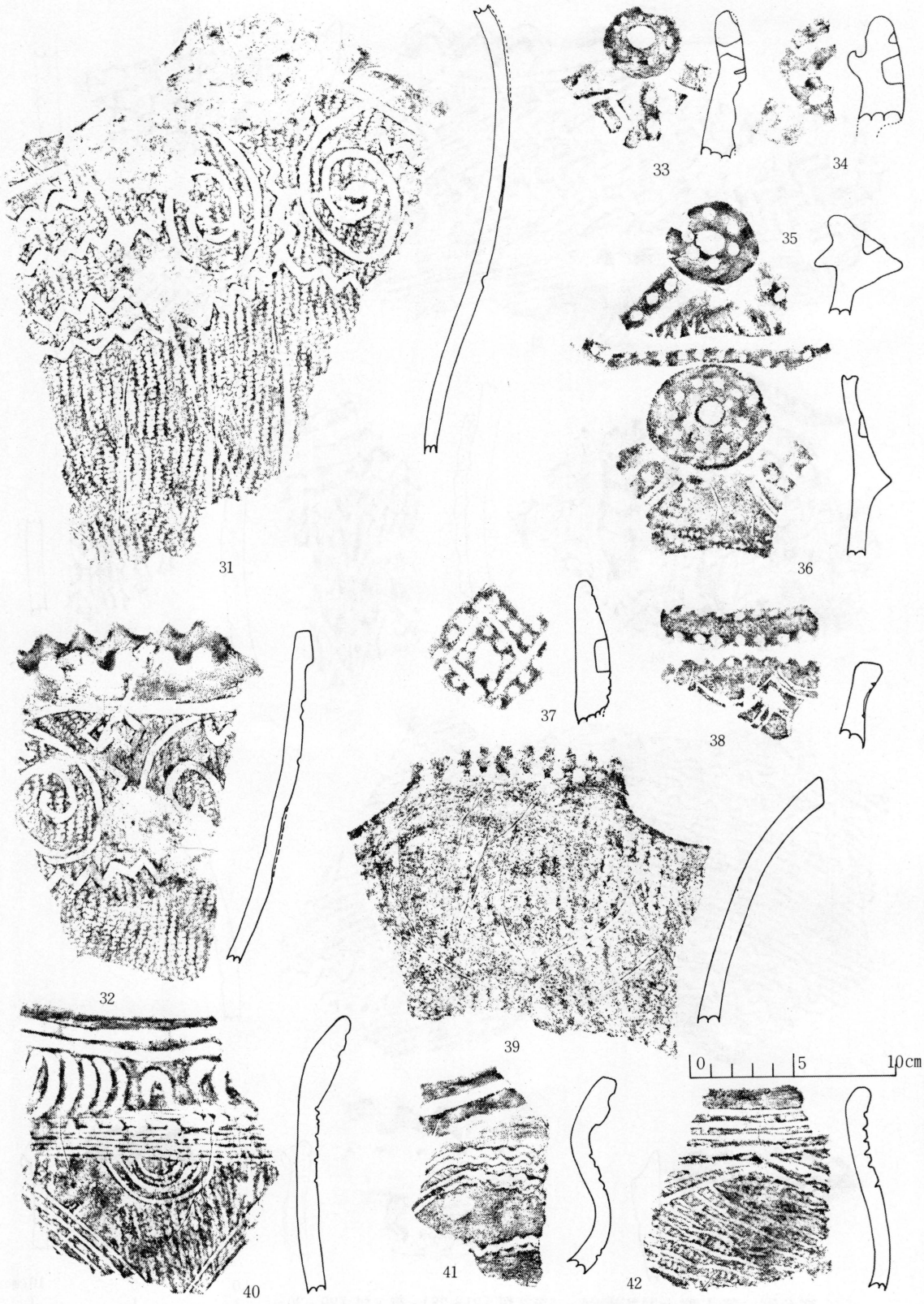
第4図　壁面実測図



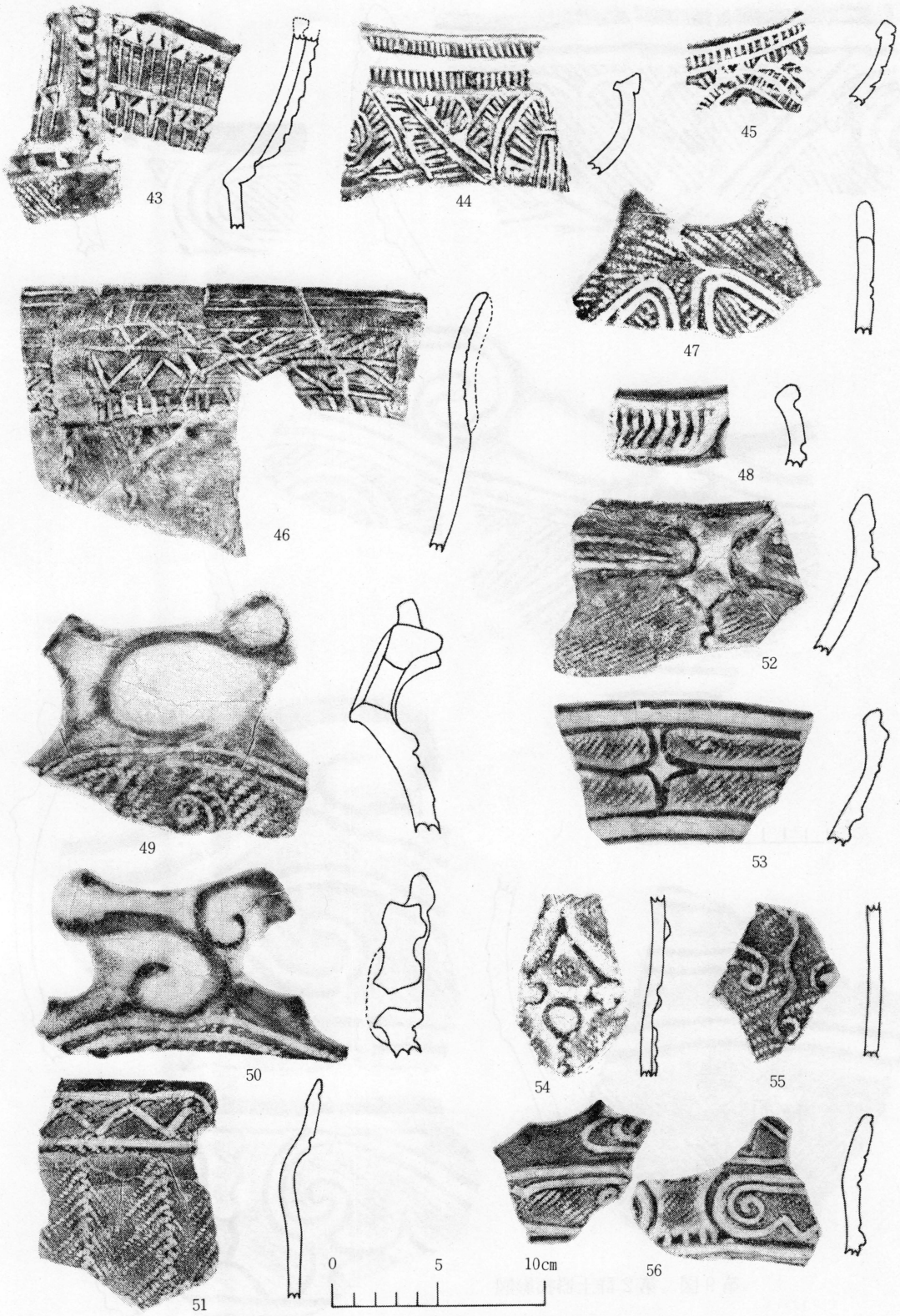
第５図　第１群土器拓影図　第１類（１～15）・第２類（16～20）



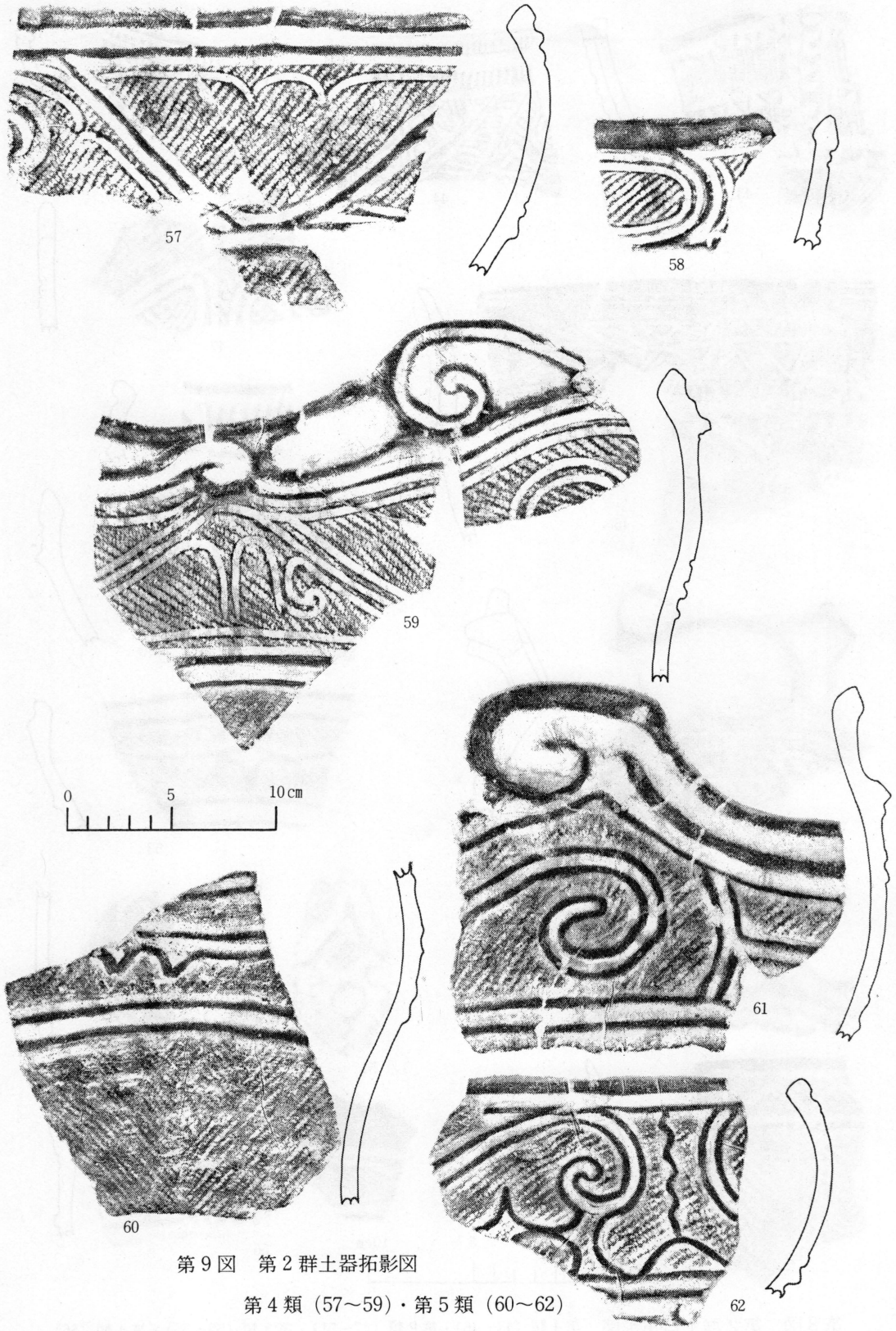
第６図　第１群土器拓影図　第２類（21～28）・第３類（29・30）



第７図　第１群土器拓影図 第２類（31・32）・第３類（33～39）・第４類（40～42）

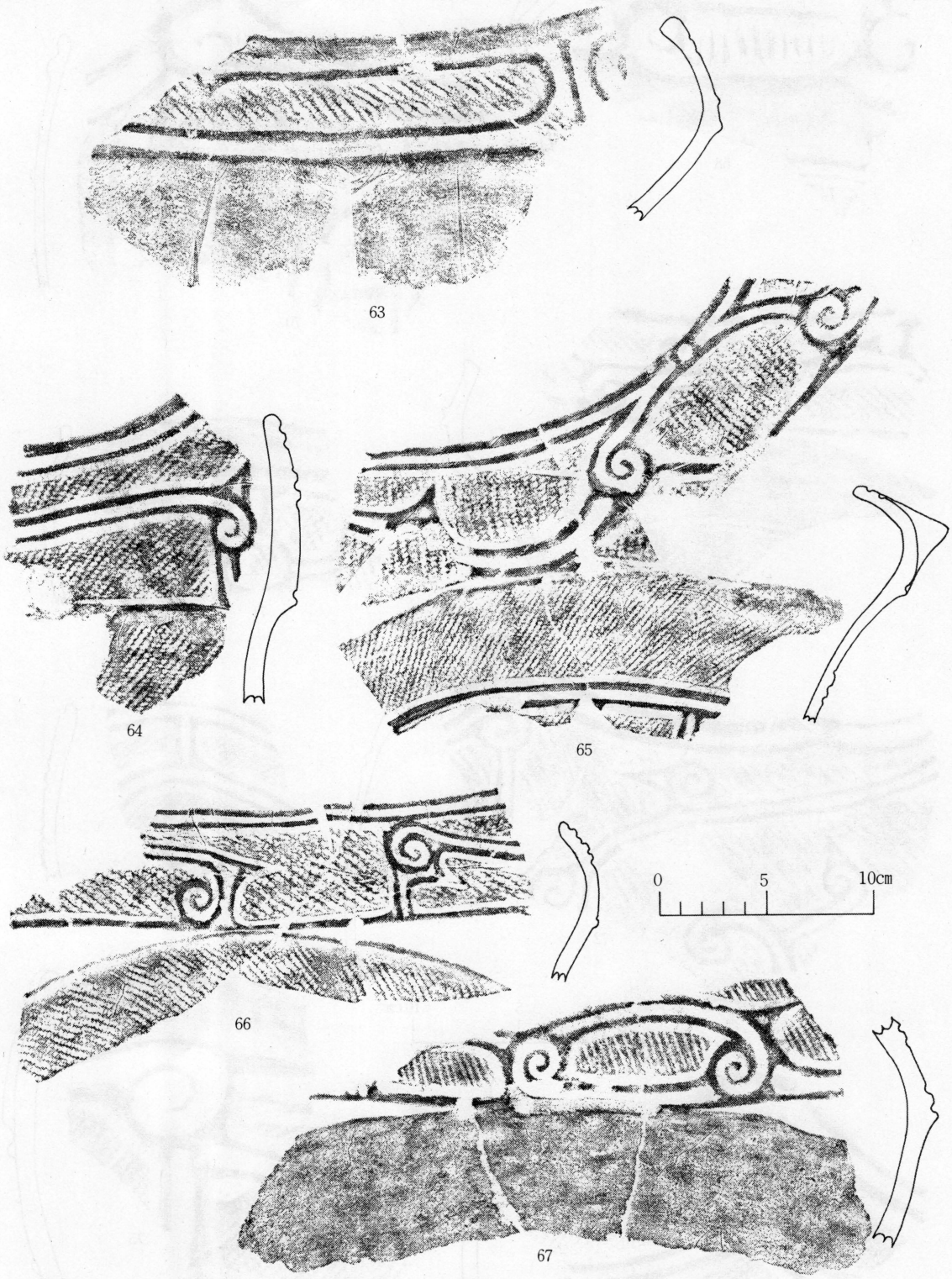


第８図　第２群土器拓影図　第１類（43～46）・第２類（47～51）・第３類（52～55）・第４類（56）

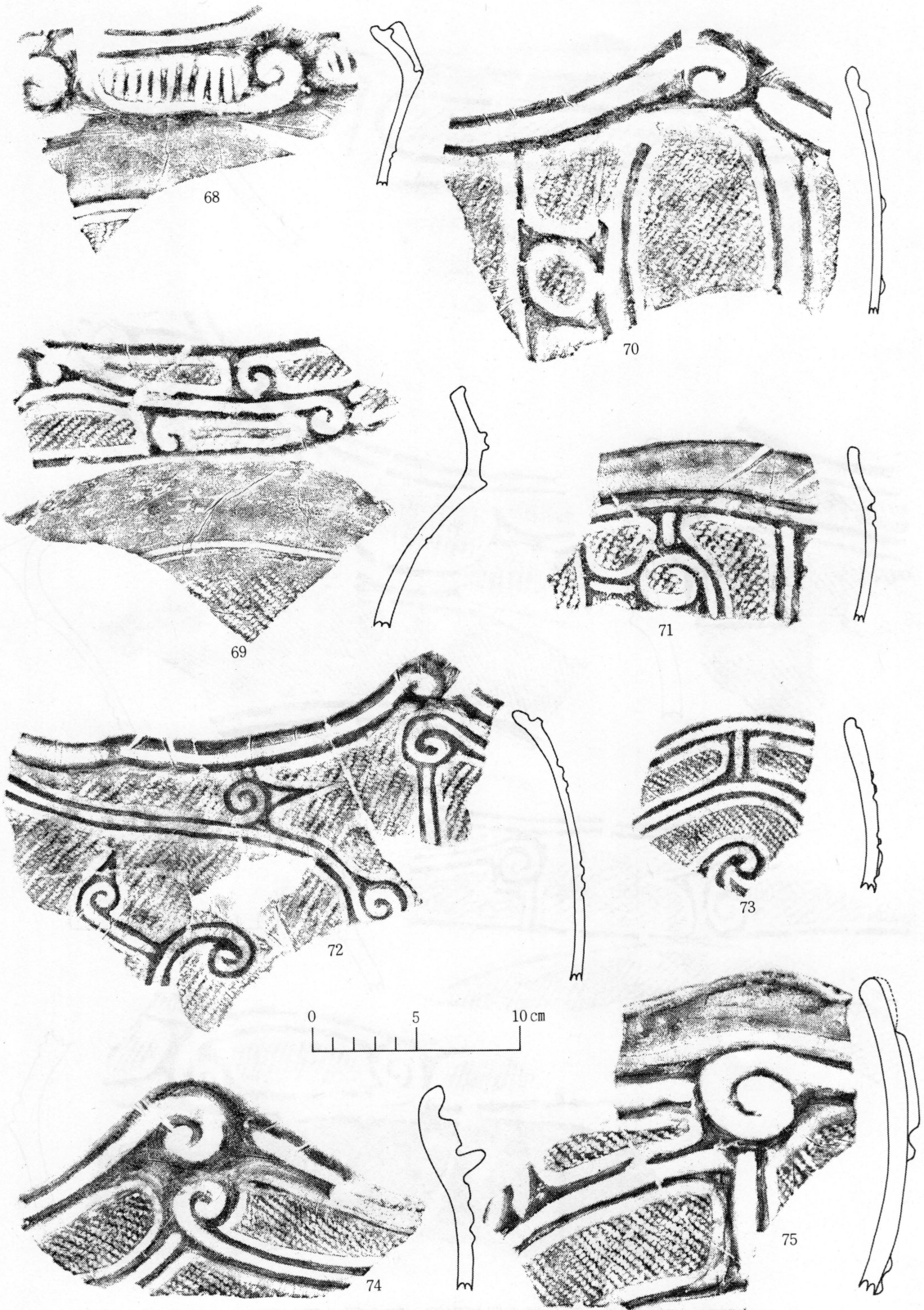


第９図　第２群土器拓影図

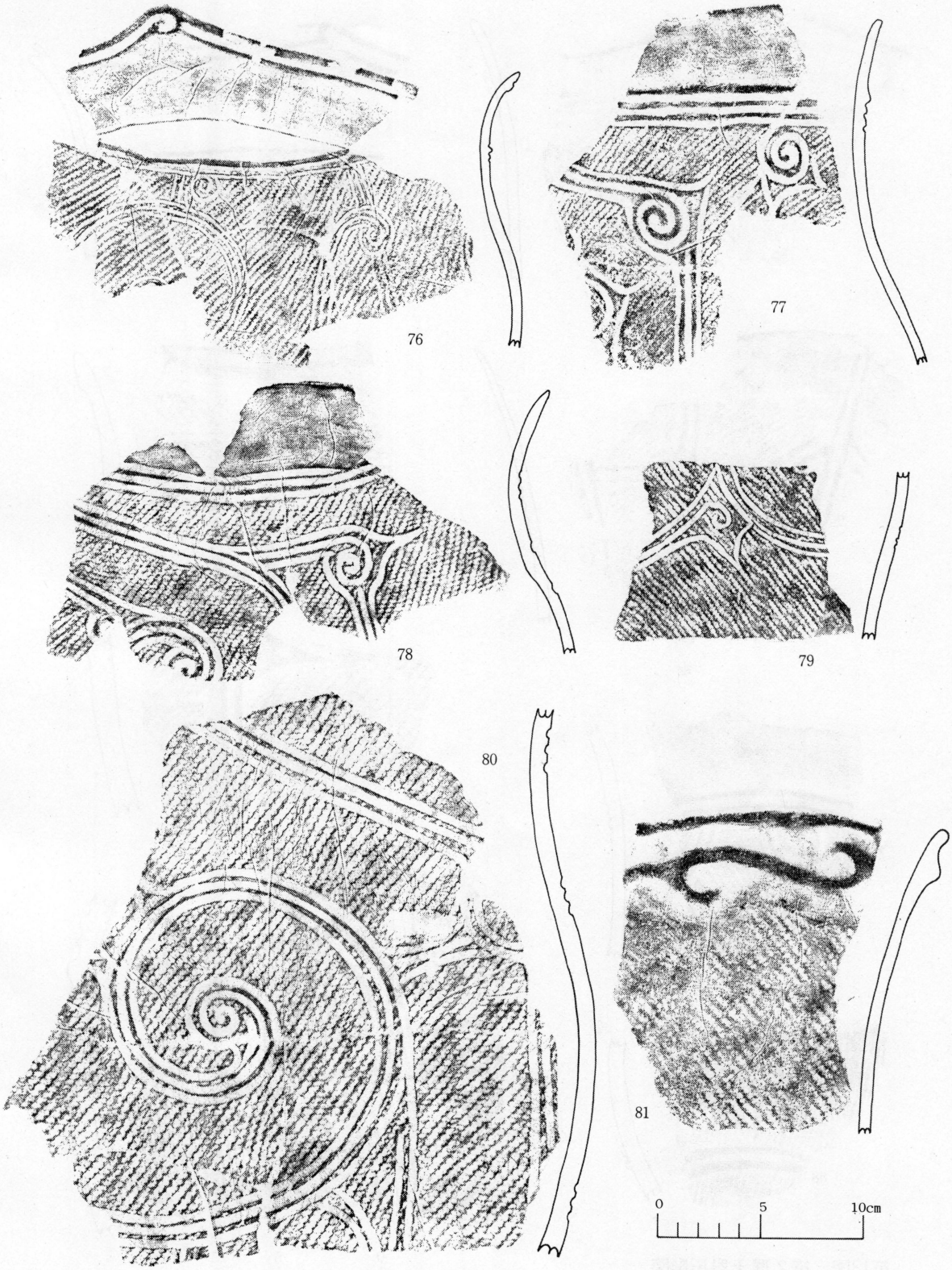
第４類（57～59）・第５類（60～62）



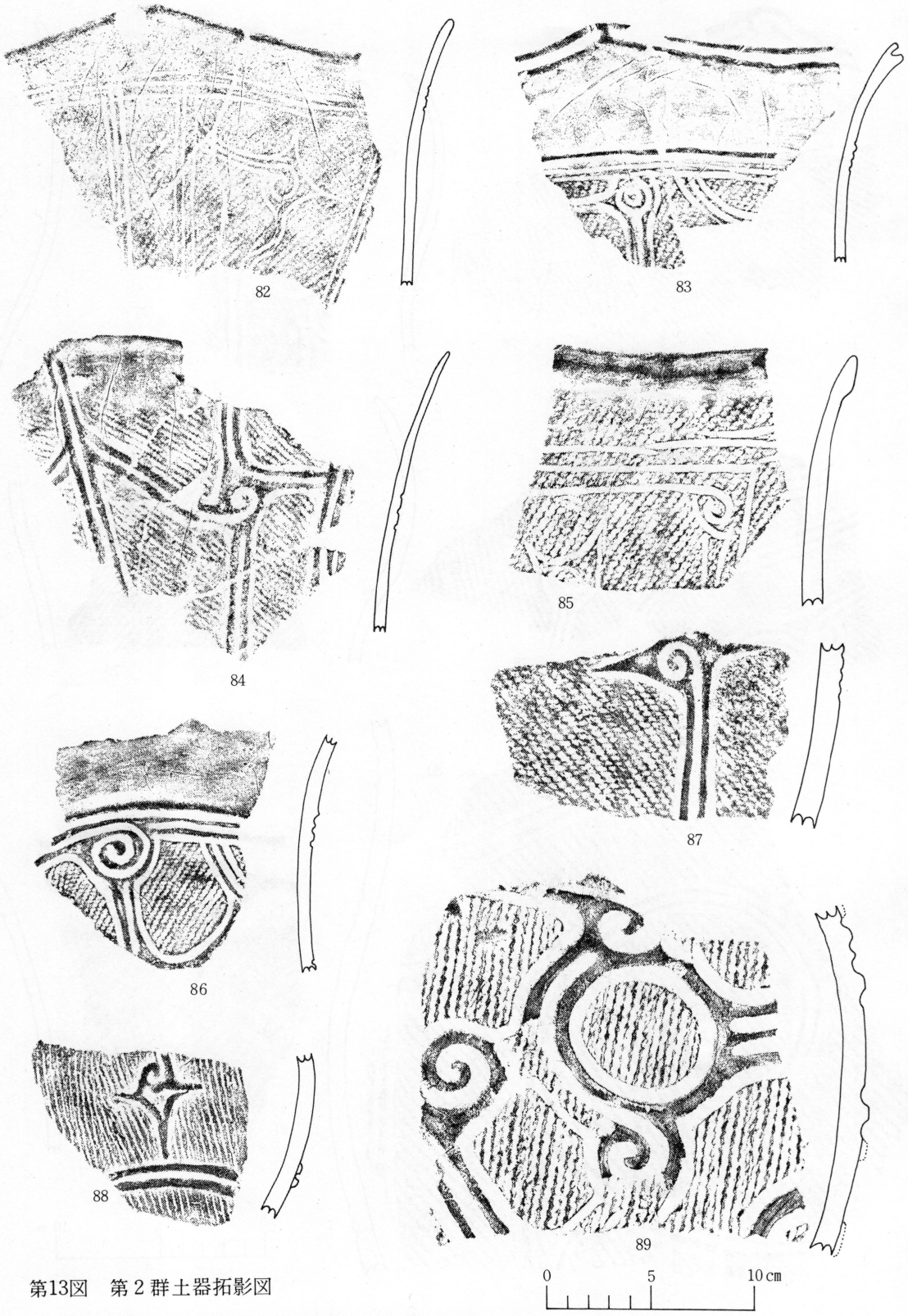
第10図　第２群土器拓影図　第６類（63～67）



第11図　第２群土器拓影図　第６類（68・69）・第７類（70～75）

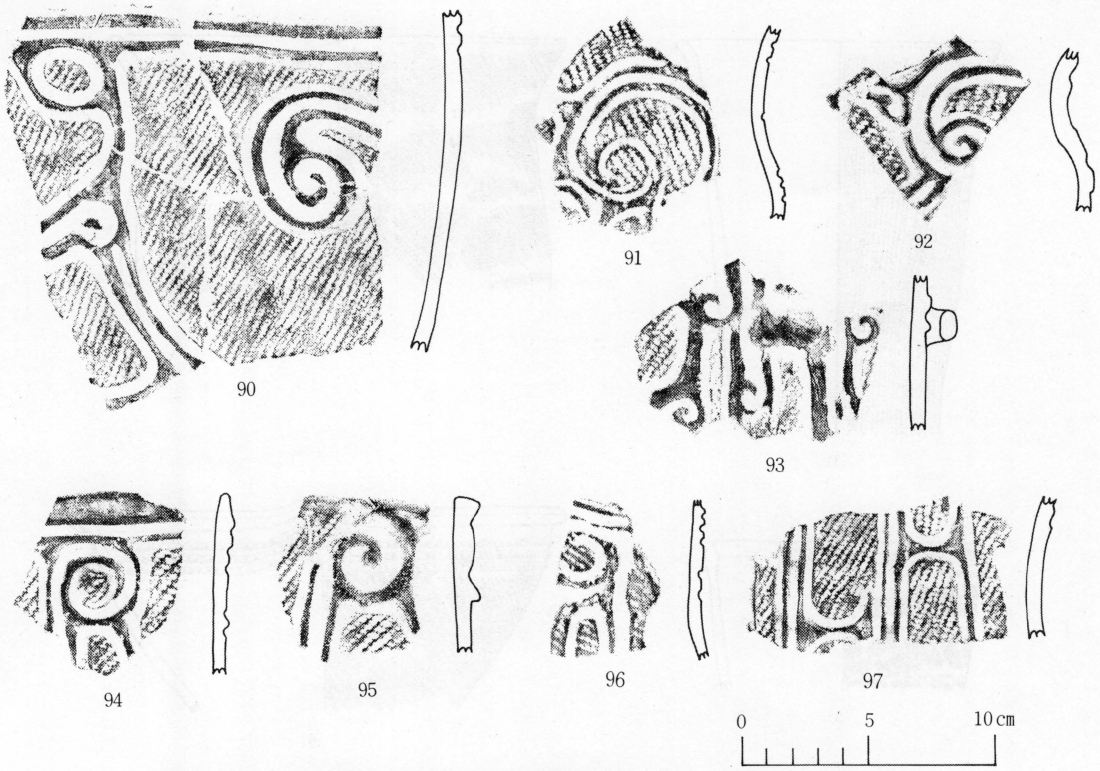


第12図　第２群土器拓影図　第８類（76～80）・第９類（81）

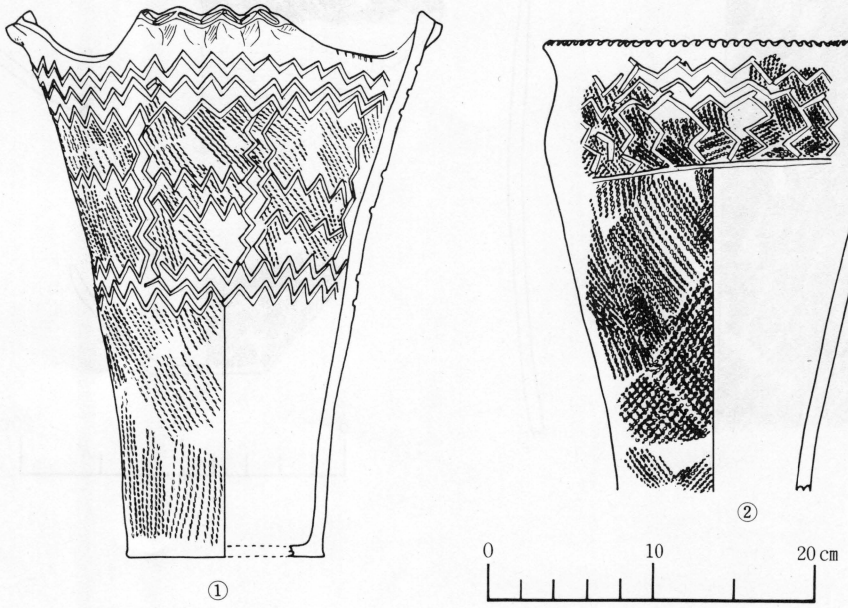


第13図　第２群土器拓影図

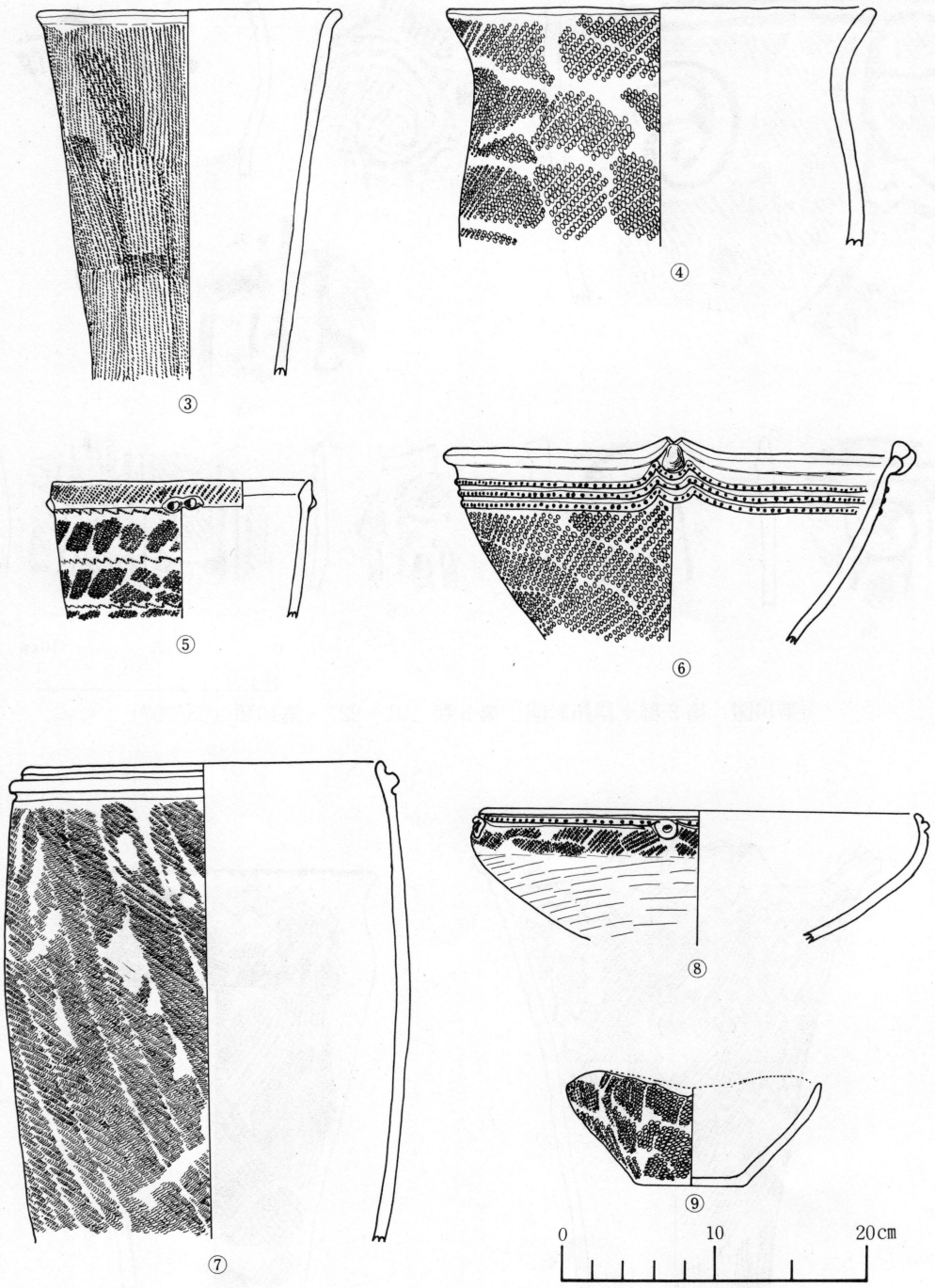
第７類（87～89）・第８類（86）・第９類（82～85）



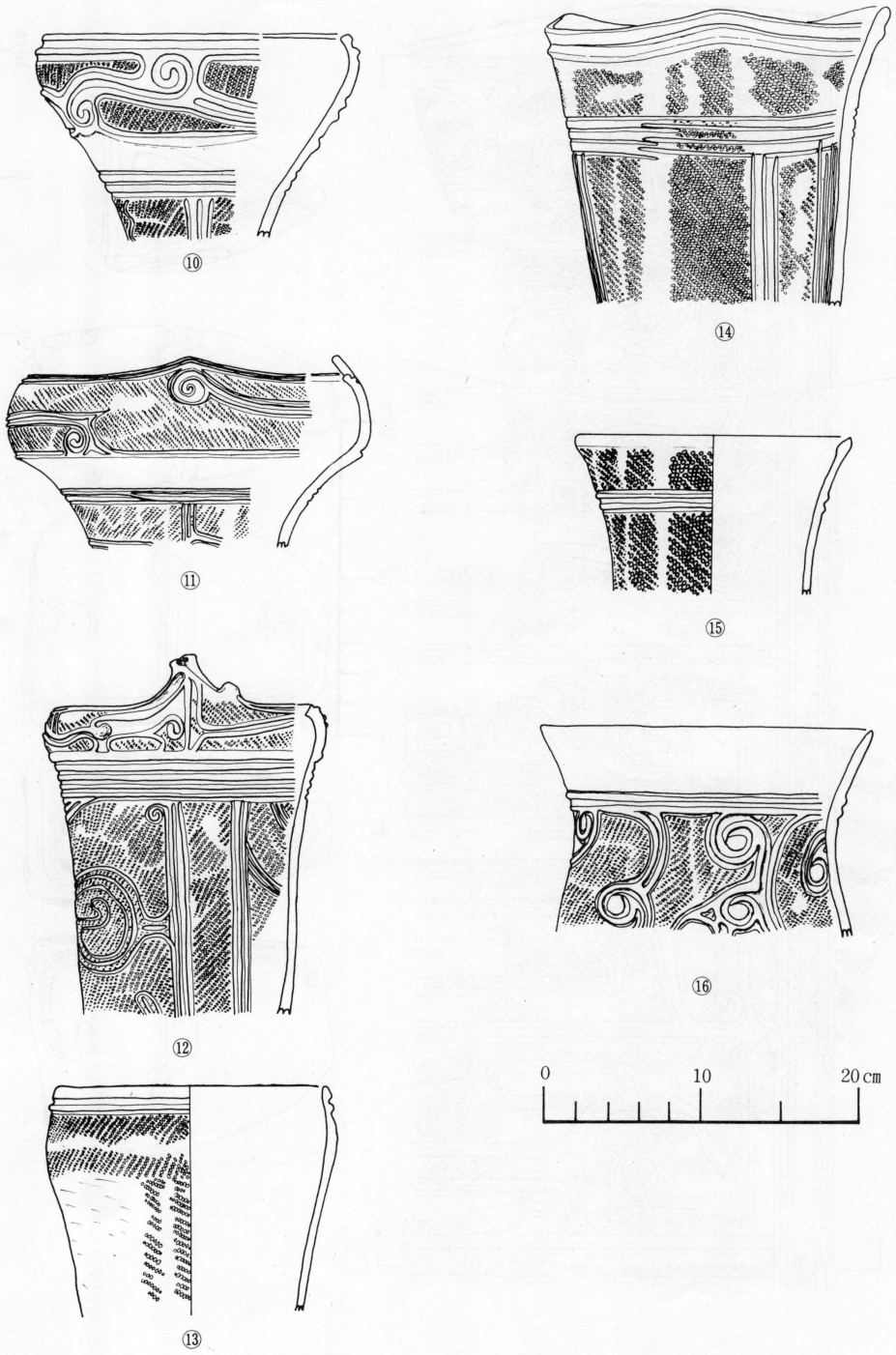
第14図　第２群土器拓影図　第８類（91・92）・第10類（93～97）



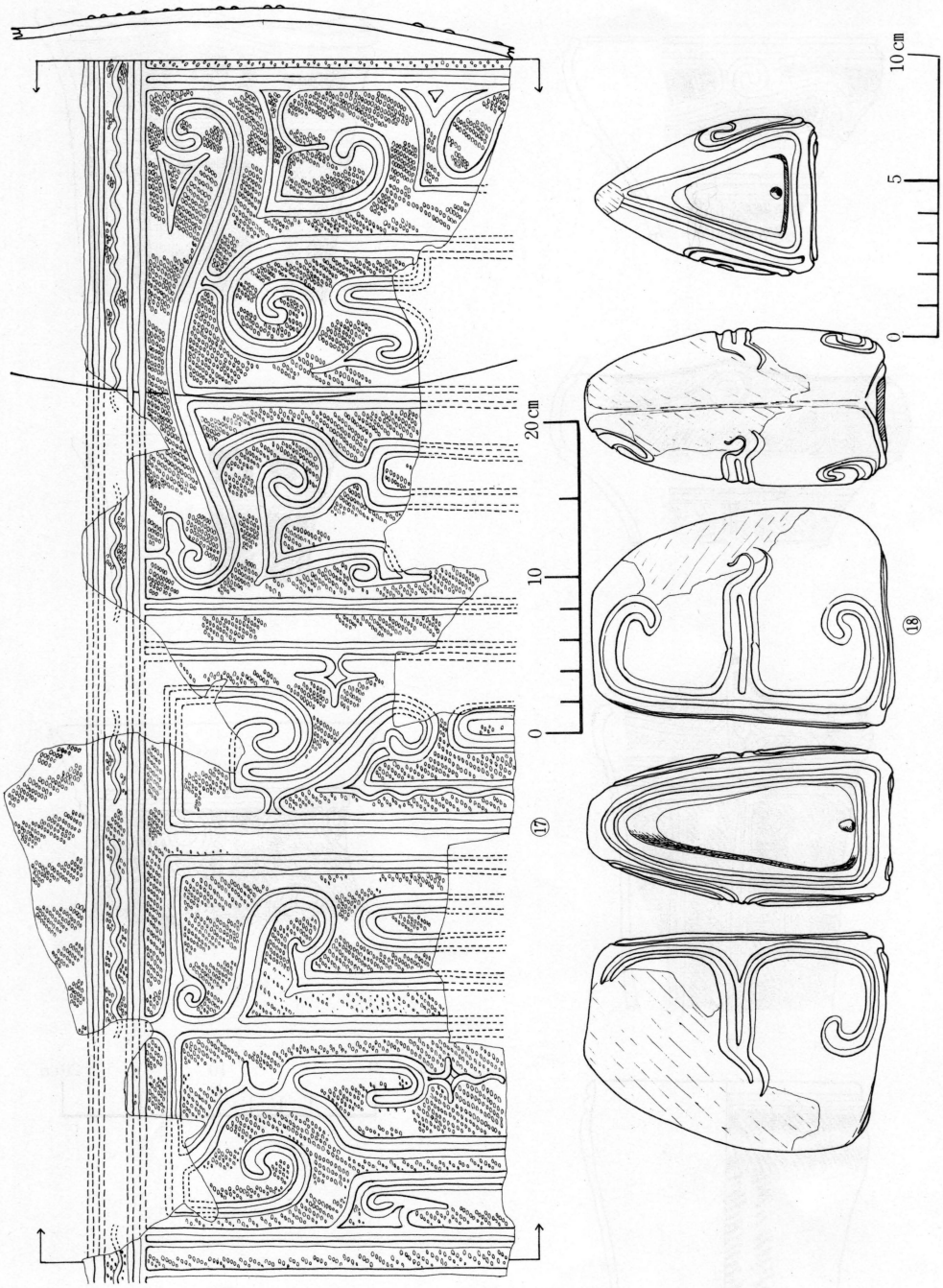
第15図　土器実測図　第１群第２類（①・②）



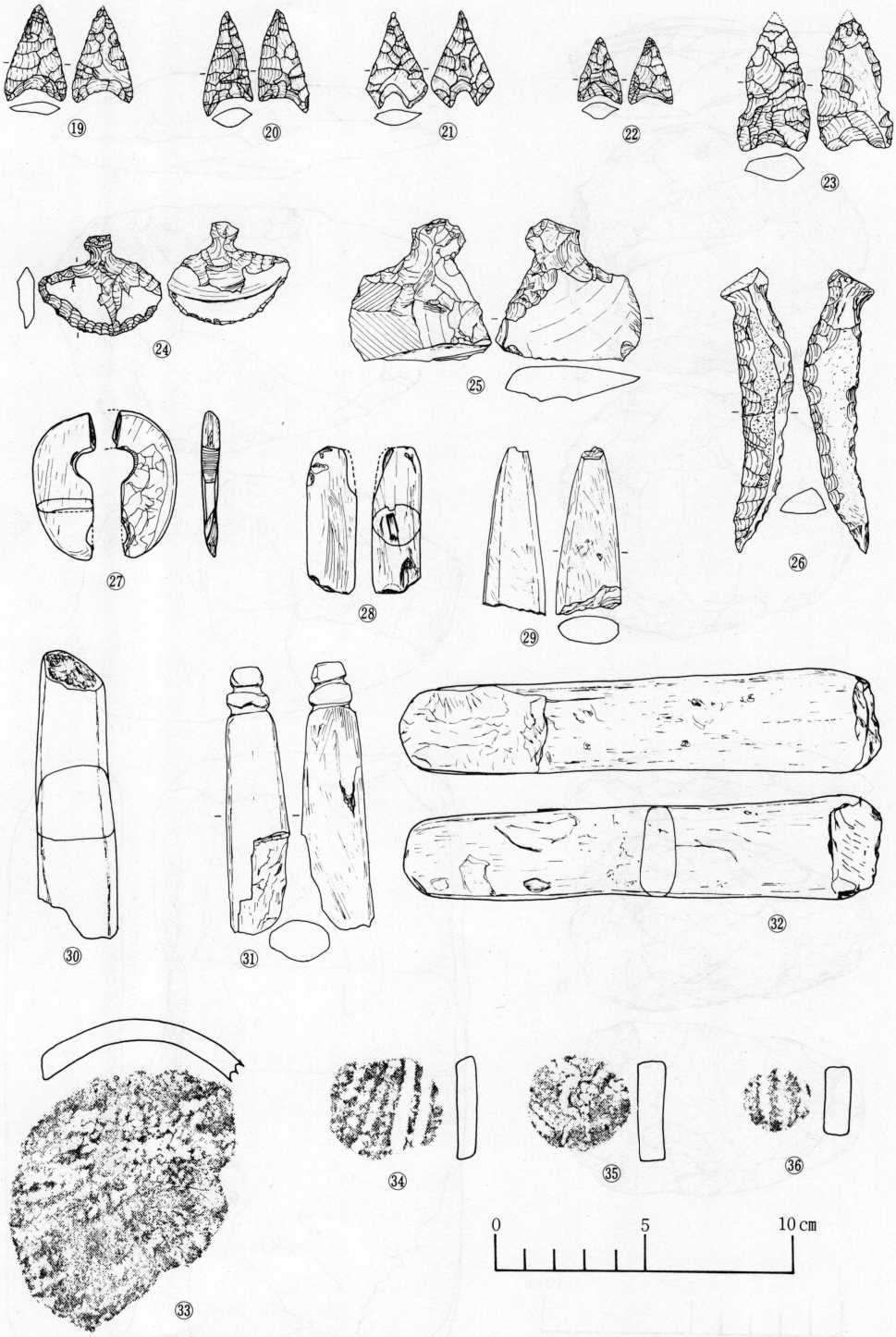
第16図　土器実測図　第１群（③・⑦）・第２群（④～⑥・⑧・⑨）



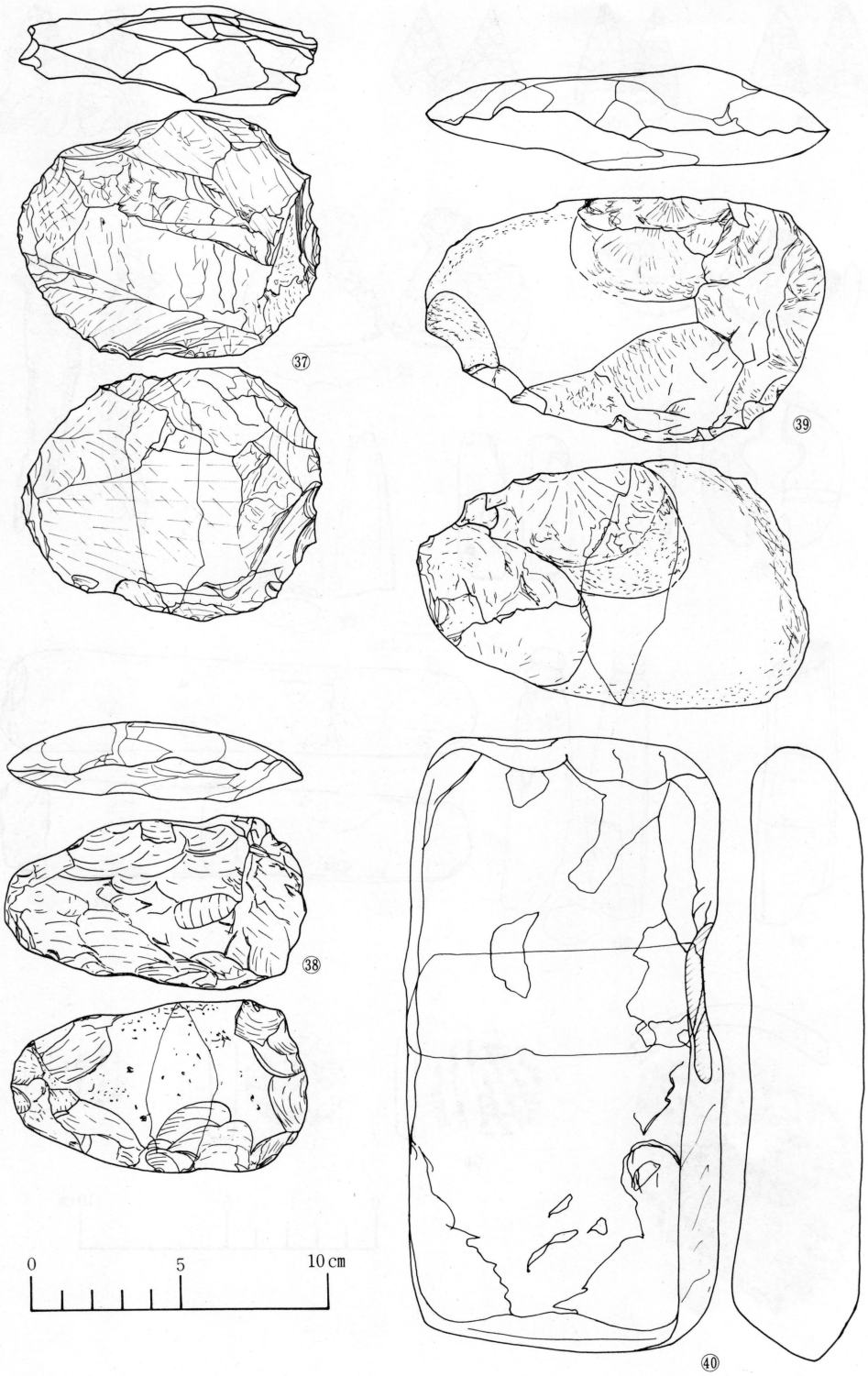
第17図　土器実測図　第２群第６類（⑩～⑬）・第８類（⑯）・第９類（⑭・⑮）



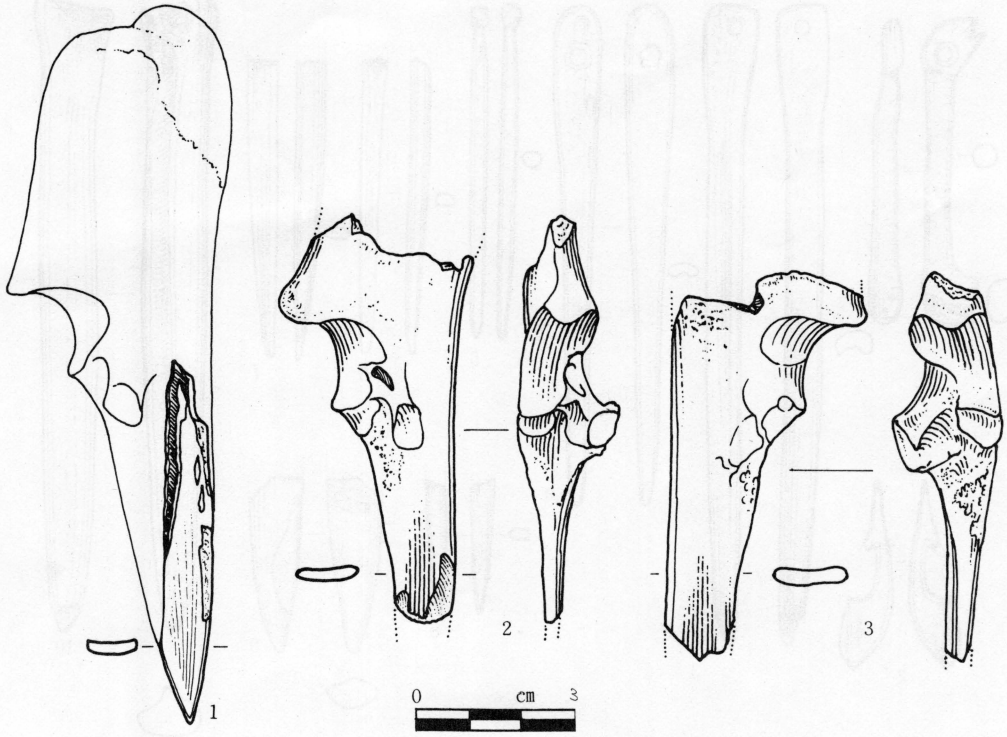
第18図　土器展開図（第２群第８類）・土製品実測図



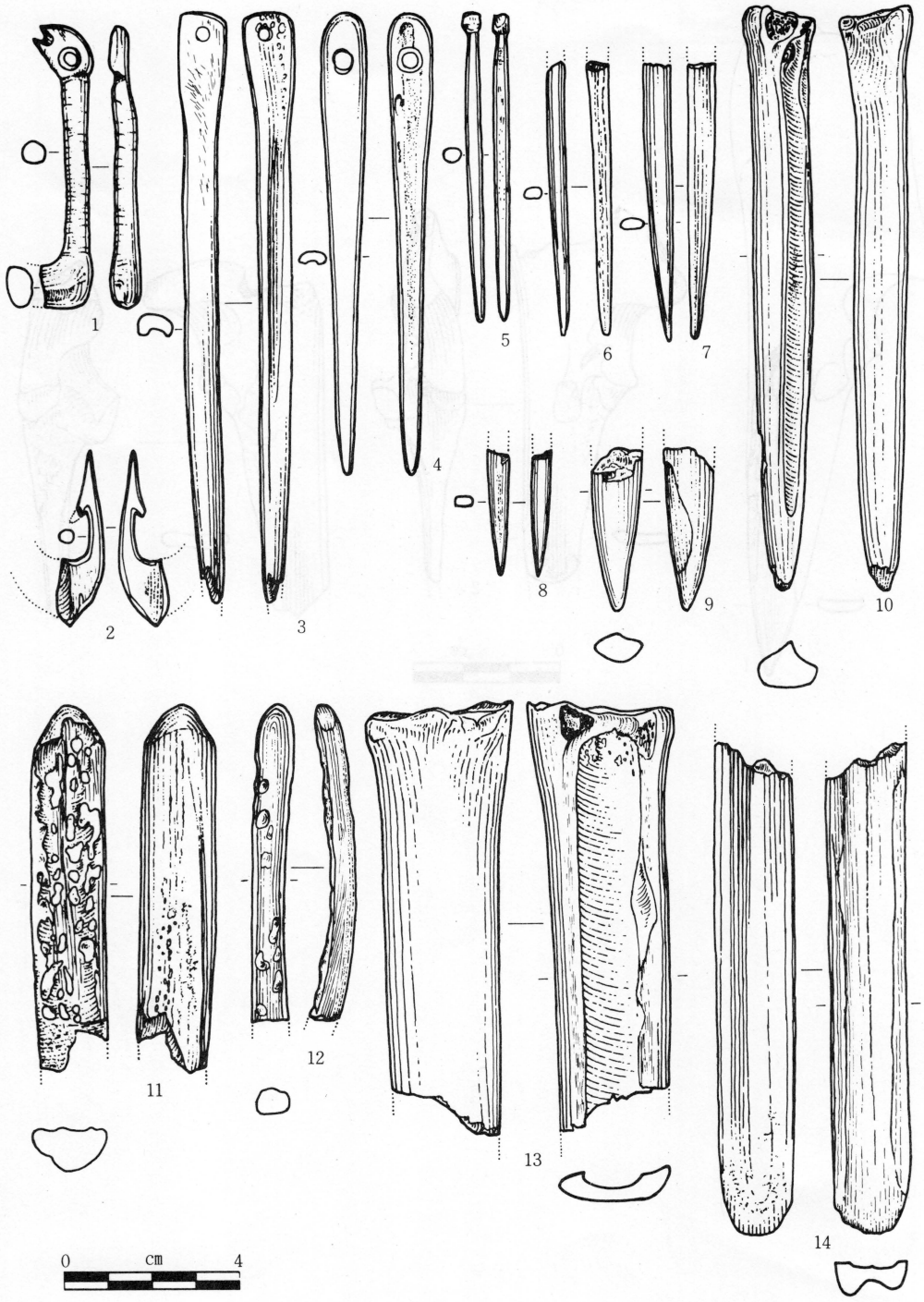
第19図　石器実測図・円形土器片拓影図



第20図　石 器 実 測 図



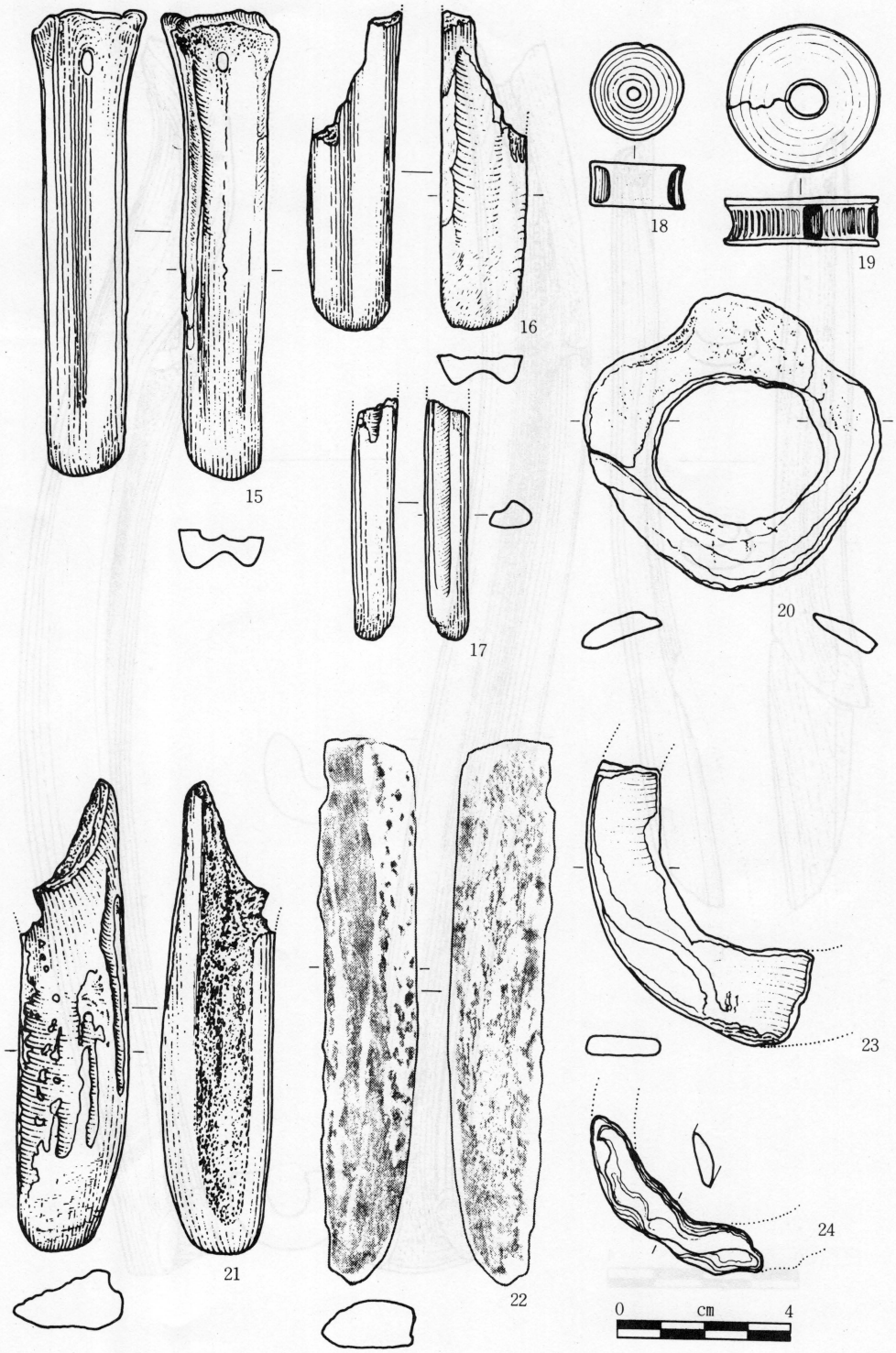
第21図　シカ尺骨製刺突具



第22図　骨　角　製　品

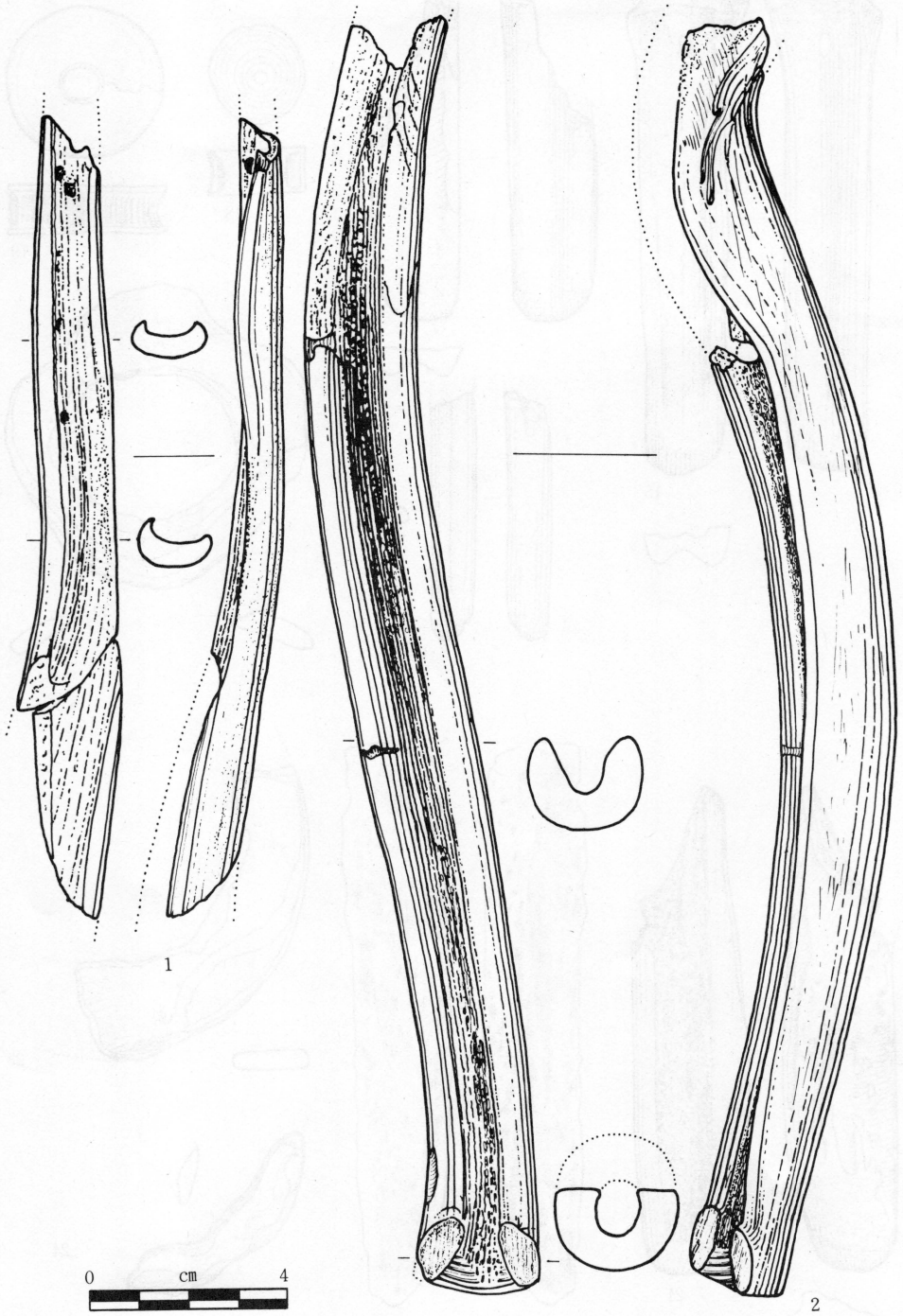
1・2：釣針、3～5：頂部装飾をもつ骨針、6～8：骨針類、

9・10：刺突具、11・12：棒状角器、13～17：ヘラ状骨器（シカの中足骨製）



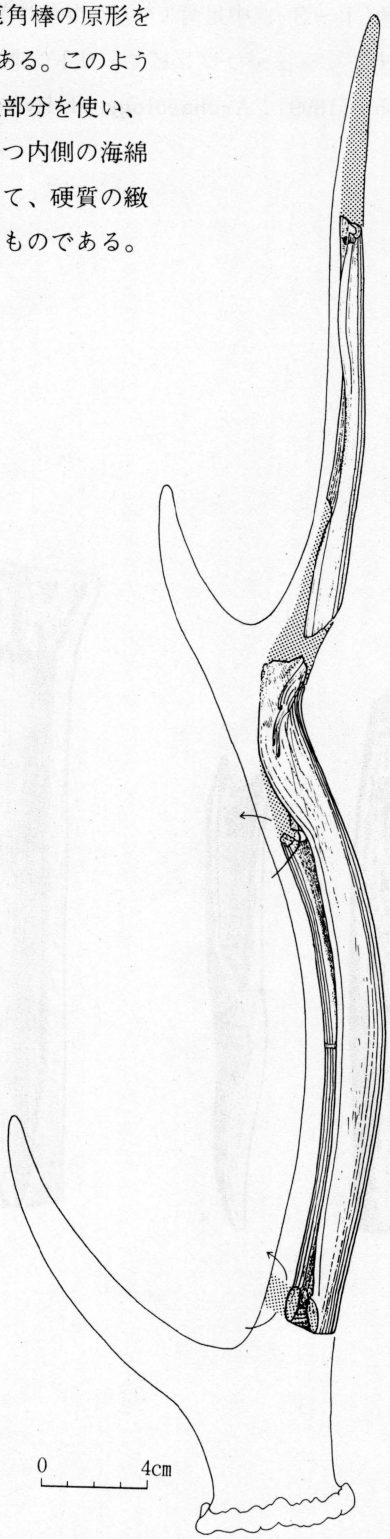
第23図　骨　角　貝　製　品

18・19：サメ類椎体穿孔品、20・23・24：貝輪、21・22：ヘラ状鹿角製品



第24図　有孔の鹿角棒

この図は、有孔の鹿角棒の原形を推定復原したものである。このように鹿角のほとんど大部分を使い、これを縦に割り、かつ内側の海綿質部分をえぐりとって、硬質の緻密質部分のみにしたものである。

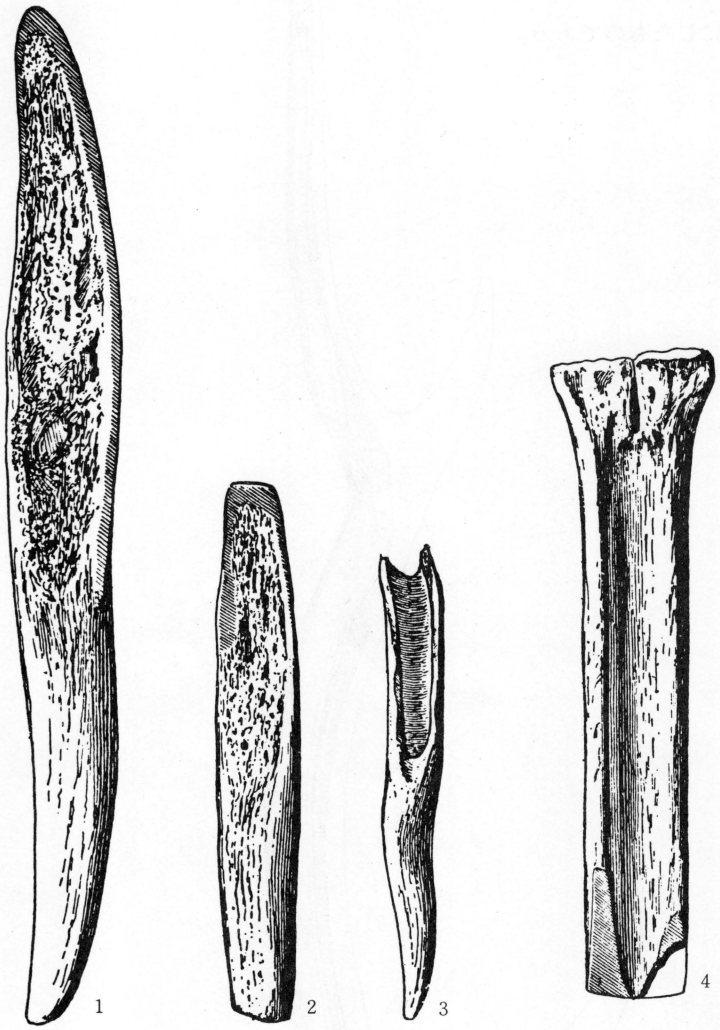


第25図　有孔の鹿角棒推定復原図

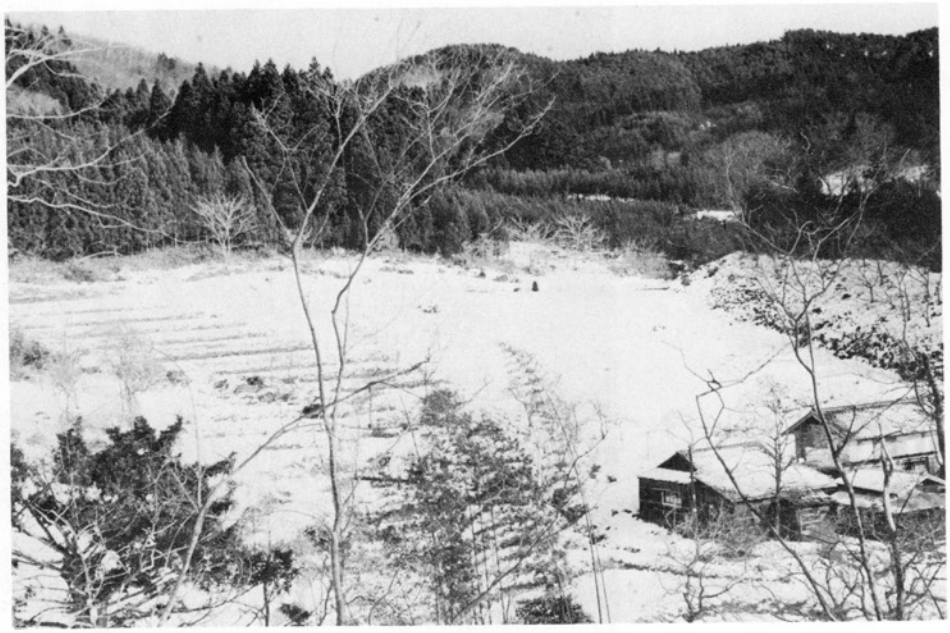
エルク鹿の角(1～3)、中足骨(4)で作られたヘラ、あるいは斧

ブリティッシュ・コロンビア・リトン遺跡出土 (1～4：1/2)

Smith (1899)：Archaeology of Lytton. P145



第26図 参 考 資 料



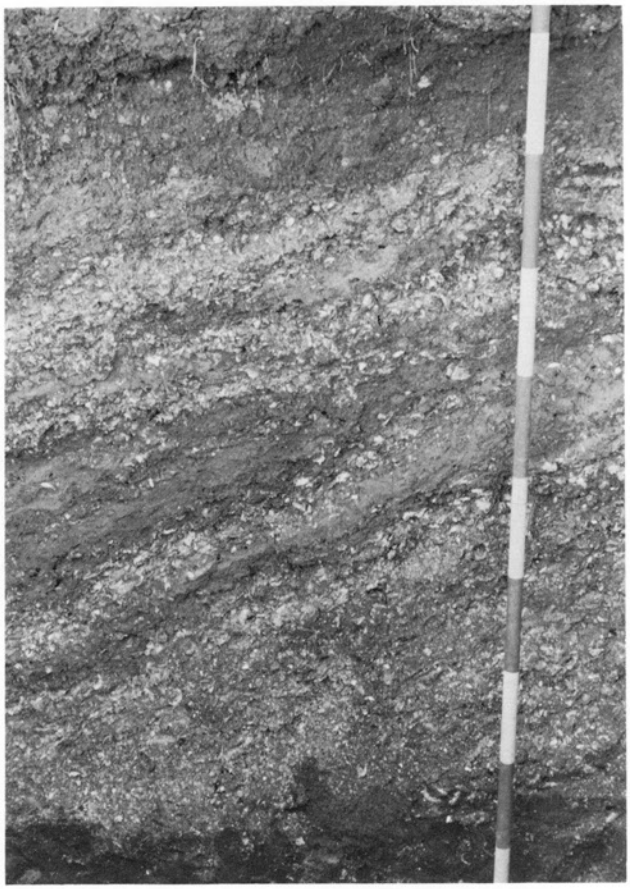
ＰＬ１　遺跡遠近景（上・南西より）　発掘開始（下・北東より）

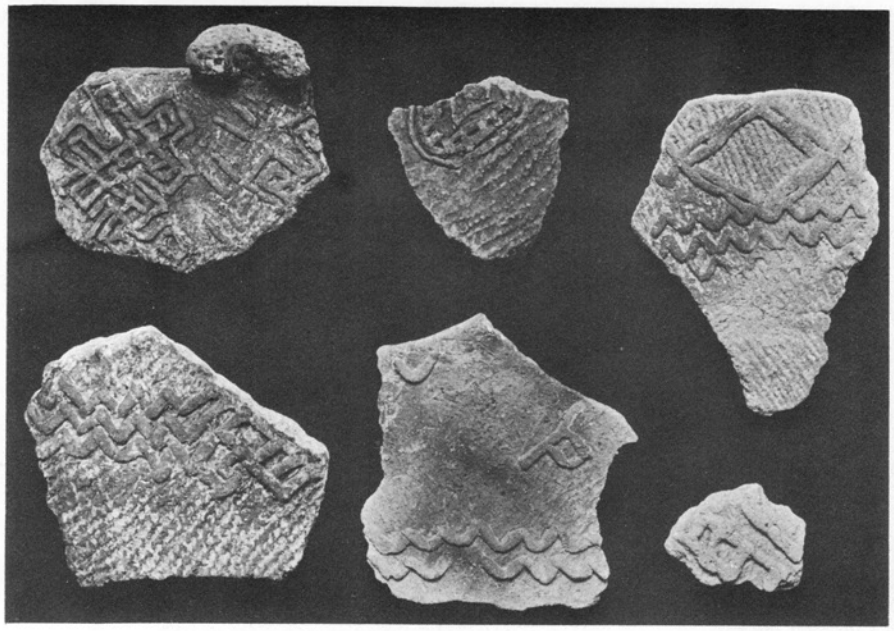
PL 2

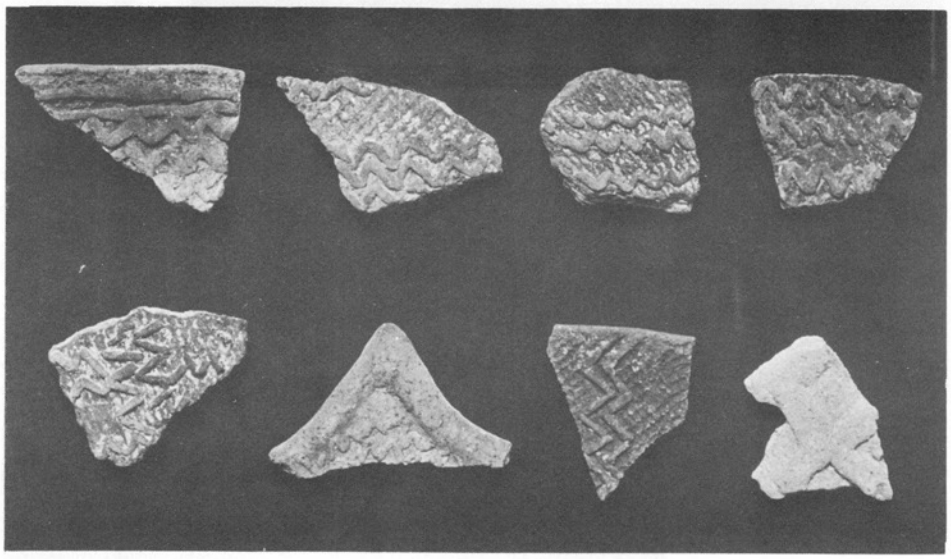
堆積状況

上・B 2 区北壁

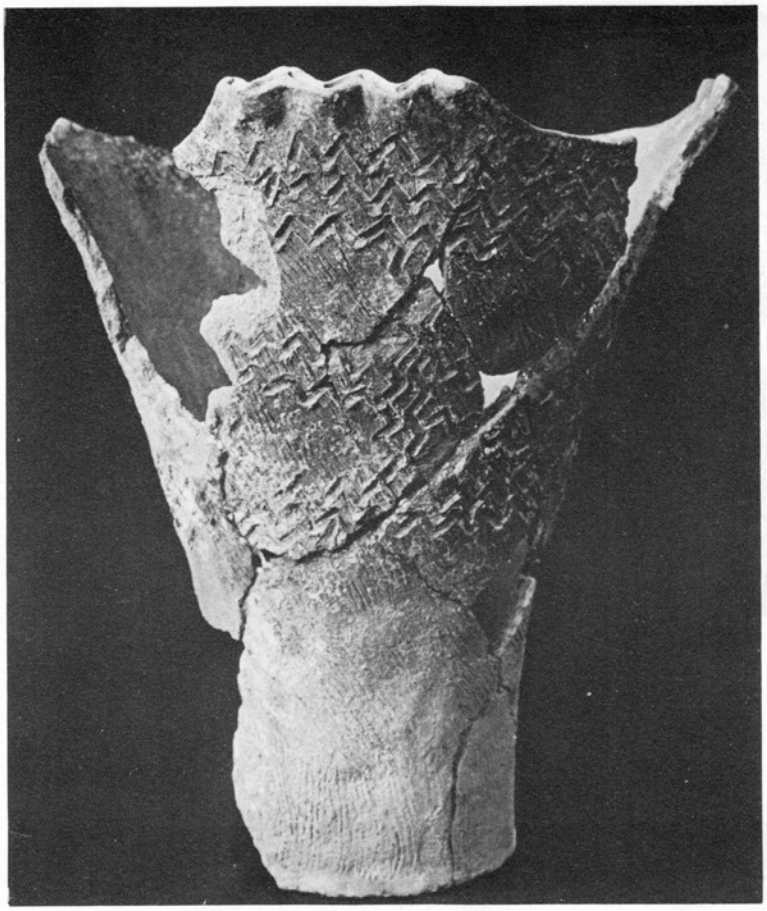
下・B24区北・西壁

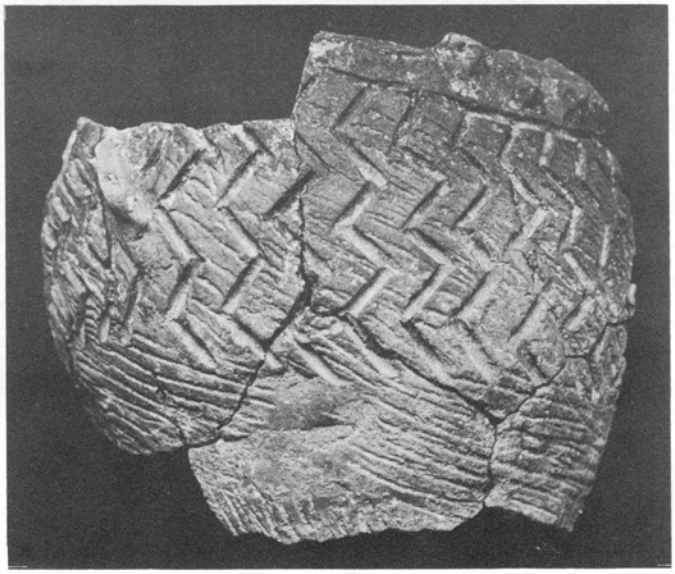




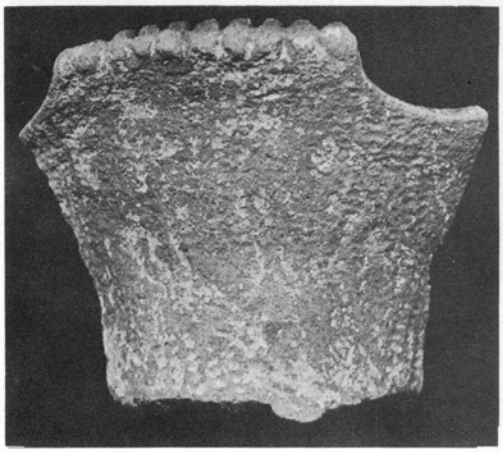


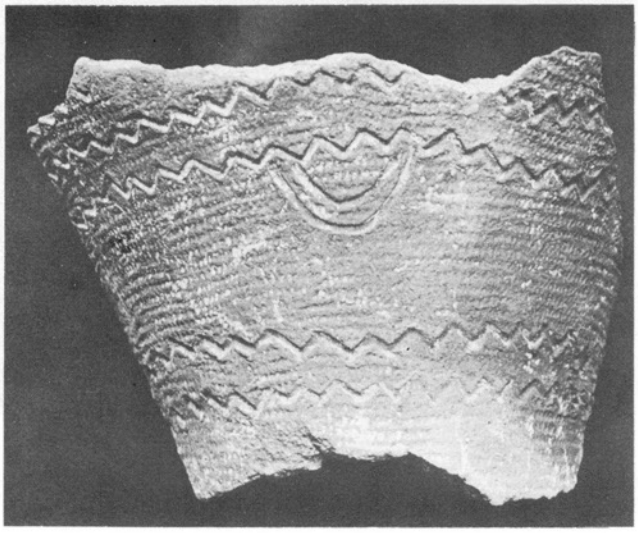
ＰＬ３　第１群第１類土器



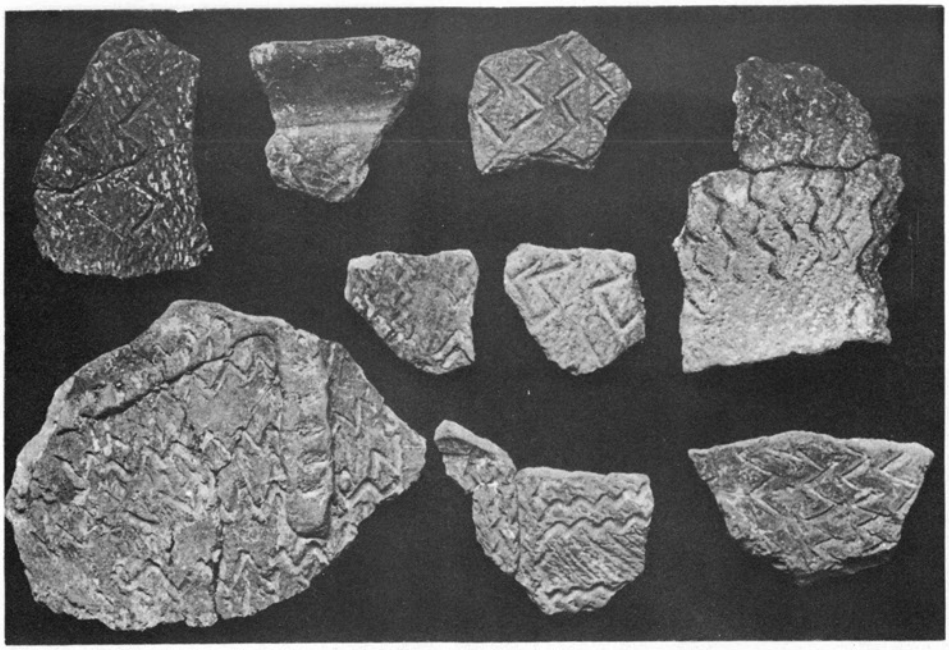


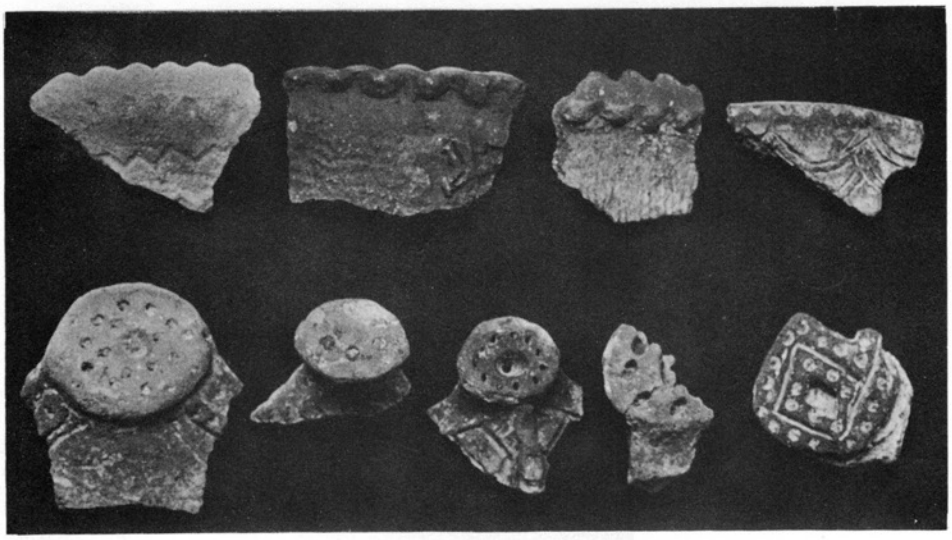
ＰＬ４　第１群第２類土器



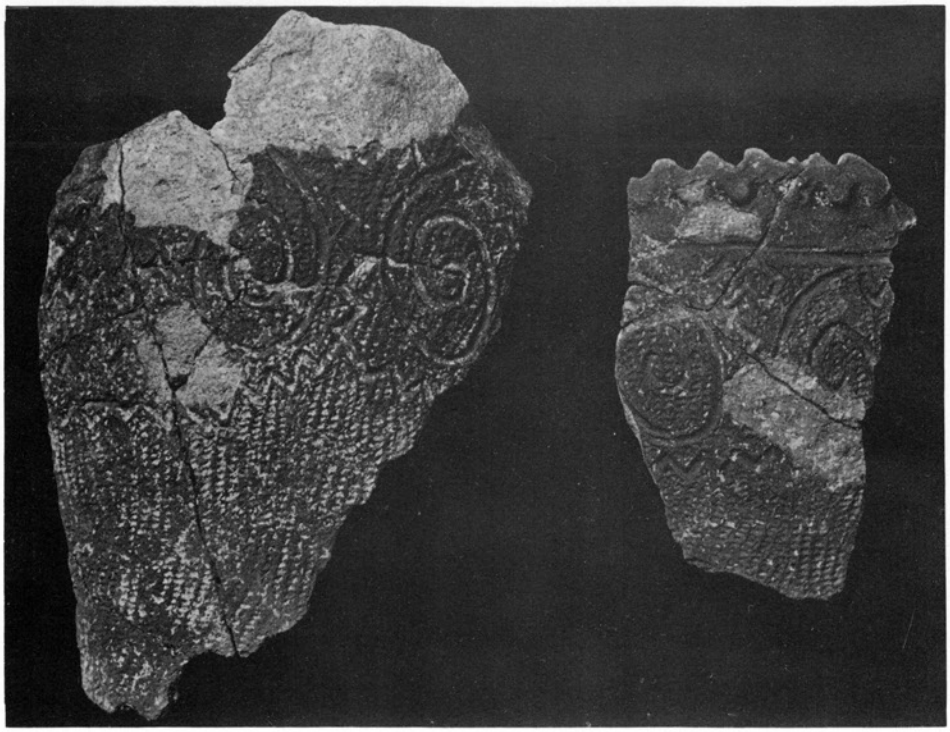


PL 5　第1群第2類・第3類土器

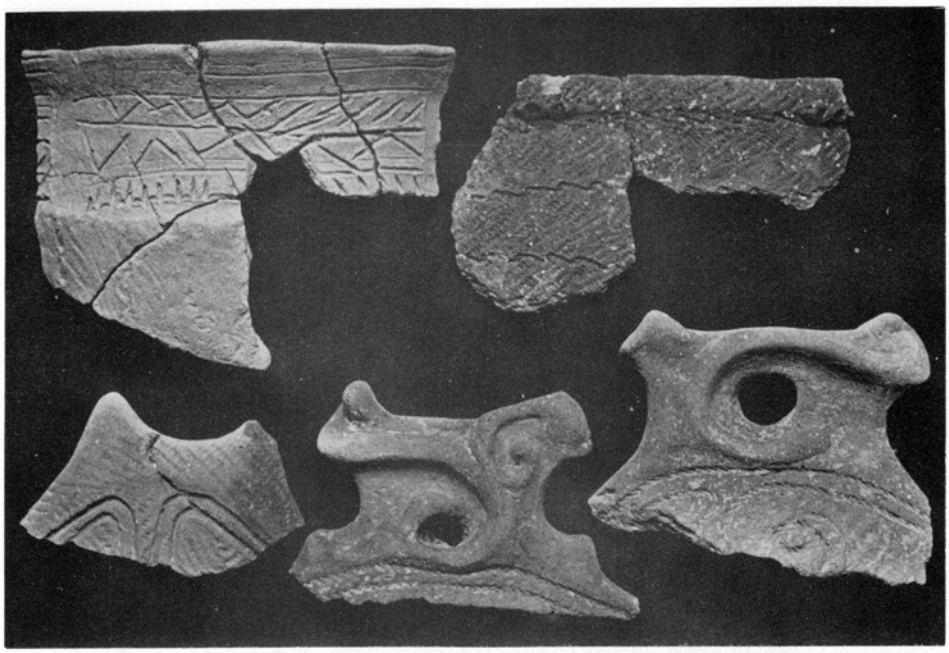


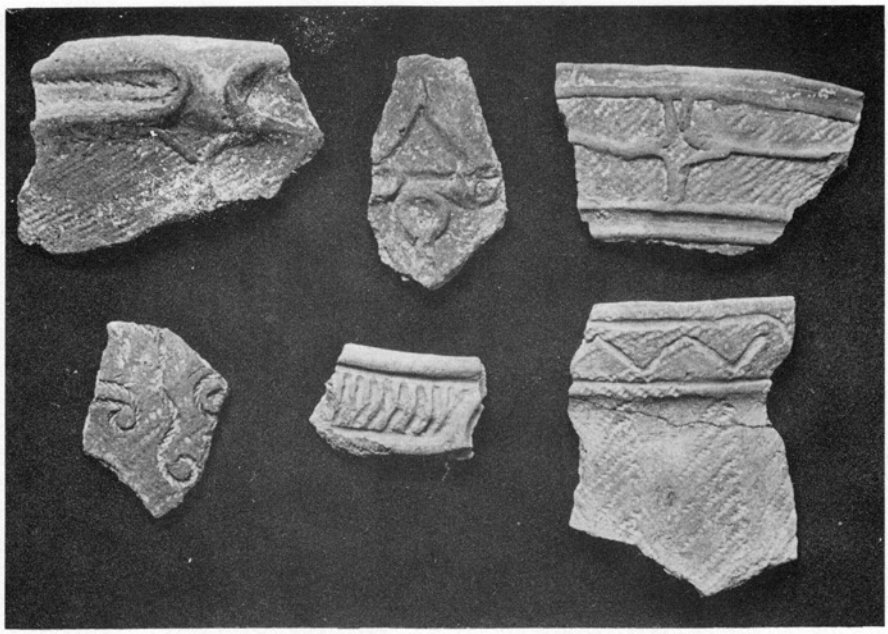


PL 6 第1群第2類（上）、 第3類（下）土器

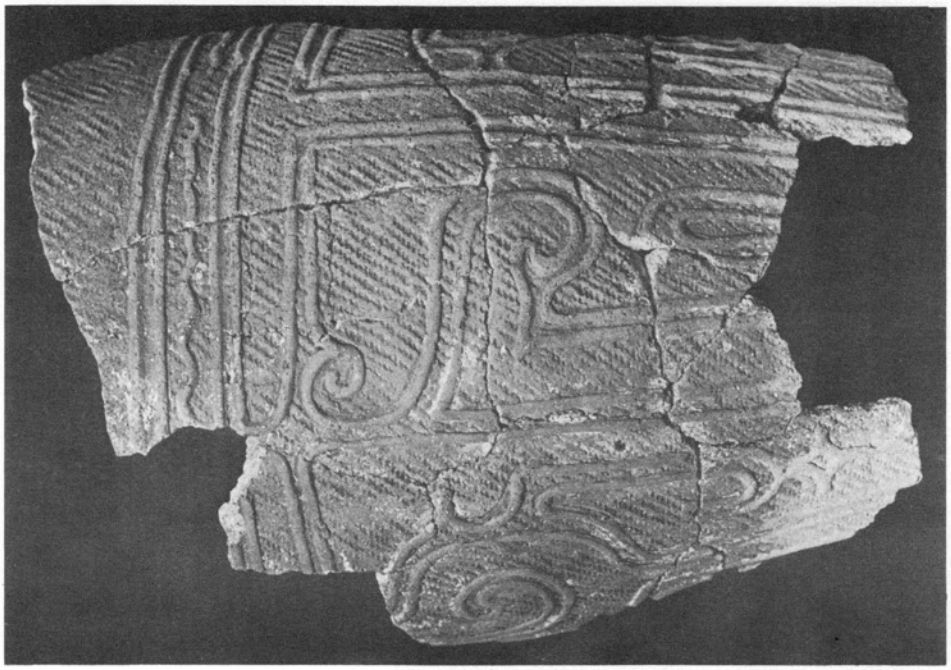


PL 7　第1群第2類(上)、第4類(下の上段)土器　第2群第1類(下の下段)土器

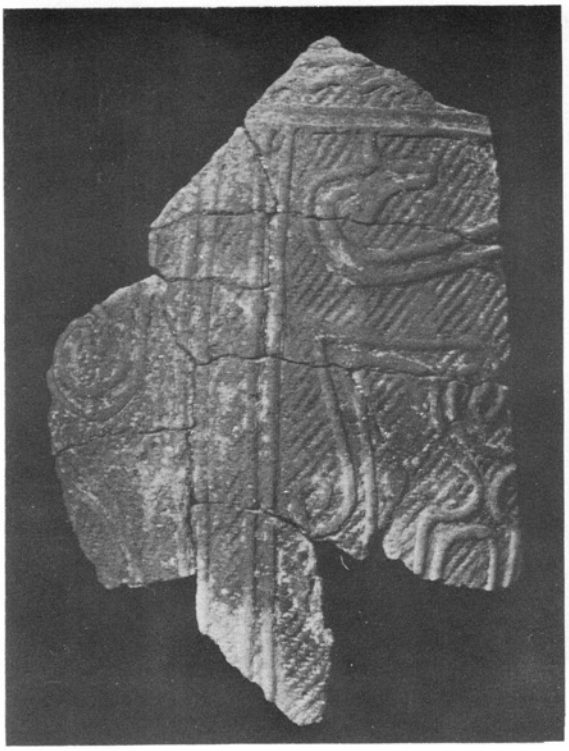




PL 8　第2群第1類(上の段)、第2類(上の下段、下の下段右2つ)、第3類(下)土器

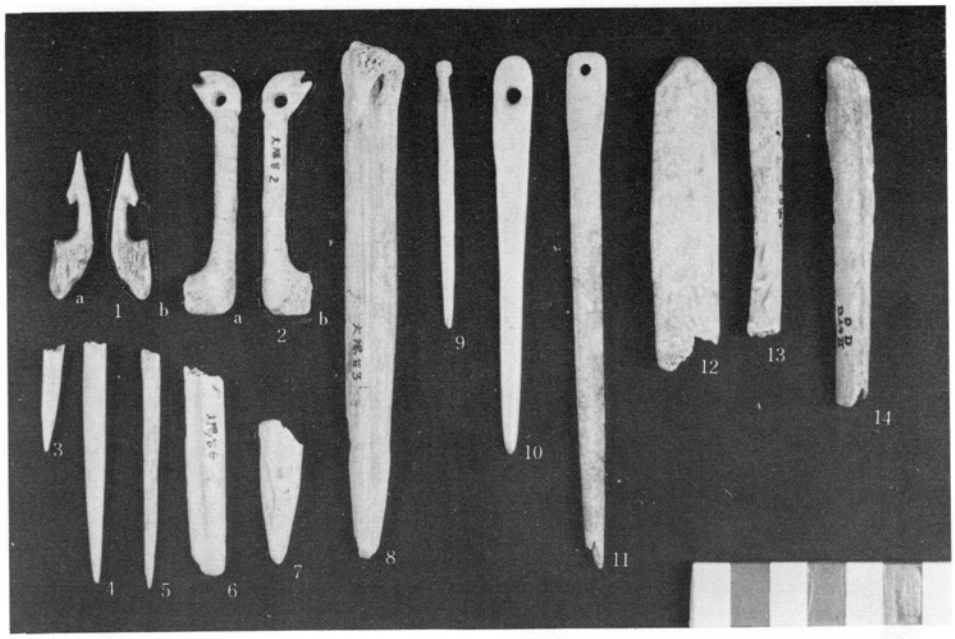


PL 9 第2群第7類土器



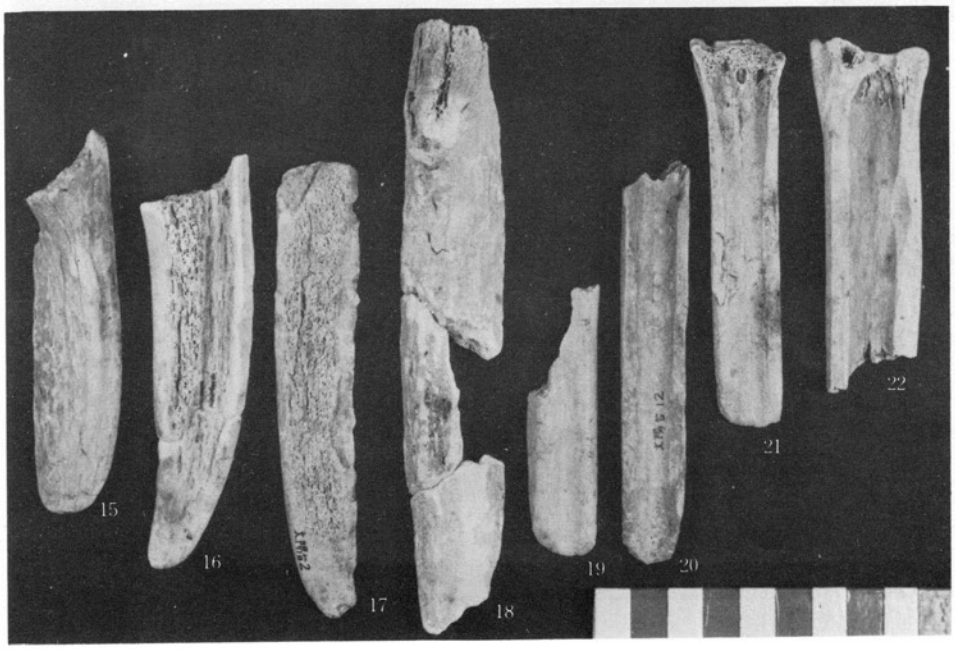
ＰＬ10 第２群第７類土器（上）、特殊土製品（下）

PL11 石器類（上）、　軽石（下）



1～2：釣針　　3～5：骨針先端　　6～8：中手・中足骨製刺突具

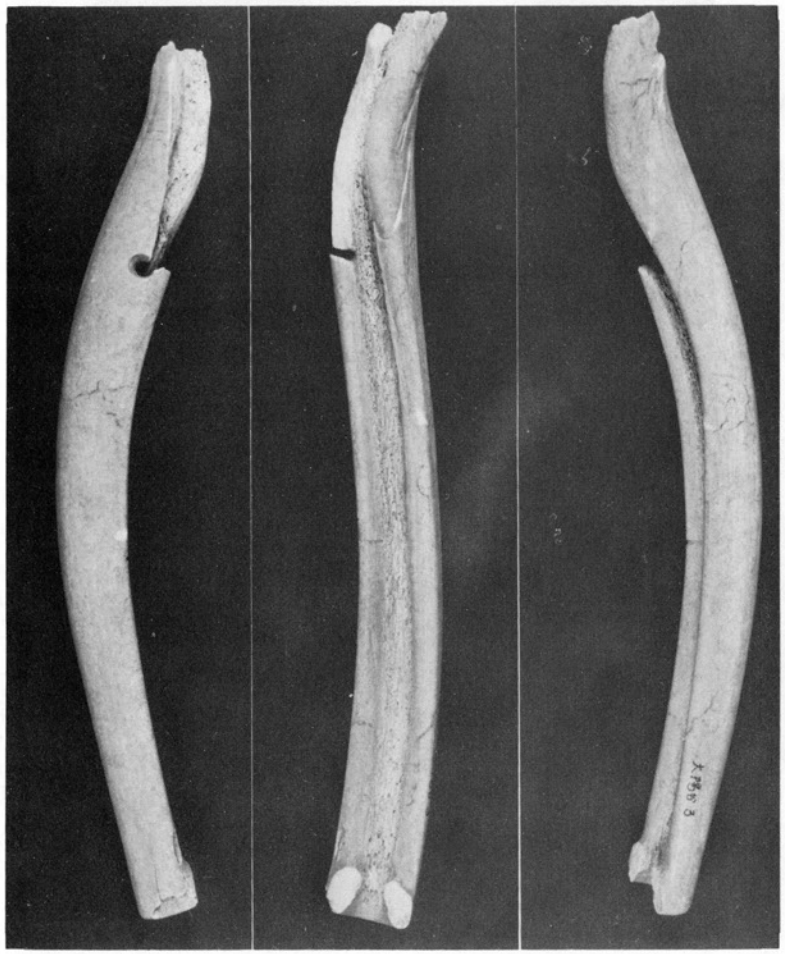
9～11：頭部装飾をもつ骨針　　12～14：棒状鹿角加工品



PL12　15～18：鹿角ヘラ状加工品　　19～22：中足骨製骨ベラ

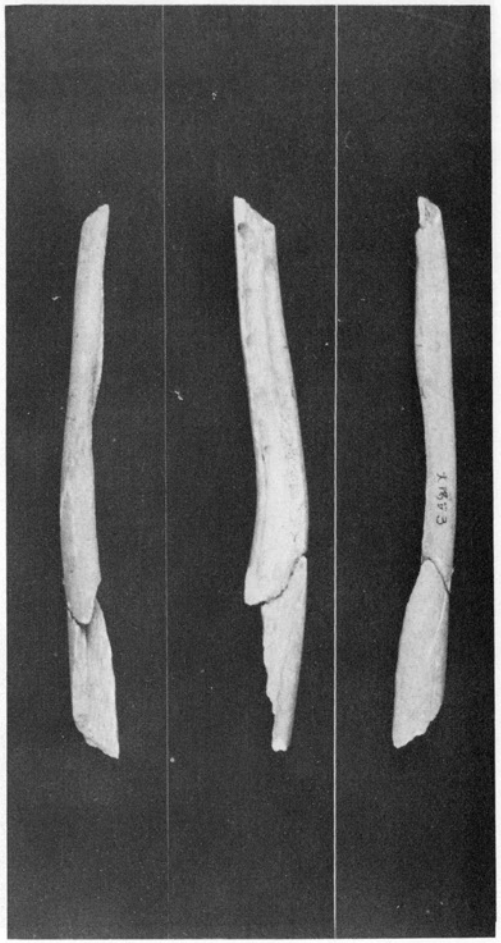
1　鹿角棒基部～中間部

a　角の前面　b　内側　c　外側



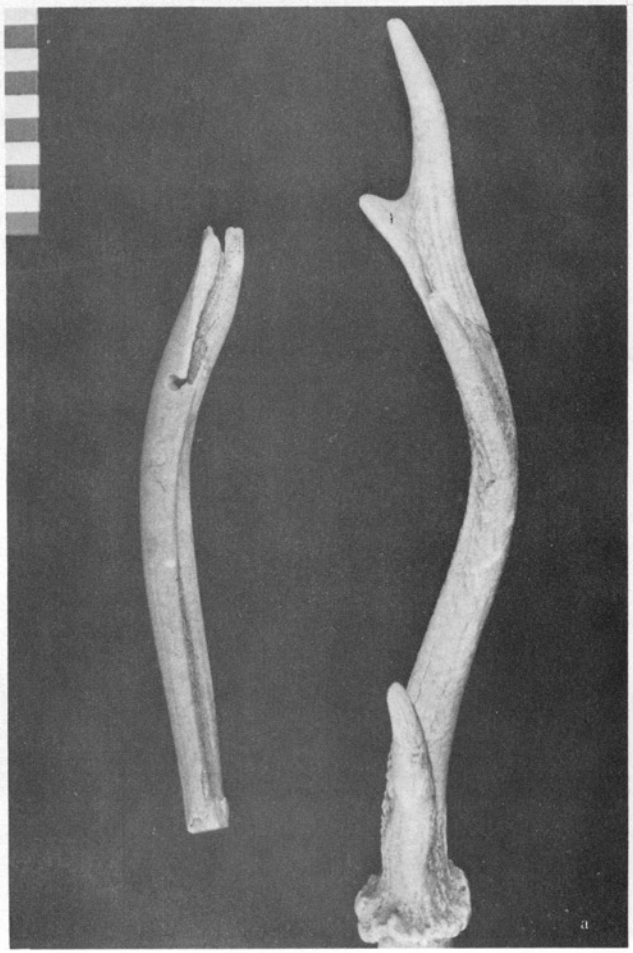
a　b　c

2　鹿角棒先端部



a　b　c

PL13



1　前面観

2　外面観

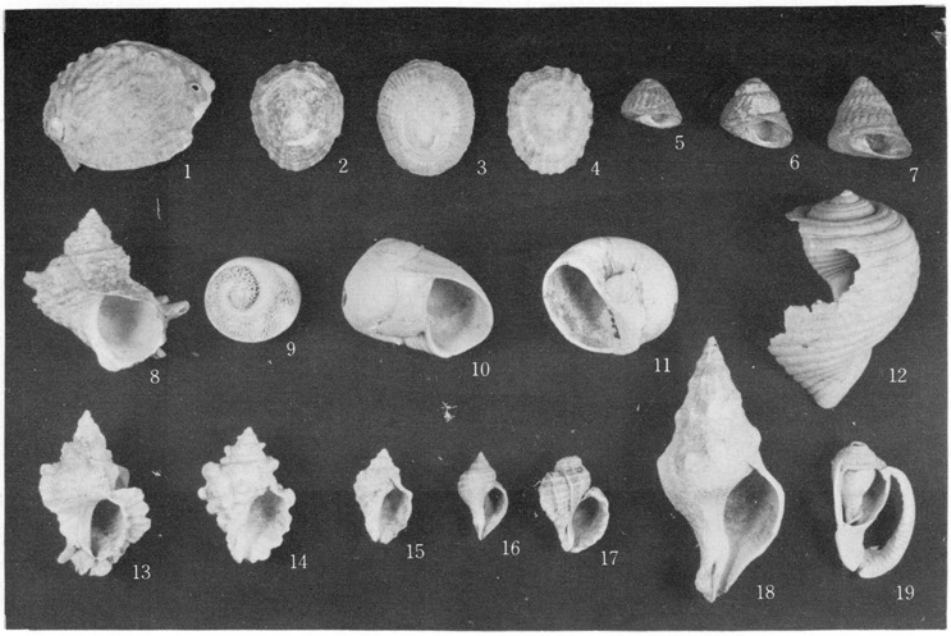
自然の鹿角（右側）と鹿角棒（左側）との対比図

自然鹿角の方がやや小さいが、角のどの部分を擦り切っていったものかがわかると思う。

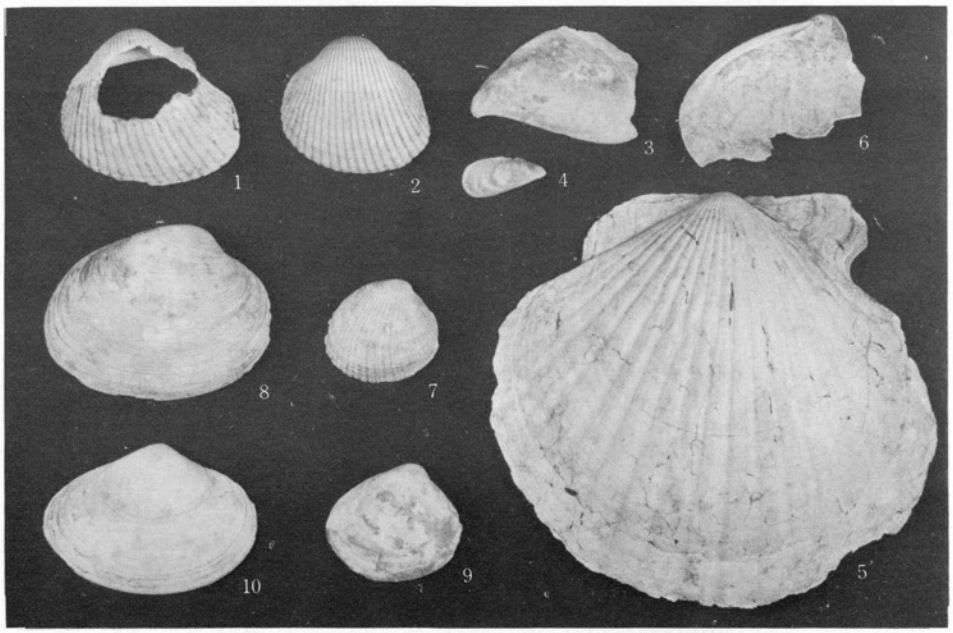
PL14

1～3：貝　輪　　4・5：サメ類椎体穿孔品

PL15 6～8：ツメタガイ穿孔品

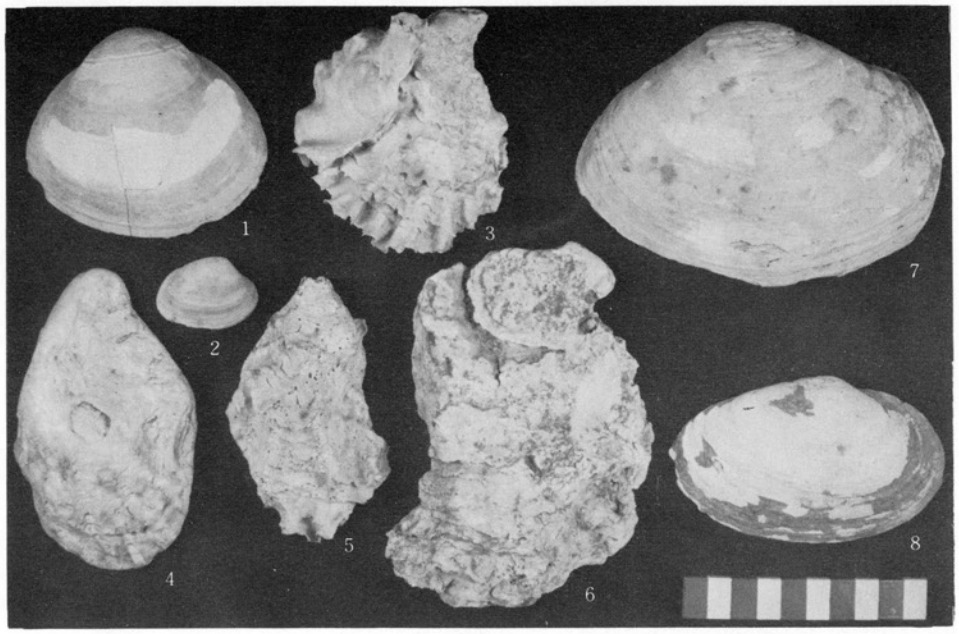


巻貝類　1クロアワビ　2ベッコウガサガイ　3マツバガイ　4ユキノカサガイ　5クボガイ　6コシダカガンガラ　7バテイラ　8サザエ　9サザエふた　10・11ツメタガイ　12ヤツシロガイ　13ヒレガイ　14レイシガイ　15イボニシ　16チヂミボラ　17エゾチヂミボラ　18ミガキボラ　19ウラシマガイ

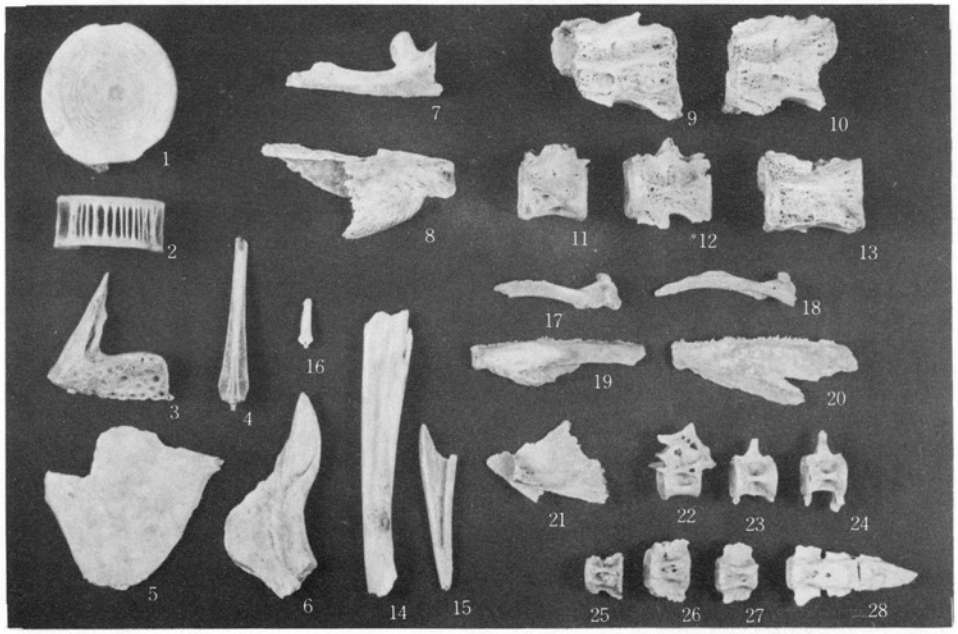


二枚貝類　1・2サトウガイ　3エゾイガイ　4ムラサキインコ　5ホタテガイ　6アリソガイ　7オニアサリ　8ウチムラサキガイ　9ハマグリ　10コタマガイ

PL16

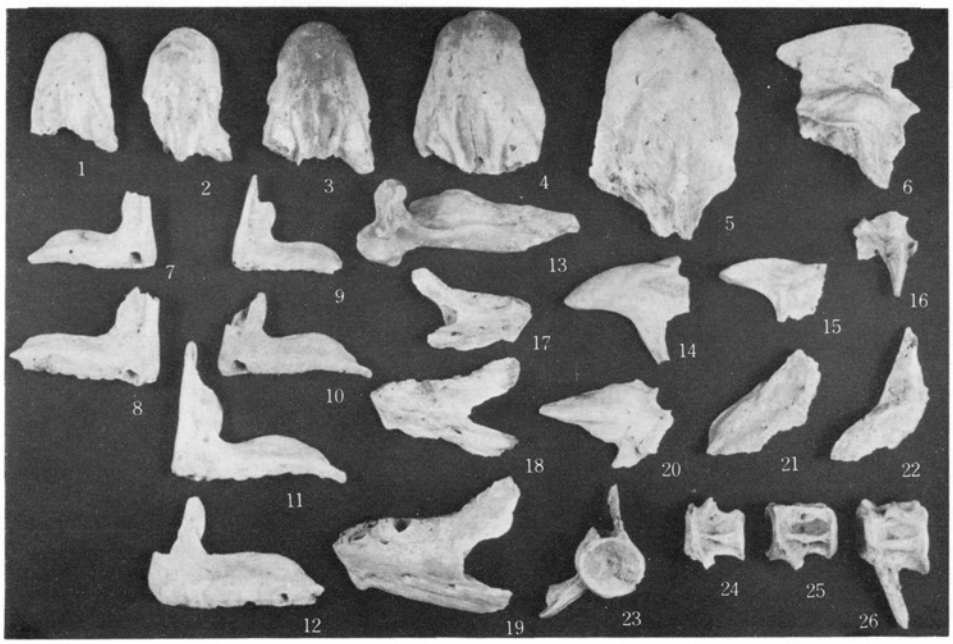


二枚貝類　1ウバガイ　2アサリ　3コケゴロモガキ　4カキ類　5マガキ
6イワガキ　7ミルクイ　8オオノガイ

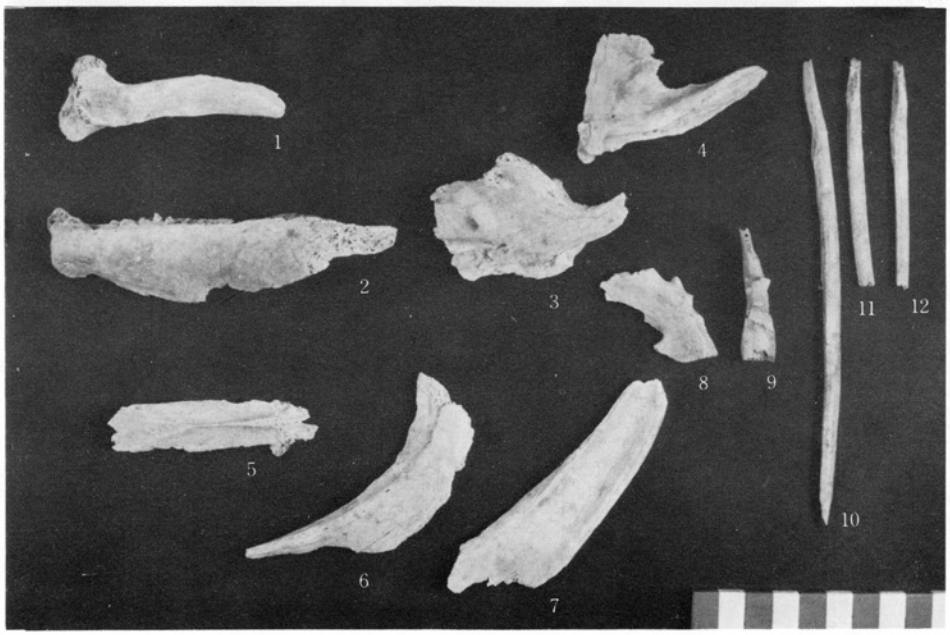


主魚類各種　1サメ類椎体　2サメ類椎体(側面)　3クロダイ右前上顎骨(唯一のもの)　4クロダイ臀鰓第2棘血管間刺　5スズキ左主鰓蓋骨　6スズキ擬鎖骨上端　7ブリ左前上顎骨　8ブリ右歯骨　8～13ブリ尾椎　14カワハギ類腰骨　15カワハギ類腰骨　16カワハギ類背鰭棘　17カツオ右上顎骨　18カツオ左上顎骨（内側）　19カツオ右歯骨（内面）　20カツオ左歯骨　21カツオ右主鰓蓋骨（内面）　22腹椎　23～28尾椎

PL17

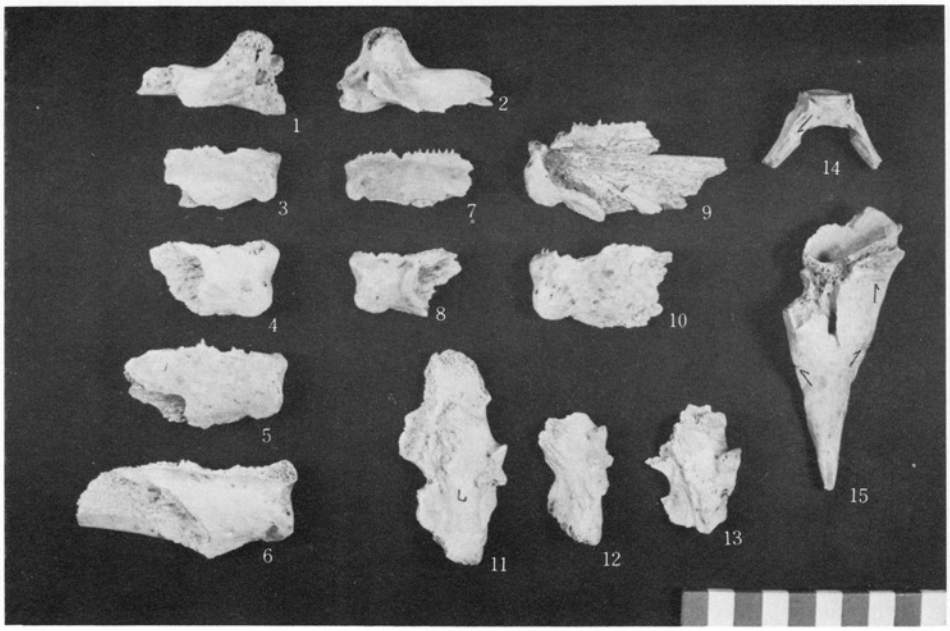


マダイ（ほぼ最小最大のものを含めて示す）　1～5前頭骨　6上後頭骨　7～8右前上顎骨　9～12左前上顎骨　13右上顎骨　14左口蓋骨　15右口蓋骨(内面)　16左舌顎骨　17右歯骨　18・19左歯骨　20関節骨　21左前鰓蓋骨　22右前鰓蓋骨（内側）　23腹椎　24～26尾椎



マグロ類　1左上顎骨　2左歯骨　3左関節骨　4左方骨　5副楔骨　6左前鰓蓋骨　7左擬鎖骨　8左肩甲骨　9左肩甲骨後面　10～12鰭棘

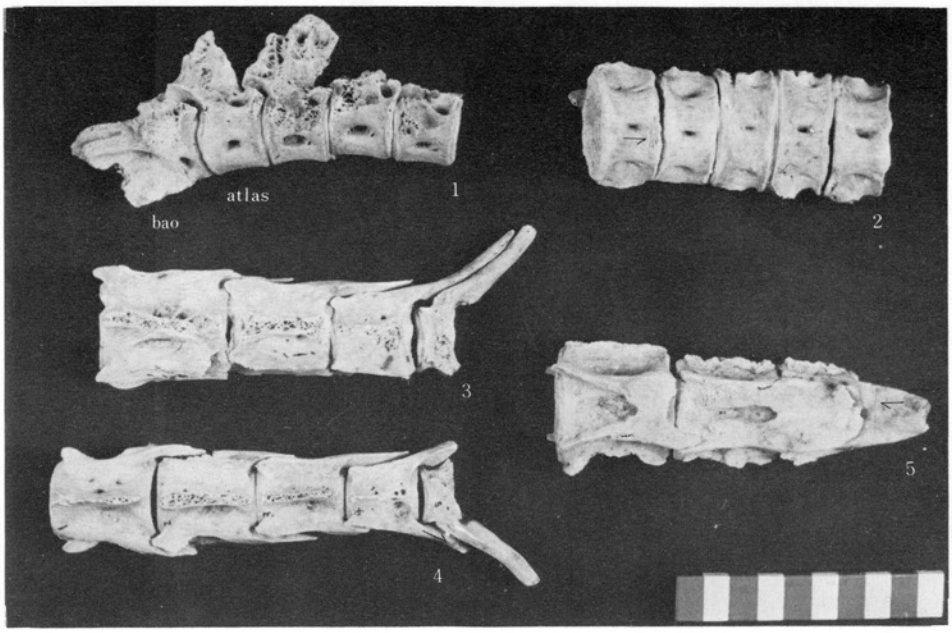
PL18



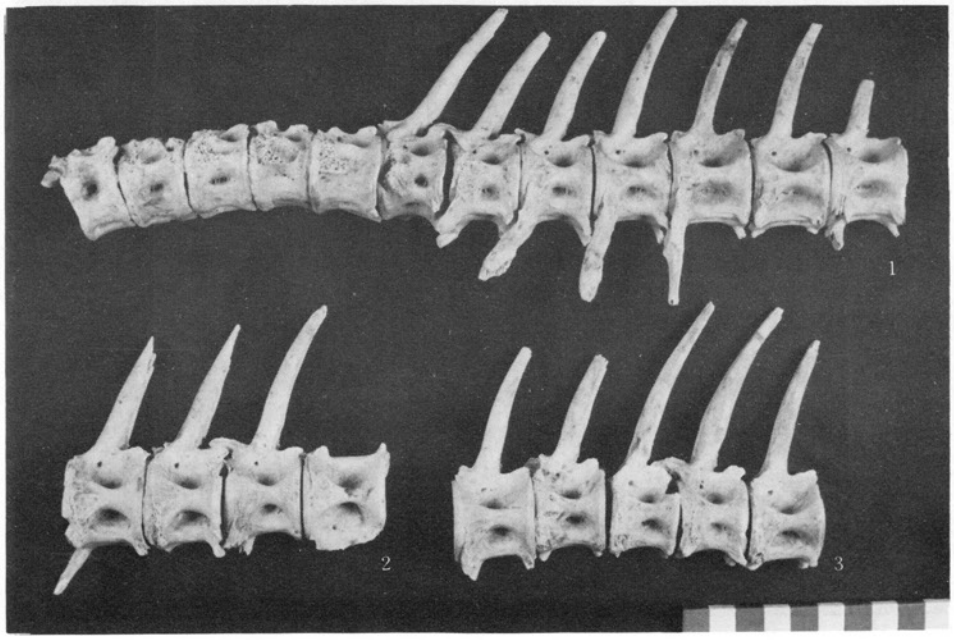
マグロ類　　1右上顎骨　2左上顎骨　3～6右歯骨　7～10左歯骨　11～13左肩甲骨
14No.5尾椎骨　15No.5尾椎骨（最大のもの）

マグロ類擬鎖骨　　1・2右側擬鎖骨（内面）
3～6左側擬鎖骨（1・6は小さい個体、3は復元された最大のもの）

PL19



マグロ類　　1基底後頭骨、環椎、軸椎と腹椎の前部　2腹椎（腹面）　3尾柄部No.2～5
（1・3・4は側面、5は上面）4尾柄部No.1～5（尾椎末端の尾柄部No.1～4は幅広の隆起線を発達させ神経、血管両棘は伏して椎体に平行する）　5尾柄部No.2～4

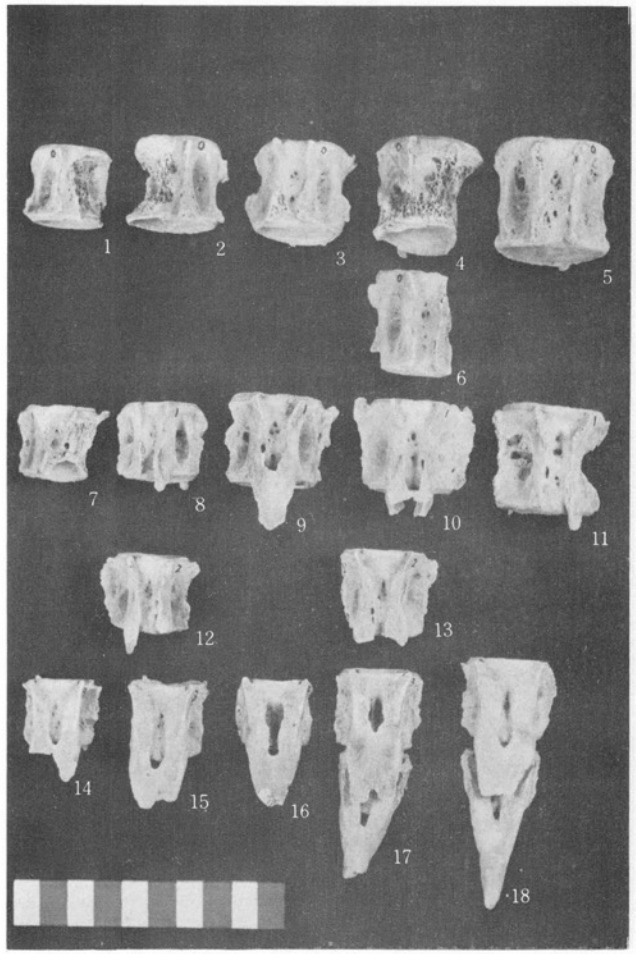


マグロ類　　1腹椎と尾椎部　2尾椎部　3尾椎部

PL20

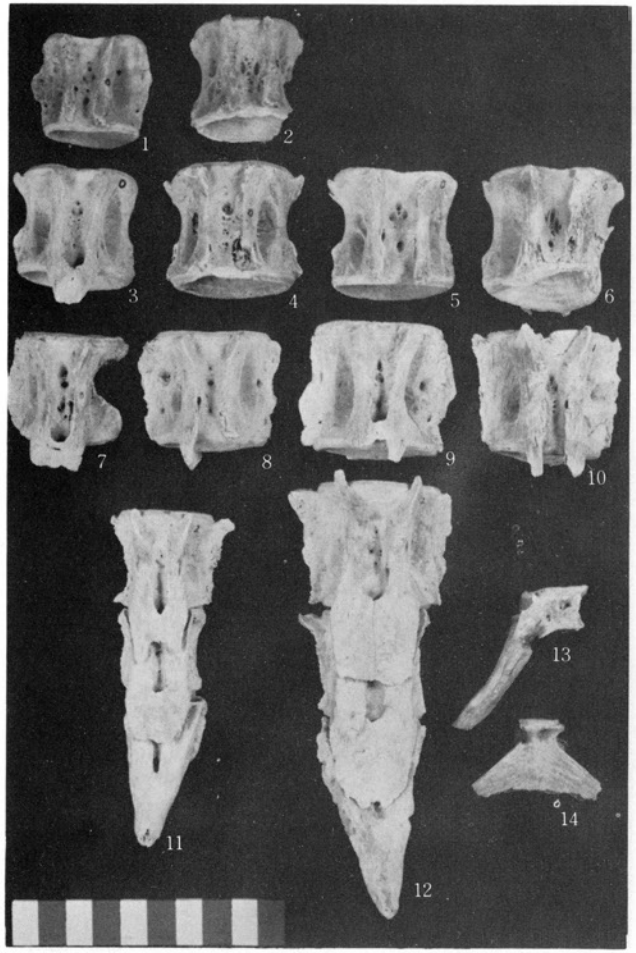
マグロ類椎体（B26Ⅱ層の一ブロック）

1～6尾柄部直前椎体　7～11尾柄部No.1　12・13尾柄部No.2
14～16尾柄部No.3　17・18尾柄部No.3～4



マグロ類椎体（D24Ⅱ層の一ブロック）

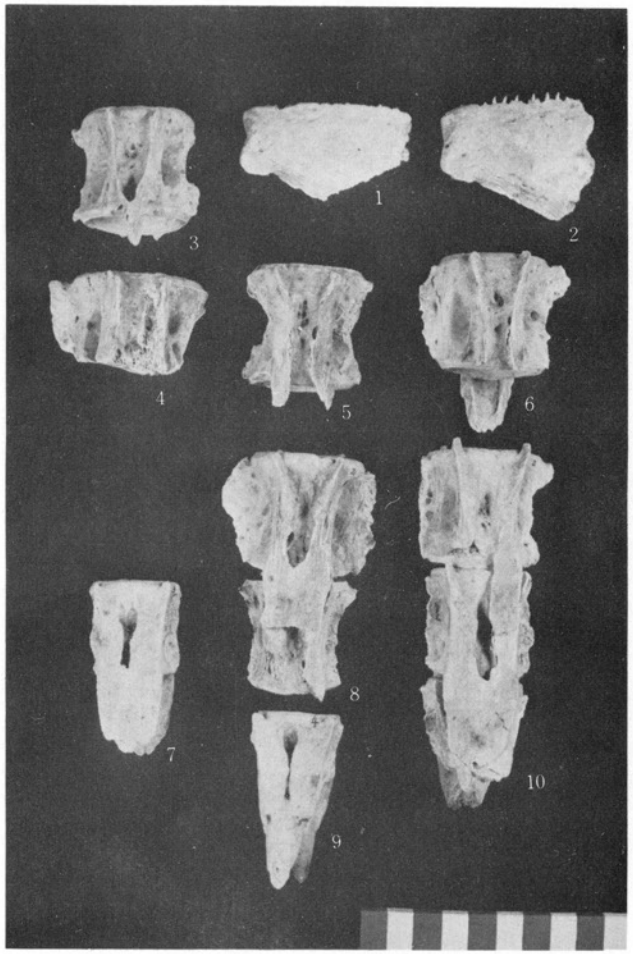
1～6尾柄部直前椎体　7～10尾柄部No.1椎体　11尾柄部No.2～4
12尾柄部No.2～4　13尾柄部No.5　14尾部棒状骨



PL21

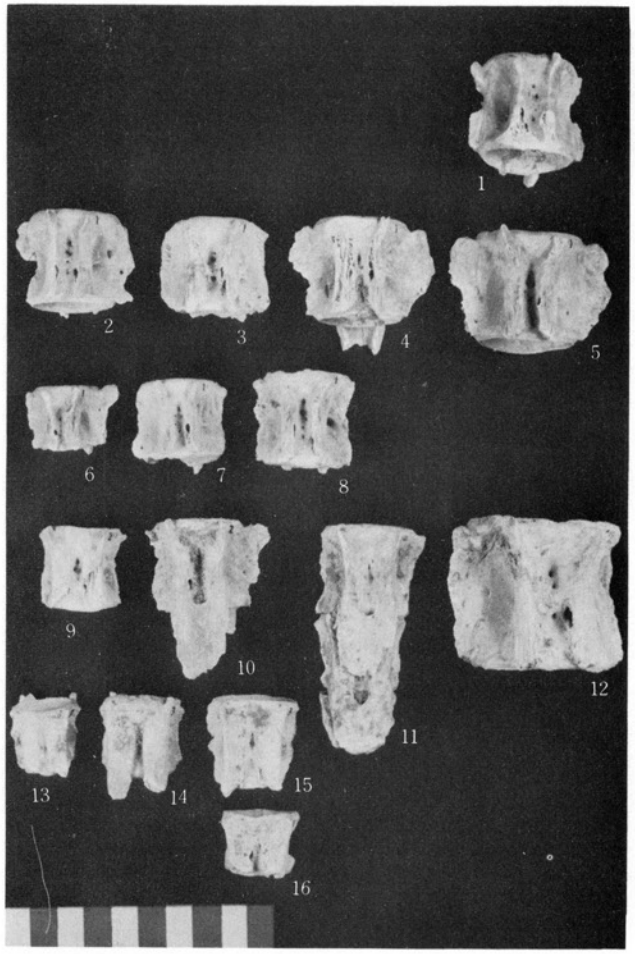
マグロ類椎体（E24Ⅱ層の一ブロック）

1・2左歯骨　3尾柄部直前椎体　4～6尾柄部No.1　7尾柄部No.3
8尾柄部No.2・3　9尾柄部No.4　10尾柄部No.2～4

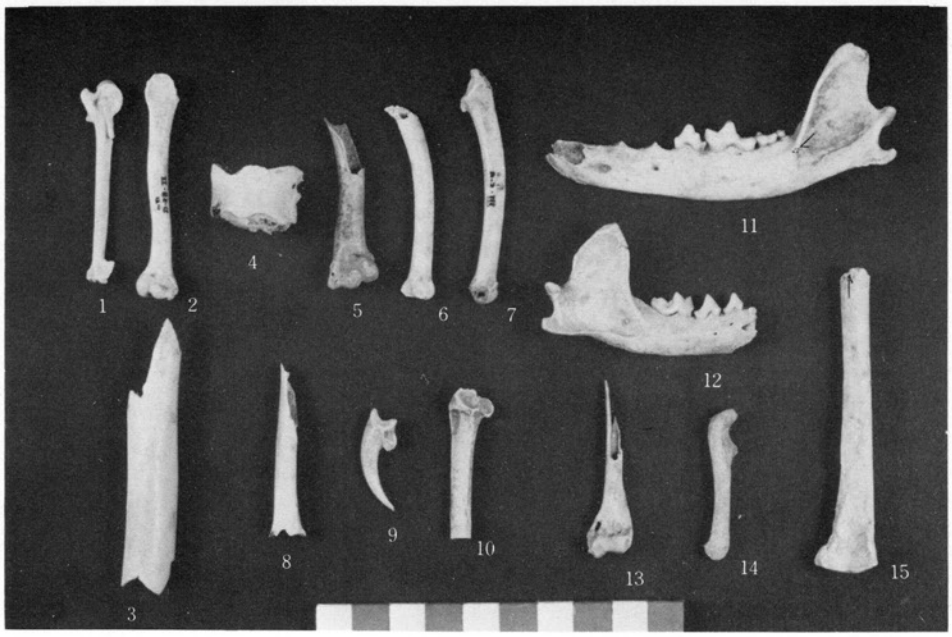


マグロ類椎体（B・Ⅱ層の一ブロック）

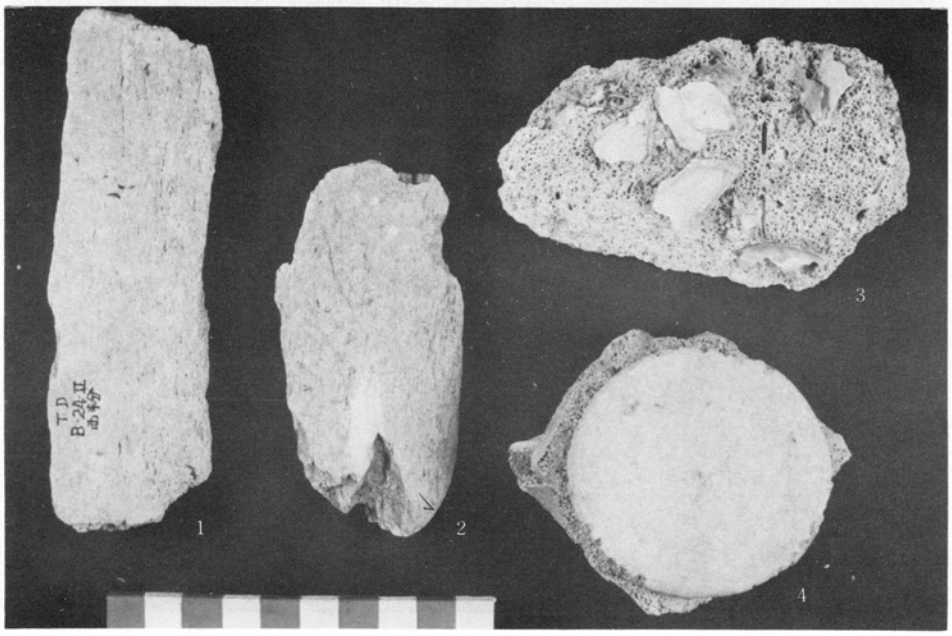
1尾柄部直前椎体　2～8尾柄部No.1　9・10尾柄部No.2　11尾柄部No.2～4
12尾柄部No.2　13～15尾柄部No.3　16尾柄部No.4



PL22



1ウ類右中手骨　2カモ類右上腕骨　3カモ類上腕骨片　4キジ頭蓋（下が後頭部）5キジ左上腕骨　6キジ左尺骨　7キジ右尺骨　8キジ大腿骨　9ワシ・タカ類末節骨　10カラス左尺骨　11キツネ左下顎骨　12カワウソ右下顎骨　13ムササビ左上腕骨　14イヌ右尺骨（幼体）　15ホンドオオカミ左中足骨Ⅳ

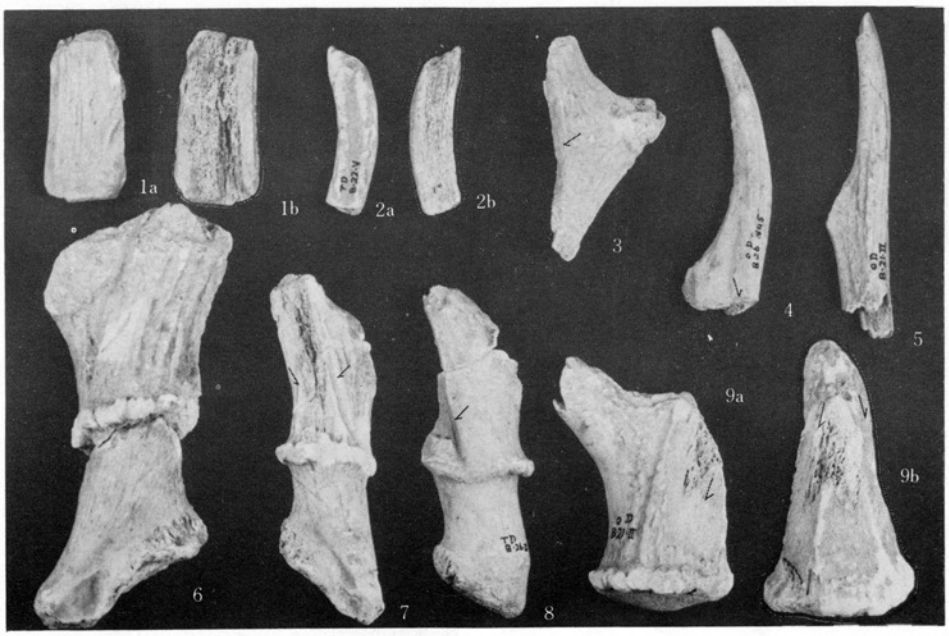


クジラ類　　1長方形の切断　2下端が若干磨耗　3脊椎骨海綿質部分、イガイが付着　4小椎体

PL23

オットセイ（1～5）、糞石（6）、シカ（7～9）

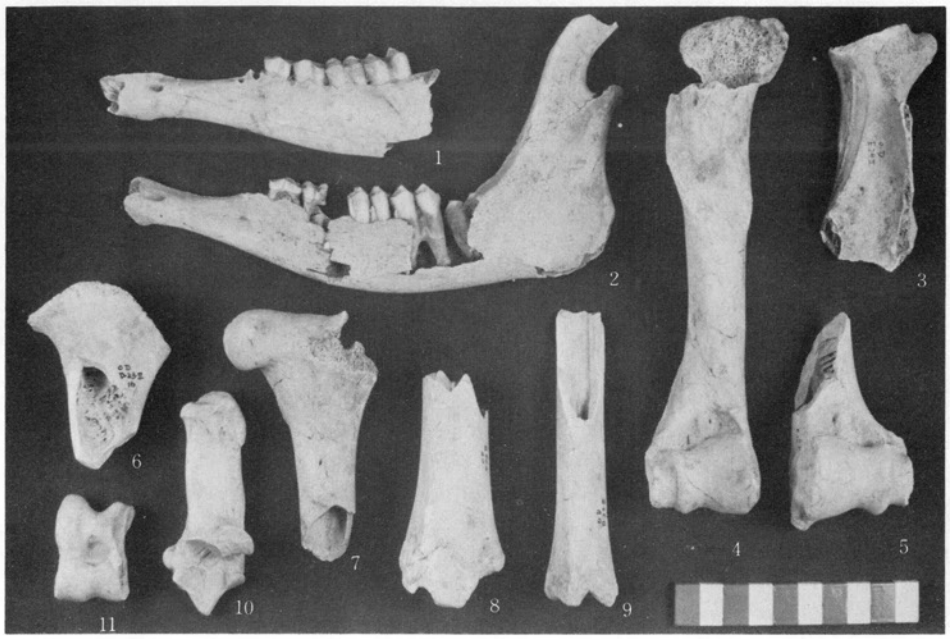
1右肩甲骨　2右上腕骨　3右尺骨　4右脛骨　5左踵骨　6糞石　7前頭骨片
8中手骨近位端と足根骨(病変骨)　9右距骨



加工痕をもつ鹿角（矢印が擦り切痕）

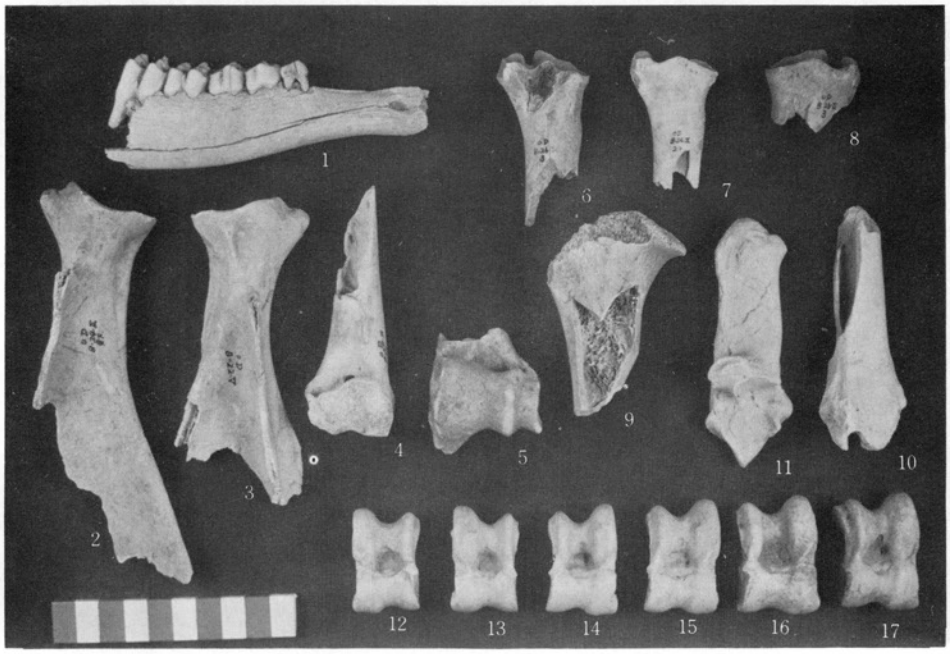
1a・b角幹半截切断　2a・b角幹半截切断　3角幹分岐部切断　4・5角冠部切断　6左角座骨＋角座　7右角座骨＋角座（擦り切痕）　8右角座骨と角座（擦り切痕）　9a・b右落角（角幹部に斜方向につく分割痕）

PL24



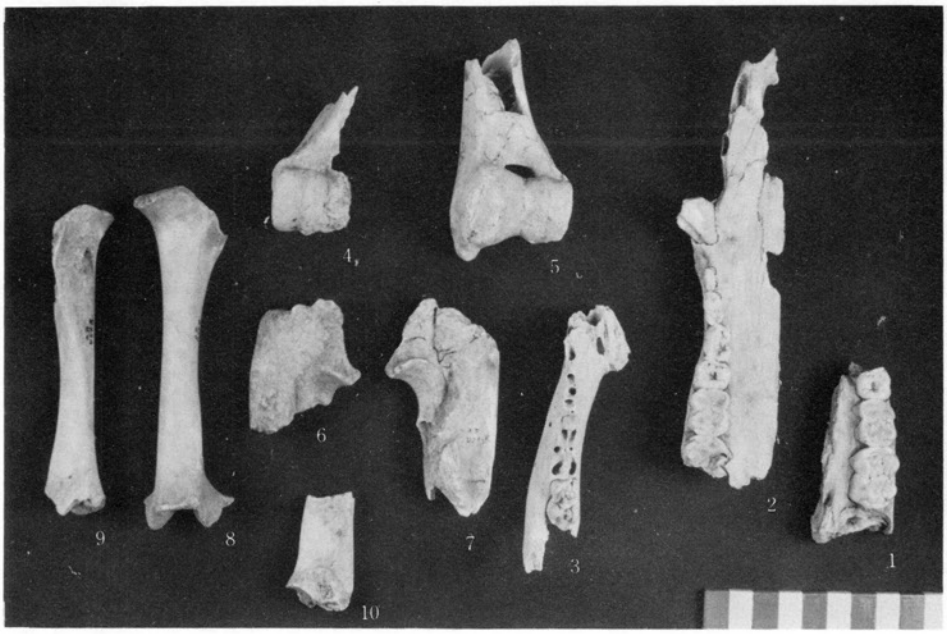
ニホンジカ（D・E）

1左下顎骨　2左下顎骨（M_3 未萌出）　3左肩甲骨　4右上腕骨　5左上腕骨
6左大腿骨　7左大腿骨　8左脛骨　9右橈骨　10右踵骨　11右距骨



ニホンジカ(B)　1右下顎骨　2右肩甲骨　3左肩甲骨　4右上腕骨　5左上腕骨　6右橈骨
7右橈骨　8左橈骨　9右大腿骨　10左脛骨　11左踵骨　12・13右距骨
14～17左距骨

PL25



イノシシ（D・E）

1左上顎骨　2右上顎骨　3左下顎骨　4右上腕骨　5左上腕骨
6右尺骨　7左尺骨　8左大腿骨　9右脛骨　10右踵骨

イノシシ（B）

1右下顎骨　2右肩甲骨　3左上腕骨　4右上腕骨　5左尺骨　6右大腿骨
7左大腿骨　8左大腿骨　9脛骨　10左踵骨　11右踵骨　12・13右距骨

PL26

昭和54年3月15日 発行

著者 及川 洵
遠藤勝博
牛沢百合子

発行者 岩手県陸前高田市教育委員会
〒029-22 陸前高田市高田町字館の沖110

印刷所 高田活版所
〒029-22 陸前高田市高田町字大町5